

日本醫史學雜誌

第 23 卷 第 3 号

昭和 52 年 7 月 30 日発行

原 著

- 平安時代の心身症—藤原道長を中心として……服 部 敏 良…(321)
ゼンメルワイスとプレンク—ハンガリー医
学史より—……………安 田 純 一…(331)
御雇教師ウイルヘルム・デーニッツ……………小 関 恒 雄…(349)
薬王寺考……………久 米 幸 夫…(362)
「気違いの湯」—一定義温泉の歴史聞書……………昼 田 源 四 郎…(370)
Rational and Empirical Methods in Early
Western and Eastern Anatomy……………Roger FRENCH…(427)

資 料

- 広瀬元恭の兄和達への書簡……前川久太郎, 古守豊甫, 古守泰典…(381)

例会記事……………(388)

雑 報……………(389)

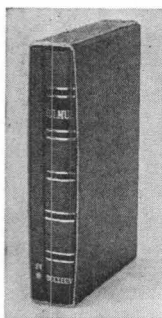
通 卷 第 1406 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷 2-1-1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京 15250 番
電話 03 (813) 3111 内線 544

クルムスターヘル・アノトミア

蘭景和內 和內蘭景 綱提範医 全3巻 全1冊



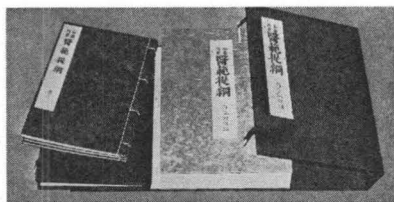
校閲および解説
東大名譽教授 緒方 雄三
東大名譽教授 小川 小鼎

富雄三 蘭学事始で主役を演ずるターヘル・アノトミアは解体新書翻訳の原著で、ドイツ語の原著第二版の蘭訳本である。今年は解体新書出版二〇〇年にあたる。この歴史的な機会を一層意義あるものとするため、われわれの先駆者が使用したのと同版のターヘル・アノトミアを複製。別巻として小川・緒方両先生の解説と、解体新書全四巻の縮写版を添付。

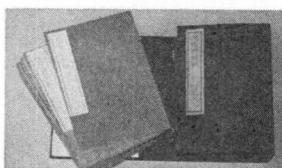
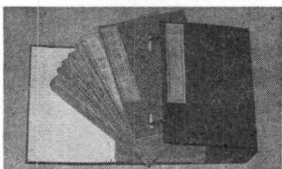
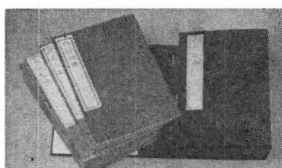
付・別巻
解体新書(縮写版)
限定 五〇〇部
価 二五、〇〇〇円
送料 四五〇円

内象銅版図
福井手漉局紙厚紙芯
折帖仕立・精巧コロ
タイプ印刷・濃紺地
布貼特製軼入
限定版三〇〇部
価 三八、〇〇〇円

医範提綱本文
土佐楮手漉和紙・精巧オフセット印刷・濃紺地布貼特製軼入
内象銅版図



本間玄調 内科秘録 瘍科秘録 続瘍科秘録



全14冊

本 文 特選因州楮和紙・コロタイプ印刷・和綴じ 軼函Ⅱ内
科秘録 金茶毘子織 瘍科秘録・続瘍科秘録 紫紺紋柄装・
豪華特製 上質紙張美麗箱入 価Ⅱ内科秘録 拾七万円
瘍科秘録 拾貳万円 続瘍科秘録 八万円

全12冊

解 説
本書は、華岡青洲・シーボルトに師事して出藍の誉れ高い日本外科学の先覚者、棗軒・本間玄調の著作である。当時医師の金科玉条とされ、特に正統瘍科秘録は、華岡流の外科学の奥義の秘法を公開したもので、天下の耳目を聳動させたといわれ、ために玄調は青洲より破門されたと伝えられている。
内科秘録は、玄調六十一才の著で、漢方内科に非凡の学識を示し、再度当時の医学界を驚嘆させたものである。
瘍科秘録・内科秘録共に稀観本として、入手・閲覧が困難で、現在も尚医学教課の資料・参考書としても高く評価され、医学の高度に進歩した今日も依然として光彩を放っている。この巧芸版は用紙・印刷・製本等に現代技術の粋をつくして、原本に忠実に復刻したもので、医学者の研究・教育資料として、また、古典籍愛好家の鑑賞用・保存用として、貴重な文献である。(矢数道明氏蔵)

全5冊

平安時代の心身症

——藤原道長を中心として

服部敏良

平安時代ことに道長を中心とした摂関時代には、「もののけ」と称する特殊な病気があった。元来、「もののけ」は、死人の怨霊の祟りといわれ、この時代には病気は、すべてこの「もののけ」によって起るものと考えていた。やがて、「もののけ」によって起る病気をも「もののけ」というに至った。

「もののけ」すなわち、物怪は、元来、中国でいわれ、史記に記されている。当時の人々の知識によって解決し得ない自然界の異変が起きたとき、人々は、この異変を物怪によるものとした。物怪とは声も形もない妖怪のごときものとしていた。このような思想は、わが国にも伝えられていたが、桓武天皇の御代、時の皇太子早良親王は、藤原種継暗殺事件に連坐して、延暦四年（七八五）淡路に配流の途中、船中で薨ぜられた。もちろん、皇太子は藤原氏の政争に捲込まれた犠牲者で、時の人々は皇太子の無実を信じ、その死を悼み悲しみ、藤原氏の専横に大きな憤りを抱いていた。その後延暦八年（七八九）十二月二十八日、時の皇太后（高野新笠）が崩ぜられ、翌九年閏三月十日、皇后（藤原乙牟漏）も亦崩じ、しかもこの年痘瘡が流行し、皇太子（安殿親王）も亦病氣となり、延暦十一年に至るも平癒しなかった。同年六月十日、これ

を陰陽寮に占わせたところ、早良親王の祟りの故と上申した。このため、親王に崇道天皇と謚名し、諸陵頭調使王を淡路に遣し、その靈に奉謝せしめた。その後も薬子の乱に連坐した伊予王及びその母藤原吉子等も、その罪を許され本位に復した。いずれも死者の怨靈の祟りをおそれた結果である。かくて、国家に不祥事のある毎に、怨靈の故と人々の口の上るようになった。そこで、英邁な嵯峨天皇は御遺戒の中に「世間之事、物怪あるごとに祟を先靈に寄す、是れ甚だ謂れ無き者也」と、これを否定し戒められたのである。

にもかかわらず、『続日本後紀』には、しばしば之を取り上げて記述されているのは、この書の編纂者、春澄善繩に大きな関係があった。春澄は文章得業生となり、天長九年（八三二）東宮学士、ついで翌十年文章博士となり、貞観二年（八六〇）参議に任ぜられ、ついで太政大臣藤原良房等と共に『続日本後紀』の編纂を命ぜられ、貞観十二年二月十九日、七十四歳で死亡した。『三代実録』によれば、

人と為り陰陽を信じ多く拘忌する所なり。物恠有る毎に門を杜し齋禁す

とあるごとく、深く物怪を信じていた。したがって先帝の戒と雖も、敢えて之に服しなかつた。『続日本後紀』には、

今物恠有るに随い、卜筮を司らしむ。先靈の祟り卦兆に明かなり。臣等信を擬す。即ち遺語の旨に忤い、用いざれば則ち当代の咎を忍ばん。進退惟谷れり。（中略）卜筮の告ぐる所、信ぜざる可らず。君父の命、量って宜しく收捨すべし。然らば則ち改むべきは之を改めん。復何の疑かあらん。朝議之に従う

と記している。

かくて朝野を問わず、陰陽道にもとづく迷信が流行するにつれ、多くの人々の間に怨靈すなわち御靈の觀念がうえつけられ、これが民間の宗教行事の形となって、御霊会と称するものがはじまった。無実の罪を得て非業の死をとげた人々の靈を慰めるとともに、祟りの無からん事を祈った民間人の行事である。この影響を受けて朝廷に於ても御霊会を催すに至ったことは『三代実録』貞観五年（八六三）五月二十日条に明かである。

このように、民衆の間に怨霊思想がはびこり、御霊会が盛んとなったとき、菅原道真の事件が起き、道真は藤原時平のため太宰権帥に左遷され、やがて延喜三年（九〇三）配所で死亡した。道真の死後、六年を経て、延喜九年、時平は年齒僅か三十九歳で死亡し、ついで同十五年、醍醐天皇も疱瘡にかからせられ、同十七年春から翌年夏にかけ咳病が流行し、二十二年には貞頼親王、是忠親王が薨ぜられ、さらに二十三年（延長と改元）三月、皇太子保明親王も薨ぜられた。しかも、大の雷嫌いの天皇の宮殿が落雷のため焼失する等の不祥事が続出し、これこそ道真の怨霊の祟りとおそれた朝廷は、早速道真を元の正二位右大臣の位に戻し、道真の霊を慰めると共に、祟りの解除を祈ったのである。

このように、怨霊思想は朝野に深く信ぜられる折、世は道長を中心とする撰関時代になった。この頃の政治は世に閥族政治といわれ、天皇は好むと好まざるとにかかわらず、藤原氏の女をいれて妃となし、藤原氏は女の産んだ幼少の皇子を立てて皇位につかしめ、政治上の権勢を握る所謂外戚の権をほしのままにすることを最大の願望としていた。この為には同族、兄弟と雖も互いに讒誣中傷を敢えてして、これをおとしいれ、自らの立場を有利とすることを辞さなかつた。このため不幸敗者となったものの怨みは深刻であり、また勝者となったものも敗者の怨み、復讐を畏れて、心中恐怖の念におびえ、さらには相手をおとしいれた良心の自己苛責に悩むのは当然である。ことに、この時代の貴族のごとく虚弱な体格を持ち、繊細な神経質の性格、月の傾くのに涙を流し、こおろぎの鳴声に物のあわれを感ずる感傷的な人々は、怨霊の祟りの恐ろしさを切実に感じていたのである。

このような民衆の悩み、苦しみは仏教の力によって救わるべき筈であるのに、当時の仏教は徒らに現世利益を説いて民心をして一層不安におとしいれ、ただ加持祈禱のみが、彼等を救い得るものと喧伝につとめていた。したがって、当時の人々は、きわめて些細な不祥事も、これを怨霊の祟りとし、加持の力を頼りとして之を払うことに執心した。況んや、病気に悩むとき、これこそ怨霊の祟りとしておそれたのであった。したがって、病気に罹ると、医師の治療を受けることよりも、まず僧侶による加持祈禱によって、病人を苦しめている「もののけ」を退散せしめることが第一と考えられてい

た。

僧侶は、このような場合、まず、「よりまし」を選び、これを病人の傍ら又は次の室にひかえさせて加持を行うのであるが、加持がいよいよ最高頂に達したところ、「よりまし」は失神状態となり、病人に対し、いろいろの怨言を述べたるようになる。こうなると、「もののけ」は、病人から離れて「よりまし」に乗り移ったことになり、加持は成功したというのである。このような加持の有様は、『栄花物語』や『紫式部日記』に詳しく記され、また『枕草子』には、一人の僧侶による清らかな加持の模様を記している。

ここで問題となるのは、「よりまし」の選定である。もしも、病人と全く無関係なものを選んだとすれば、病人に対する怨言が、的を離れた無意味なものとなり、むしろ滑稽にさえ思われ祈禱効果は台無しになって仕舞う。

また、暗示にかからぬようなものを選んでも、効果の無いことはいうまでもない。そこで、「よりまし」には、病人の家に長年使えている小女・女中などが選ばれる。家庭事情もよく知って居り、病人が誰の怨みを受けているかを熟知しているからであり、また彼女等は、きわめて暗示にかかりやすいからである。

いうまでもなく、怨霊の祟りなどのあり得る筈もなく、また、これによって病気の起ることもあり得ないのであるが、当時の人々は真剣にそのように考えていたのである。

結局、「もののけ」という当時の病気は、元来は人間の肉体的疾患であるが、この疾患による苦しみを怨霊のたたりによって起るもの、「もののけ」のなす業と考え、このような精神的ストレスによって、病苦が一層増大する例であり、さらに、加持祈禱による精神療法によってストレスが除かれて病苦が軽減するのであって、加持祈禱のみによって、病気の治る筈もなく、医師による医療を待たねばならぬ事はいうまでもない。

すなわち、「もののけ」は、池見酉次郎教授（『続心療内科』）のいうごとく、「身体因によって発病したものである、患者の性格的なゆがみや発病後に起こった精神的な問題が症状を悪化させたりしており（中略）、心理面からの治療を加味す

ることによって、病状の好転が期待されるもの」に該当するものといえよう。

以上は、「もののけ」と称する一般病を心身症の対照として検討したが、さらに、具体的な例について考究してみよう。

王朝貴族の代表的人物といえば、誰しもが「この世をばわが世とぞ思う」と望月の歌を詠じ、一家三后の栄を誇り、わが世の春を謳歌した藤原道長をさすであらう。ところが、この道長に著名な心身症が認められるのである。道長のこの病気は胸病である。

この胸病は、寛仁二年（一〇一八）四月九日に起り、同日の『御堂関白記』には、

亥時許りより胸病に悩み甚だ重し、丑時許り頗宜し

と記し、ついで十日、十一日、十二日と、「心神不覚」「心神雖不宜」などと記し、閏四月十六日条には、「心神尚悩み不覚、夜法性寺五大堂に入る」と記し、このような胸病による苦しみが六月末迄に、三十回にも及んでいる事が、『御堂関白記』・『小右記』によって知ることができる。七月以降『御堂関白記』は、これを記していないが、発作が無かったのか、軽症で記さなかったのかは明らかでない。『小右記』も七月以降九月末迄欠落し、之を明らかにし得ないが、おそらく、このような苦しみは或る程度持続していたものと想像される。

いったい、このような胸病とは、どんな病気であったのか、『小右記』寛仁二年閏四月十七日条には、
大殿の御心地太だ悩み思しめす。去夜悩み給うの間、叫び給う声甚だ高く、邪気に似たり

とあり、さらに『小右記』同年閏四月二十四日条には、

按察大納言（中略）及び他卿多く参入す。簾前にて雑事を談ぜらる。尋常の如し。幾ばくを経ず俄に御胸病発動し、重く悩み苦しみ給う。声太だ高く叫ぶ如し。僧等相集りて加持す。靈氣人に移りて平復せらる

と、胸病の病状を記している。平素の如く人々と雑談中、突然苦しみ、大声をあげて叫び出す有様で、一応、狭心症とか

心筋硬塞等のごとき重篤な病気が想像される。しかし、このような病気であったとすれば、三十回にもわたって発作の繰り返す筈もなく、したがって、一応心臓神経症のごとき病気が考えられる。今日、胸痛といえは呼吸器系疾患のごとく考えられるが、当時では胸部にある肺・心臓の病氣も亦胸痛といわれたことはいうまでもない。果して心臓神経症と断定し得るや否やは別として、一応このような病氣を想定することが妥当であろう。

さて、この病氣の経過をみるに、前述のごとく、四月より六月末(多分八月迄)迄持続し、ついで九月より十二月初め迄殆んど発作が起っていない。ところが、同年十二月二十八日より再び発作が起り、翌寛仁三年四月頃迄持続し、その後は、時々軽度の発作が起っているのに過ぎない。

いったい、どうしてこのような経過をたどったのか。それには、道長の肉体的、精神的状況を観察する必要がある。道長は、すでに長和五年(一〇二六)五月頃より、しきりに渴を訴え、水を飲むようになったことが、『小右記』に記されているが、さらに同年五月十日条には、

摂政殿卅講請僧阿闍梨頼秀来る。密語して云う。講説の間仏前に坐せられ、中間必ず簾中に入り給う。若しくは飲水歟。紅顔減じて氣力無し。慎ませらるべきか。其期遠からざるか

と、このころ道長は盛に水を飲み、顔色も悪く無氣力な状態にあったと思われる。このような道長の病氣は、当時飲水病と云われた病氣で、今日の糖尿病に当ることはいうまでもない。さらに、道長は寛仁二年十月頃より、視力がおとろえ、同年十月十七日条の『小右記』には、

大殿清談せられ、次いで目見えざる由を言う。近づくも則に汝の顔殊に見えず、申して云う。晩景と昼の時と如何、仰せと云う。昏時と白昼に因らず、只殊に見えざる也

と記し、視力のおとろえを明らかにすると共に鳥眼でなかったことも明らかにしている。道長自身も『御堂関白記』、同年十一月六日条に、

東河に出で解除、是れ月來の間目明らかならず、仍て祓する所也

と、視力のおとろえを認めている。

おそらく、糖尿病に併発した白内障に罹っていたものと思われる。道長は、当時このように糖尿病・白内障に悩んでいたことが明らかである。

しからば、当時の道長の精神状況は如何であったか、道長は三条天皇とは常に不仲の状態にあり、三条天皇の眼病ついで失明と共に、天皇に讓位をせまったが、天皇も仲々之を聞きいれられず、ついに、次帝の皇太子に天皇の皇子敦明親王をたてる事を条件として、寛仁元年一月、道長の外孫敦成親王に位を讓られた。ここに後一条天皇が即位され、ついで三条院は同年五月九日崩御された。道長にとつて敦明親王が皇太子としておわしますことは、きわめて不利であり、二代にわたつて外戚の権を握らんとする道長の願望に水をさすこととなるため、三条院の崩御後、敦明親王を陰に陽に圧迫、干渉し、ついに親王は、同年九月、位を後一条天皇の弟君敦良親王に讓られることとなった。これこそ道長年來の願望の成就であり、まさに道長の思い通りになったわけである。しかし、このためには三条天皇との約束を反故にし、それ故に三条天皇の怨みをおそれる結果となった。寛仁元年は事無く終つたが、寛仁二年二月より三月にかけて、皇太子敦良親王は病気に悩ませられ、仲々治らなかつた。これこそ三条天皇の怨霊の祟りとおそれていたところ、ついに、このような精神的ストレスが重なつて、四月九日、胸病の発作が起つたものと思われる。

九月になり、道長の女威子は、後一条天皇の中宮にきまり、道長はその準備に忙殺されていた。やがて十月十六日威子の立後の儀が行われ、道長は前述のごとく一家三后の榮を誇つて望月の歌を詠じたのである。因みに一家三后とは、道長の女彰子は一条天皇、妍子は三条天皇、威子は後一条天皇の妃となつたことをいう。この頃の道長の心境は、まさにわが世の春であり、オイフオリーの絶頂にあつたといえよう。したがつて、三条天皇の「もののけ」のおそれなども吹きとんで、朗かな日々を送つたものと思われる。

しかるに、同年十二月十七日、一条天皇と定子との間に生まれられた敦康親王が薨せられた。この親王は天皇の第一皇子であり、当然帝位をふむ方であるが、道長には、天皇と彰子との間に生れた敦成親王を立て、前述のごとく外戚の権を握らんとする野望があり、このため敦康親王が帝位をつぐ事を妨害し、いじめ奉ったのである。こうした関係の親王が薨せられたことは、再び道長に大きな精神的ストレスを与える結果となり。ついに十二月二十八日、再び胸病の発作に悩むこととなった。『小右記』同日条には、

大殿午剋許御胸を悩み給う、夜に入り退出せらる

とあり、道長は糖尿病に加うるに白内障を病み、しかもこうしたストレスの為にその後もしばしば胸病に悩み、寛仁三年三月十八日条の『小右記』には、

大殿胸病を煩い給うの由、章信朝臣より告ぐる有り、

宰相午剋許、殿より罷り出で云、丑剋許りより御胸大いに発し給い不覚、只今聊か陳有り、邪気人々に駆移る

とあり、更に同月廿日条には、

宰相来る、少時大殿に参る、夜に入り来り云う。猶重く悩み給う。御声甚だ高く堪え難きの氣有り

と記し、ついに二十一日道長は出家したのである。同日条の『小右記』には、

宰相来り云う。大殿出家し了ぬ。法印院源戒師となる。

かくて、道長は浮世を離れ、政治から解放されて心のやすらぎを得たのか、ストレスもとれて胸病の発作も次第に少なくななり、安堵したのであった。

以上、道長の胸病についてその概況を記した。これによって明らかのごとく、道長は、糖尿病・白内障のごとき肉体的疾患に加うるに、大きな精神的ストレスを受け、胸病という病苦に悩み、ストレスの解消により、病苦も除かれるという典型的な心身症の病型を示している。なお、この時代には三条天皇の眼病も原発性炎症性緑内障といわれ、心身症の対照

となる病氣であり、また、藤原定家の喘息も心身症と考えられるものであるが、これらは他日稿を新たににして検討したい。

精神身体医学は、近時脚光を浴びた医学の一分科であり、心身症は、現今のごとく文化の進歩とともに複雑な政治・経済下に発生する特有な病氣と思惟されているが、すでに、平安時代にも、このような病氣のあったことは、当時の世想の複雑さを示すものとして興味深いものがある。

(本稿の要旨は昭和五十一年十月二十九日、第八回消化器 P S M の会で講演した)

Psychosomatic Illness in the Heian Era
based chiefly on the case of Fujiwara Michinaga
by
Toshiro HATTORI

It was believed in the Heian era that “Mononoke” or evil spirits existed. People thought that diseases were caused by “Mononoke”, not by organic disorders. Therefore, the condition of a disease was very changable according as how far they feared an evil spirit.

We can easily find such cases in the history of the Heian era. For example, Fujiwara Michinaga's case who had an illness of the chest is a typical one. Michinaga suffered a heart attack in April (1016) at the age of fiftyfour just when Emperor Sanjo died. The demise of Emperor Sanjo had been demanded by Michinaga so that it seemed that he died because of an excess of anxiety. Michinaga feared that he would be possessed by Sanjo's evil spirit. In fact, some accidents occurred in the surroundings of Michinaga following Sanjo's death. Perhaps because he believed that they were all caused

by that evil spirit, he fell ill simultaneously. However, he got well as soon as his daughter got married to Emperor Goichijo, the next Emperor, in September of the same year. But three months later, the son of Emperor Ichijo, who had been designated to succeed Sanjo but was prevented from doing so by Michinaga died. In a short time he suffered a heart attack again. So he decided to console himself against those evil spirits, by becoming a bonze. He got well after he entered in the priestly life.

ゼンメルワイズとプレレンク

——ハンガリー医学史より

安田 純一

I

ラヨシュ・ジラヒ作『瀕死の春 (Halalos Tavasz)』(高橋健二訳、新潮文庫)という小説の終の部分に救急医の日記が出てくる。その書き出しは「五月五日 水曜日 午前八時半、外ヴァツィイ街に呼ばれた。市電五七番路線の電車がランブ工場の職工を轢いたのだ。大した傷ではないが、ロクス病院に収容した。」というのである。

昭和四八年に International Association of Biological Standardization (IABS) の第一三回総会に出席するため始めてダベストを訪れた際、この町にあると聞いていたゼンメルワイズ博士の像を見ておきたいと思ひ、あれこれと尋ねてみると、セント・ロクス病院の前にあることがわかった。ロクス (Rochus) とはフランス中世の聖者で、托鉢僧としてローマに巡礼に赴き、疫病に悩む人々を救ったが、帰国した際にスパイと間違えられて捕えられ、獄死したと伝えられている。大腿に矢が突刺さった像を後述のゼンメルワイズ医学史博物館で見た。

この病院は現在ではゼンメルワイズ病院 (Semmelweis Kórház) という名に変わっているが、『瀕死の春』にある「ロクス病院」または「聖^{Szent}ロクス病院 (Szent Rokus Kórház)」という古い名もよく知られている(図1)。ゼンメルワイズ博士は

維納から引きあげてブダベスト大学医学部産科に勤務の傍ら、無給の医長として一八五一年から一八五五年までこの病院で働いていた。ここから程遠くないところにゼンメルワイス街 (Sennelweis utca) という通りがある (図2)。

博士の像は病院の西側の Gyulai Pal 街に立っており、白堊製で足もとには赤児を抱いた母親の像などがしつらえてある (図3)。

ゼンメルワイス博士は現在のハンガリーでは民族の英雄扱いにされており、ブダベスト大学医学部は別名を「ゼンメルワイス医学部」と称する。また、Duna 河の右岸ブダ側にはゼンメルワイス医学史博物館がある。昭和五〇年、第一四回国際輸血学会の帰途、再びブダベストを訪れた目的は一にこの博物館を見るためであった。Apród utca 133 にある博物館の建物にはゼンメルワイス博士の両親が住んでいたことがあり、博士もそこで生まれた。二階には古代からのハンガリーを主とした医学史の資料が展示されているが、その一室は一九世紀のハンガリーの中流家庭の居間を復元し、博士の両親と博士夫妻の肖像画が飾られ、博士の居室に入ったような感じを受ける。博士はブダベストで生を終えたのではなく、患者として維納の精神病院に送られ、あれ程までに声を大にして戦ってきた創傷感染による敗血症で自らの命をおとしたのであった。

博士の著書「Die Aetiologie, der Begriff und die Prophylaxis des Kindbetfiebers」が出版されたとき*、当時の医学界は拳って悪評を浴びせ、Siebold 教授の如きは「Genug! über die Leicheninfektion ist das Urteil gesprochen.」と云っている。

日本研究者として有名なシーボルトの家系には祖父 Karl Kaspar von Siebold 以来外科、産科の医師が輩出してゐる。シーボルトの従弟 Eduard Kaspar Jakob von Siebold (1801—1861) は一八三三年以来ゲッティンゲン大学産科の教授

* 発行年は一八六二年となっているが、実際は一八六〇年末に出版された。



図 2 ゼンメルワイス街入口の記念板。
「多くの母親の救済者ゼンメルワ
イス」と刻まれている



図 1 ゼンメルワイス病院



図 3 ゼンメルワイス博士像

(その前はマルブルグ大学産科の教授)で、ゼンメルワイスを罵倒したのはこの人である。呉秀三『シーボルト先生生涯及功業』第二版三一頁に肖像写真が出ている。一八六一年と一八六二年との間にゼンメルワイスは公開状を四通公表したが、その一通はこの Siebold 教授に宛てたものである。

B. Mayrhofer: Kurzes Wörterbuch zur Geschichte der Medizin の Eduard Siebold の項には「彼は自然哲学に関しても、産科学、また当時すでに発展しつつあった婦人科学に関しても、時代おくれの考え方から離れることができず、そのためゼンメルワイスに対しても理解を示すことなく敵対して、古い道を歩み続けた。」と記されている。

II

古い時代のハンガリーの医療については、聖 Isván 王(図4)が按手によって病人を医した伝説やハンガリーの王家からチューリンゲンに嫁し、寡婦となった後、二四歳で亡くなるまでマルブルグで病人の救護に献身した聖エルセプトの話などがある。

ハンガリー出身の医学生は古くから外国の大学で活躍していたが、奥匈国内では維納大学出身者には帝国全域で医師免許を認められたのに、ハンガリーで教育を受けた医師にはハンガリー領内ではか免許を認められなかった。そのため、ハンガリーの優秀な青年は維納に遊学し、そこに残って名をなした者が少くない。解剖学の Hyrtl 皮ふ科の Kaposi 耳科の Pollitzer 喉頭科の Schnitzler と云った維納学派の医学者はもともとハンガリー出身である。この Schnitzler の息が有名な作家で、作中人物の心理描写に巧みであったのは「お父上がいいつも人の咽喉の奥までのぞき込んでいたせいだろう」と冗談を云われたそうである。

* マルブルグの Elisabeth 教会で彼女を記念した彫刻などを見ることができる。



図 5

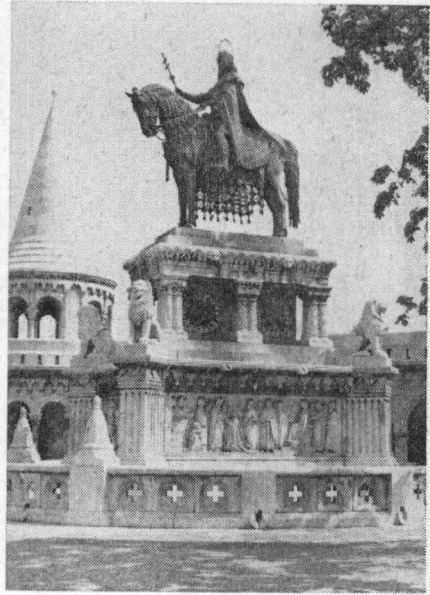


図 4

図 4 聖イシュトバン王の像
(Human 研究所 Joó 博士提供)

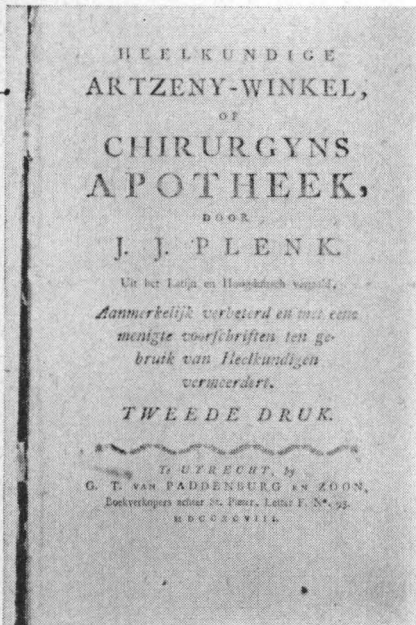


図 6

図 5 プレンクの肖像
(写真はゼンメルワイス医学史博物館提供)

図 6 プレンク外科用薬物書 (蘭訳)
第 2 卷の扉 (緒方医学化学研究所提供)

奥洪帝国で医学が栄えたのはマリア・テレジア女帝の時代からである。この女帝はすいぶん子沢山で、フランス王ルイ十六世の王妃マリー・アントワネットも末の方の王女である。痘瘡の流行によって夫のフランツ・フォン・ロートリンゲンと子供を二人までなくし、女帝自身も痘瘡にかかって、一七六七年には女帝の痘瘡快癒記念メダルが作られた。そのためではないとしても、女帝は医学の振興に力をつくし、ライデン大学からファン・スウィーテンを待医として招いている。

Gerard van Swieten (一七〇〇—一七七二) のよに男爵を授けられた) はブルルハーフ (Hermann Boerhave) の高弟で、師の業績を注解した “*Commentarii in Boerhavi aphorismos de cognoscendis et curandis morbis*” という著書はわが国の蘭学者の間でも有名である。彼はカトリック教徒であったため新教国オランダの大学に留まらず、一七四五年マリア・テレジアの招きに応じて家族を連れて維納に來り、医学教育の改革に腕をふるった。

この時代のオランダの医学書は Johannes de Gorter の内科書の宇田川玄随によるほん訳を始として、わが国で続々と訳書があらわれた。舶載医書のうち de Gorter と van Swieten の著書が最も請求が多かったという出島蘭館の記録は当時の蘭学の傾向をよく物語っている。斯くして van Swieten の著書 (宇野蘭齋訳『西医治要』、Anton Stoerck の内科書 (足立長壽訳『医方研幾』) などを通じて、わが国の医学は早くから旧維納学派と接触したのである。

一七六九年十一月にマリア・テレジア女帝はファン・スウィーテンの進言を容れてハンガリーの Timau (ハンガリー語では Nagyszombat) 大学に教授五名から成る医学部を設立させた。当時維納大学でさえ医学部の教授は四名で、全歐洲で医学部に五名以上の教授を有する大学は数える程であったことを思えば、これは破格の優遇と云える。一八名の候補者から選ばれたのは次の五名であった。

解剖学 : Wenzel von Trnka (Ritter) の称号を有する軍医、もと維納陸軍病院勤務)

病理学および実地医学 : Michael Schoreich (前職は Veszprém 県医師)

生理学及び薬物学：Adam Ignaz Prandt (Pétervárad 出身の医師)

化学及び植物学：Jakob Josef Winterl (シュタイエルマルク出身、前職はハンガリーの鉱山地区医師)

外科、眼科及び産科：Josef Jakob Plenk (陸軍外科医) (図5)

この大学は一七七七年の新学期から首都ブダに移転し、現在のブダペスト大学医学部の基礎となった。

III

富士川游博士によると、プレックは後に医業をやめて著述に専念し、ハンガリーの貴族に列せられたと云われる。彼は内科、外科、眼科、婦人科、小児科、皮膚科、梅毒科など各科にわたって学生の受験用の簡明な参考書とも云うべき *compendium* を著し、それがほとんどすべて蘭訳から日本語にはん訳されている。フィッセル (J. F. van Overmeer Fischer) はその著書 "Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk" 九四頁に Boerhave, van Gescher, Plenk の医書 "Bataafsche Apotheek, Chomel の家政辞典" J. Bujs の理科教科書等が日本人によって全巻、あるいは一部分を日本語に訳されていることを報じている。

わが国でプレックの医書に比較的早くから注目したのは吉雄耕牛であろう。プレックが一七七九年に維納で上梓した梅毒書の第二版の蘭訳本によって耕牛は『布斂吉徴瘡篇』を草した。これは未定稿本で、しかも部分訳であるが、プレックの梅毒学をわが国に紹介した最初のものである。耕牛は *Verbrugse* やプレックの書によって梅毒アメリカ由来説を唱えた。プレックのこの著書はさらに大槻玄沢『大西徴瘡方』、杉田立卿『徴瘡新書』としても訳されている。

次に、プレックの外科書 *Compendium institutionum chirurgicarum* (David Gescher 蘭訳) も耕牛が『紅毛秘事記』として和訳を試み、その子如淵にも訳書があると云われるが、最も有名なのは杉田立卿の『瘍科新選』である。他に新宮涼庭の『外薬則』、『外用方府』、新宮涼閣の『布斂吉外用方府』もプレックの訳本である(図6)。

ブレンクの著書を最も愛用したのは新宮涼庭一派であろう。訳書では上掲の他に婦人科書や、涼閣訳の解剖書（『解体則』）、涼閣・涼民共訳の『小児全書』等がある。文政年間に涼庭は私財を投じて京都に順正書院という医学校を建てたが、そこで用いられた参考書のうち解剖、化学、外科、婦人科、小児科はすべてブレンクの著書であった。

ブレンクの著書がわが国で愛読された理由として、オランダ以外の国と交易が許されていなかったため Boerhaave を祖とする de Gorter, van Swieten らの学統が却って純粹に受け容れられたこと、ブレンクの著作が学生用に簡明に書かれていて内容的にも、語学の上からもわが国の蘭学者の水準に適していたことなどがあげられる。その上に当時の蘭館医が好んでブレンクの著書を携行していたことも考えなくてはならない。

『蘭説弁惑』巻下、○外科の項には「船に乗りて来るは多くは技術一通り覚えたるものにて、修業のため出世を心懸る外科、内治を兼来るよし、折々は内科本業の人にて、學術研精のため、涉歴せんとて乗り来るもありとなり」となかなか穿った見解が述べられている。医師でないフィッセルも、日本の医師の質問が頗る研究的で、蘭人医師はその学識を試験されている観があったことを認めている。フィッセルは「予は自分の学識よりも、寧ろ携来れる二、三の書物に依りて、多少彼等を満足せしむることを得たり。」と正直に告白しているが、江戸でも長崎でも、先方の医師は日本人の質問に答えるためには、特に非専門科に関しては入門書を携行しているのが便利であり、それが日本側の趣向に合って、讓渡もしくは舶載を所望され、訳書も出て、いよいよ需要を多からしめたのではないかと思われる。

ツェンペリーの後、シーボルトまでの間に来日した医師に関しては『西賓対晤』などで片貌を察し得るが、出身地の上でかなりコスモポリタンの構成で、たとえば *Singer* という医師は瑞典人でツェンペリーの弟子であり、師の仕事のアフター・ケアの目的で派遣されたことがツェンペリーの旅行記に述べられている。これらの医師が携行もしくは言及したところからわが国の蘭学者は歐洲の医学書についてのイメージを得ていたのである。

寛政五年（一七九三）に來日、翌年甲比丹のヘンミーに従って江戸参府をした Ambrosius Ludwig Bernhard Keller*（当時三二歳）という医師は、日本側の觀察では「其学才の短長を審にせずといへども、特志ある人と見ゆ。殊に物産を好むよし」とあり、ドイツ語のバースという人の繻帯学およびプレントクの眼科書を携えていたと云われ、大槻玄沢と種痘法のことを談じた。彼はまた、トルコ式人痘種痘を長崎で試み、緒方春朔と種痘法について対談している。バースの著書については吉雄耕牛が「披斯氏繻帯書」として言及しており、新宮涼庭もこの本を知っていたと云われるが、「分牒列幾抜斯」をドイツ語に戻すと、ハルレの外科医 Heinrich Bass (1690—1754) のことではないかと思われる。瑞典の Rosen von Rosenstein から一七二九年九月六日付で Haller に宛てた書簡に「ベルリンの医学校の諸氏ならびにハルレの Hoffmann, Bass 両氏よりは得る所最も多く御座候*」と言及されており、別のときに Rosen は Bass を「外科と解剖学に卓越」と称讚している。

次に、寛政九年（一七九七）に來日した Hermann Letzke という医師は明らかにドイツ人で、寛政一〇年ヘンミーに従って、また享和二年（一八〇二）ワルデナールに従って江戸参府をしている。二度目のときが三三歳であったと云われる。吉雄如淵はレッケから外科を学んだ。一七九八年、江戸で桂川甫周、大槻玄沢らが彼と会ったとき、Heister, de Gorterらの内科書のことを教えられたと杉田伯元の手控に記されている。

レッケに代って一八〇五年には Jan Frederik Falke が來日、ゾーフに従って一八〇六年、一八一〇年および一八一四

* ドイツ人であったという説がある（山岸光宣、中外医事新報第一二四八号）

** "Messieurs de la Faculté de Berlin et Messieurs Hoffmann et Bass à Halle sont ceux avec qui j'ai le plus profité..."

年の三回にわたり江戸参府をしたが、一八一四年（文化二年）長崎で病死した。一八一〇年に江戸で大槻玄沢等に会ったとき、Heisterの増補外科書のほか、van Swieten, de Gorter等の著書を携行しており、一八一四年にも大槻玄沢、宇田川玄真等と面会した際、Plenckの外科書（Gescher 蘭訳）その他を携行していたと云われる。多芸な人で、日本画風の富士山図が彼の作として伝わっている。

新宮涼庭は長崎でまず吉雄如淵に師事し、さらに Feilke に学んだ。von Roemer は、涼庭の『療治瑣言』に出てくる「蘭医歌乙児結」がPlenckの門人であったと云っている。Feilkeの死後、歐洲の戦乱で蘭船が来なかつたので、臨時に涼庭が蘭館での診療を許されたが、後に Bateij が来航し、一八一六年（文化一三年）長崎で流行した疫病を神経熱つまり腸チフスであると涼庭に教示したと云われる。『療治瑣言』ではバテイを「布斂巳の門人技的乙」と記している。

von Roemer の Feilke に関する記事（二〇二頁）は次のような短いものにすぎない。

“1815. Hermann Helke (or Feilke?) a pupil of von Plenck (1738—1807), comes to Nagasaki as Dutch East India Company's physician. As one of his pupils is named Ryotei Shingu, who translated one of the works of v. Plenck into Japanese under the title 'Seiri-Soku'.”

この出处として富士川博士の独文著書が考えられる。それは次の通りである。

“Hermann Helke, ein deutscher Arzi, Schüler von Plenck in Wien. In 12. Jahre der Bunka-Ära (1815) kam er nach Nagasaki. Unter ihm erlernte Ryotei Saingu die europäische Medizin.”

Feilke の来朝は文化二年（一八〇五）で、一八一四年に病死しているので、富士川博士の云われた Hermann Helke という医師は別人でなくてはならず、むしろバテイがPlenckの門人とする方が話が合う。これらの臆測はどちらも怪しいという反論もあるが、当時全歐洲でそれほど多人数はいなかつた医学部の教授のもとを、学科毎に学生が遍歴する習慣であったことを考えると、Plenckの講筵に列した医師が一人ぐらい長崎に来たとしても、それほど無理な推量とは云えない。

い。^{*} 少なくとも、シーボルトのような大ものの蔭に隠れて、これまであまり研究の対象になつていなかったこの時期の蘭館医が直接、間接の別はわからぬまでもブレンクの影響をかなり強く受けていたことは否定できない。

V

杉田玄白の末子立卿(予、錦腸)もブレンクのほん訳をいくつか残している。『瘍科新選』と『黴瘡新書』のことは既に述べたが、ほかに眼科書を訳した『眼科新書』がある。この原本 *Doctrina de Morbis Oculorum* をブレンクが著したのは一七七七年、彼が *Tirnau* で教授をしていたときである。

Magyar-Kossa 著 “*Ungarische medizinische Erinnerungen*” には本書が日本語にまで訳されたことについて次の記載がある。

「ブレンクが *Tirnau* で教授をしていた時期に彼の眼科書 *Doctrina de Morbis Oculorum* が著され、*歐洲* 各国語に訳された。この世界で最初の眼科学の *Kompendium* の日本語版までがあらわれたことによって、*歐洲* の眼科学が極東にまで知られるようになった。」

本書和訳のいきさつは緒方富雄博士が「大槻玄沢の激憤―その手記」と題して詳しく紹介しておられる。それによると、本書の蘭訳本^{*} (*Martinus Pruyss* 訳, 1787) を最初宇田川玄真(榛齋)が『泰西眼科全書』と題して訳したが未刊のままであり、後に杉田立卿が増補して文化一二年(一八一五)に刊行し、はじめ『和蘭眼科新書』と題したが、後に『眼

* 地理的にもオランダに隣接するネーデルランド南部の一七州(現在のベルギー)は一七一三年から一七八九年までオーストリア帝国領であった。

* * 下述の『新訳泰西眼科方序説』によると、この蘭訳本は *Keller* が携行したのを大槻玄沢が譲渡を懇望し、桂川甫周の尽力で、*Keller* は長崎に帰ってから通詞を通じて甫周に贈ったといわれる。

新書』に改められたと云われる。緒方博士は故鮫島近二博士旧蔵の『泰西眼科全書』の巻頭にある大槻玄沢の「新訳泰西眼科方序説」と「余録」とを資料として本書和訳の経過を説明された。緒方博士の現代語訳では「序説」の書き出しは次の通りである。

「この書は遠西のトセフのヤコブ・ブレンキ著眼科治術の書である。ブレンキはテルナウ帝王の設立した大学校の内、外科医兼解剖および産科、小児科の教授である。」すなわち、ブレンクの名ヨセフが「トセフ」となって地名と誤まれ、地名 Timau が「テルナウ帝王」と皇帝の人名もしくは国名と誤まれたらしいほかは大体正しく著者を紹介したといえる。

ブレンクの著書のうち、ティルナウ時代に著されたことが Magyar-Kossa によつてはつきりわかるのは皮膚科と眼科であるから、『眼科全書』はハンガリーの大学教授の著書の最初の和訳であるといえる。もともと Timau (スロバキア語では Trnava) は今日ではチェコスロバキア領になっており、一九六九年に医学部創立二〇〇年記念行事が行われた。ゼンメルワイス医学史博物館の A. Faludy 博士の好意により、この二〇〇年祭の前に Pressburg-Bratislava の B.K. Rippa とごう人が書いた “Die japanische Ausgabe des Werkes über die Ofthalmologie von J.J. Plenck, Professor an der Tynauer medizinischen Fakultät” という論文の別刷を私は入手した。この人はプラーハのチェコスロバキア科学アカデミーの Jozef Fass, L. Slupski 両氏が同アカデミーの中国語講師 Wang-Schou-min 氏の協力を得てチェコ語に訳した『眼科新書』の序文をさらにドイツ語に直して掲げている。写真版としてこの論文に掲げられた京都大学図書館副館長からブラティスラヴァ大学図書館宛の返書によると、『眼科新書』のタイトルページと序文のマイクロフィルムを一九六三年三月一三日付の依頼に対して同年五月二二日付で贈呈したことがわかる。

ただ、日本側の協力なしに行われたこの序文の訳には(論文の他の部分にも)かなりひどいまちがいが目立つ。

① 本書は一八一五年京都で編纂された (cs……im Jahre 1815 in Kyoto herausgegeben wurde) とあるが、「浪華書肆群

玉堂蔵版」という以上、印刷は大阪であり、訳者は江戸にいたので、京都とは関係ない。

② 序文の「余續家翁之緒務脩其学」の「其学」と「凡和蘭之書 有益干治術者」の「治術」をすべて眼科(Augenheilkunde)に限局して訳している。玄白は末子立卿をして眼科を以て別に一家を立てさせた位で、玄白および序文の著者伯元が眼科専門医であったというのは誤解も甚だしい。

③ 「家翁每歎曰」のあと玄白の言葉を “Wenn man blind ist, ist das das grösste Unglück.” だけで終らせているが、これは「豈可無良術乎」か、もっと後の「則吾願足矣」まで続いていると考えるべきではなからうか。漢文で引用の終がわかりにくいのは致し方ないとしても、主語が「余」すなわち伯元になるのは「一日余過大槻磬水」からで、それまでは玄白あるいは伯元の感慨が続いていると考えるべきである。

④ 「蓋蘭人之格物究理、其専門必当有能尽其精微者」を “Wenn der Arzt sein Studium mit grösser Gründlichkeit betreibt, muss er in seinem Fach eine hohe Stufe erreichen.” と教訓的に訳したのは全く以て苦しまぎれの誤訳という他ない。

⑤ 大槻磬水の名は *Osuki Bansuie* となっており、チェコ語の読み方はわからぬとしても、お世辞にも正しいとは云えない。

⑥ 「向宇榛斉訳之」が “Kou Schinsai wollte es übersetzen.” と訳されている。「向」は「ちきむろ」であり「宇」は宇田川姓を中国風に一字に縮めたのであるのに、「向宇」二字を榛斉の姓にしてしまっているのである。

⑦ 訳者は序文までしか見ていないのに、本書を漢文(chinesische Übertragung)と銘めてかかっている。

その反面、この論文からはティルナウ大学が一六三五年 Esztergom (ドイツ語では Gran) の大僧正 Péter Pázmány 枢機卿によって設立されたという沿革やプレントクの経歴については教えられるところが多かった。それによると、J.J. Plenck は維納の生まれで、パーゼルで医学を教えた後ティルナウに招かれ、一七七七年大学の移転によってブダに移り、外科と

産科の教授を勤め、再び維納に帰って Josephinum の教授、後には陸軍薬剤総監また Oberchirurg に任ぜられたというのである。

VI

Magyary-Kossa の著書にはもう一ヶ所日本に関連のある記事が出てくる。それは Pariz Papai 著 “Pax Corporis” の中で痘瘡患者に赤い敷布をかけ、常に赤色が目につくようにすれば痘瘡の消退がよいと述べられている点に関してである。

同じ風習はフィンランドにもあったと見え、Nils Rosén von Rosenstein 著の小児科書には、フィンランドからストックホルムに來た一婦人の伝えた民間療法として、痘瘡患者に白い肌着のかわりに猩々緋色の布を着せ、それで顔も掩うという風習が紹介されている。

この箇所(一〇四頁)の脚注に Magyary-Kossa は Sprengel の薬学史(一卷二六二頁)を引用して、この療法が昔の日本でも行なわれていたと述べ、*“Nihil sub sole novum!”* — sagt die Bibel.” と伝道の書一：九を引用して脚注を結んでいる。この Sprengel は Kurt Polykarp Joachim Sprengel (1766—1833) のことで、主著はここにあげた *“Versuch einer praximatischen Geschichte der Arzneikunde”* 五卷(1792—1802)であり、ほかにツェンペリーの旅行紀の抄訳(一七九二)も試みている。シーボルトが宇田川榕庵に贈った *“Anleitung zur Kenntnis der Gewächse”* 三卷(Halle, 1817—1818)も彼の著書で、榕庵は本書を参考書の一つとして『植学啓原』を著したと云われる。

また、Rosén von Rosenstein はリンネと同時代にウプサラ大学の教授であり、或る意味ではリンネのライバルでもあった。彼の小児科書は各国語に訳され、わが国では蘭訳本から宇田川玄真が『小兒諸病鑒法治法全書(羅仙治兒全書)』と題して訳したが出版に至らなかった。ハンガリーでは一七九四年に Samuel Domby によってハンガリー語に訳されてい

る。

VII

ゼンメルワイズ博物館で聞かされたハンガリーの生んだ一学者の話を以てこの発表を終りたい。それは Béla Széchenyi 伯爵である。伯は一八七七年から一八八〇年にかけてインド、日本、中国、チベット及びビルマを旅行し、その研究業績はハンガリー語で一八九〇年から一八九七年にかけて公表され、ドイツ語訳が維納で出版された。伯の旅行記は、旅行に随行した Georg von Kreiner 中佐によってドイツ語版が維納で一八八一年に、ハンガリー語版がブダペストで一八八二年に出版されている。たとえば、業績集二巻の三八〇—四二九頁にはヘボン (J. C. Hepburn) の辞書第三版からの抜粋があり、また、伯が蝦夷地から持ち帰ったアイヌの頭蓋とドレステン博物館にあった樺太のアイヌの頭蓋との比較研究が後にブダペスト人類学博物館長 Aurel von Török 教授によって行なわれたのである。つまり、東洋に対する學術調査旅行を始めて行ったハンガリー人として伯の名は記憶されるべきである。ブダペスト市内で Duna 河にかかる美しい吊橋形の Széchenyi 橋は同伯爵家が私財を投じて架けたものであることも聞かされた。

Széchenyi 家からは革命戦争時代の穩健派政治家でハンガリーの近代化に力をつくした István Széchenyi 伯爵が出ている。この人はゼンメルワイズ博士と同様維納の精神病院で晩年を過し、しかも最後は自ら命を絶ったのである。その運命は、高名の地理学者で、第二次大戦に中立を貫こうとして果さず、ドイツ軍進駐の前夜自殺した首相、テレキ伯の末路を連想させる。

思えば、はじめオランダ、のち独逸から西欧科学を学んで近代化の道を進んだ日本の歩みを、歐洲の中原にあって極端

* Széchenyi lanchid または単に lanchid と呼ばれる。

に、かつ徹底的におしすすめたのがハンガリーの文化ではなからうか。その結果、周囲のヨーロッパ諸民族以上に高度なヨーロッパ文化の担い手となり得た自負と、その根底にある異民族としての自覚、この両極端の間で何度が押しつぶされそうになった悲劇に、遠い異国の話としては片附けられぬ共感を覚えずにおれない。

終に種々御教示いただいた緒方富雄先生に深謝する。また、ゼンメルワイス医学史博物館見学に紹介の労をとられた HUMAN 研究所の I. Joó 博士ならびに同博物館の A. Faludy 博士そのほかの御好意に対し、厚く御礼申し上げます。

主要な参考文献

Antall, J. & Szebellédy, G.: Aus den Jahrhunderten der Heilkunde. Semmelweis-Museum für Medizingeschichte, Budapest. Corvina Verlag (Budapest) 1973

Antall, J. (ed.): Pictures from the past of the healing arts. Semmelweis Medical Historical Museum, Library and Archives. Communicationes de Historia Artis Medicinae, Suppl. 5, 1975

Fujikawa, Y.: Kurze Geschichte der Medizing in Japan 文部大臣官房文書課(東京) 明治四四年

Goerke, H.: Die deutsch-schwedischen Beziehungen in der Medizin des achtzehnten Jahrhunderts. Acta Historiae Scientiarum Naturalium et Medicinalium, edidit Bibliotheca Universitatis Hauniensis, vol. 16, 1958

呉 秀三: シーボルト先生、其生涯及功業、吐鳳堂(東京)、第二版、大正一五年

Magyary-Kossa, J. von: Ungarische medizinische Erinnerungen. Danubia Verlagsanstalt A.G. (Budapest), 1935

Mayrhofer, B.: Kurzes Wörterbuch zur Geschichte der Medizin. Gustav Fischer (Jena), 1937

緒方富雄: 大観玄沢の遺稿—その手記—蘭学資料研究会研究報告、第一三三二号、一九七〇

Overmeer Fisscher, J.F. van: Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk. Müller & Co., (Amsterdam) 1833

Rippa, B.K.: Die japanische Ausgabe des Werkes über die Ophthalmologie von J.J. Plenck, Professor an der Tyrnauer medizinischen Fakultät. Communicationes de Historia Artis Medicinae, 45: 135-142, 1968

Roemer, L.S.M. von: Historical sketches. An introduction to the Fourth Congress of the Far Eastern Association of Tropical Medicine. Javasche Boekhandel en Drukkerij (Batavia), 1921

SEMMELWEIS and PLENCK
From the History of Medicine in Hungary

by

Junichi YASUDA, M. D.

1) Mention was made to the author's own visits to Budapest in 1923 and 1975, including his experience at the Semmelweis Museum of History of Medicine there. Severe criticism of Semmelweis' work by Professor von Siebold of Göttingen, a cousin to the famous Japanologist, Philipp Franz, was briefly mentioned.

2) Many doctors of the New Viennese School, famous to us Japanese, such as Hyrtl, Kaposi, Pollitzer and Schnitzler, were Hungarians by birth.

3) Through the calling of van Swieten from Leiden to Vienna, medical science in the Austro-Hungarian Empire became an outgrowth of the Dutch heritage, which was also introduced to 18th century Japan. Among the professors at the (Hungarian) medical Faculty in Tirnau at the time of its foundation, there was J.J. von Plenck whose compendia became so popular in Japan through Dutch editions and Japanese translations therefrom. It must be emphasized that European doctors stationed at the Dutch factory in Nagasaki in the late 18th century must have been under the strong (possibly, even personal) influence of Plenck. From the books they brought or mentioned, Japanese physicians might have obtained an "image" of medical literature in Europe.

The author of a German book on bandaging brought by a Dr. Keller along with Plenck's work on ophthalmology (vide infra) and frequently mentioned by Japanese physicians must be Heinrich Bass of Halle, although the original work itself could not be identified as yet.

4) The German translation of the introduction to the Japanese edition of Plenck's "Doctrina de Morbis Oculorum" published by Rippa (1969) was reviewed, some errors in translation being pointed out.

5) In Hungary there was a custom of covering smallpox patients with red garments as given in Páriz Papai's "Pax Corporis". The same custom was also prevalent in old-time Japan, as was mentioned by Sprengel.

6) A brief account was made of Count Béla Széchenyi's scientific expedition to the Far East.

御雇教師ウイルヘルム・デーニッツ

小 関 恒 雄

1

明治初期東京医学校御雇教師として来日し一二年余も滞在して教育研究診療に従事した Friedrich Karl Wilhelm Dönitz については、同時代のミユルレル、ホフマンあるいはベルツに比しよく知られておらず、断片的な伝記紹介があるにすぎない。それは滞日の後半が佐賀という一地方に埋れておったためもあるうか。しかしその事績を追ってみるともっと注目されてよい足跡を残していることがわかる。まず東京医学校初のプロフェッショナル解剖学専門家として、本邦近代裁判医学および衛生警察学の創始者として、衛生学者臨床家、かたわら幅広い博物学者として、秀れた学者実践家であった。以下、諸氏の著述、資料を整理しながら二三補ってみたい。

2

デーニッツ (ドローニッチ、デニーツ、デニツ、デニツ、デーニツ、デーニツ、デーニツ、デニーニク、ヂョーニツ、ドヨーニツ、ドニツ、電氏、泥氏) は一八三八年六月二七日プロイセン国ベルリン府に生れた。幼時より博物学に興味と天才を有した

がけつきよく医学の道を選んだ。一八六三年ドクトル試問を終え翌年開業医の免許を得てベルリン大学解剖学教授 K.B. Reicher の門に入った。一八六五年「解剖局助教ノ職ニ任セラレ解剖學講義ヲ爲スノ機會ヲ有シ傍ラ私宅開業ヲ爲シ以テ實地治療ノ業ニ従事シタリ余ハ曩ニ疾病ニ罹リシノ故ヲ以テ軍人タルニ適スルヲ得サリシト雖モ佛國トノ開戦ニ際シ義兵志願シテ其軍ニ入り五十ノ病床ヲ容レタル二所ノ病舎ノ醫務ニ従事シ凱旋ノ後ニ於テ獨逸國皇帝陛下ヨリ「クローネン、オルテン、フヒールテル、クラッセ」ノ勲章ヲ賜ハリ且ツ「ウエルツテンベルヒ」國王陛下ヨリ「オルガ、オルデン」ノ勲章ヲ賜ハリタリ」⁽¹⁾と後年語っている。

一八七二年(一八七三年ともある)⁽²⁾プロフェツソルの称号を得た。ウイルヒヨウの許にも居ったという。

一八七二年特命全權大使岩倉具視に随行し滞欧中の田中不二麿文部理事官と結約書を交し⁽¹⁾、一八七三年(明治六年)七月九日来日した。ベルリンでデーニッツにも師事し、帰国する萩原三圭と同便であった。月給三百弗、期限は三カ年で更新可としている。

この人事は明治五年東校が第一大学区医学校と改称拡充される際、教師陣コツヒウス、ヒルゲンドルフ、フンクに続く第二陣としてのものであり、初のプロフェツソルの来日として期待された。当時の新聞は「本月十日獨逸國ベルリン府大學校ノ教頭ドクトル、デニーツ氏來朝セリ此人彼地大學校ニ在リテ久シク教育ヲ司リ殊ニ解剖學組織學ニ抜群ナリトベルリン府大學校ニハ醫學教頭纔カニ二十四名ナルニ今般帝國日本政府ノ求メニ應シ彼大學校ニテ至要ナル教頭ヲ送レリト」(東京日日、明六・七・一四)と書いている。本郷本富士町二番地旧富山邸(医学校官舎)に居をかまえた。

3

この期待に違わず彼はそれまで解剖学を兼担していたミュルレルらに代り、田口和美らを助手にして系統解剖学、組織学、胎生学を講義、実習した。この時の講本がのち田口和美編輯蔵版『解剖攬要』(明治一〇年)の基となった。また彼

の収集寄贈により標本、器械、図書が整備され、剖検体も刑死体のほか養育院の病死体を得て豊富（時に過剰）であったという。⁽³⁾

彼は病理学にも関心をもち、わが国の病理解剖第一号として明治六年一月ホフマンとともに患者近藤徳次郎（二六歳、脚気兼間歇熱）を、また特志病理解剖第一号として同八年二月患者郷いね（三八歳♀心肥大）を解剖している。⁽⁴⁾

明治六年一二月、彼は来日の際の結約「解剖學組織學」のほか病理解剖学、活物学（生理学）、皮膚病診断等の兼担要請を主な理由にミュルレル、ホフマンの口添も得て月百円増給の懇願をしている。⁽⁵⁾（彼は病理学生理学は兼担したが、皮膚病診断については確かな記録が見出せなかった。）結約書を楯にとられ交渉は難渋したが、明治七年七月けつきよく学力優等勤務励精を理由に認められた。実情は学課増に伴う人件費の兼務による節約また人選難も与していた。デーニッツのみが認められたのにコツヒウス、ヒルゲンドルフらは憤慨し、同じく増給を要求している。ただし兩人の場合なかなか認められず、辞職まで仄かしてようやく明治八年四月より百円の増給を獲得している。（因に件のミュルレル、ホフマンもこれに先立ち月二〇円ではあるが増給されており、大変興味深い。）しかしこの際同僚間に何か確執があったらしく、けつきよく彼は三年の期限が切れるやあっさりと転職している。

また一方、同僚の子科教師フンク（ドイツ語、ラテン語）が明治七年予科一級生より授業態度を理由にポイコット（？）された騒ぎの際にはミュルレル、デーニッツはじめドイツ人教師連盟で抗議している。⁽⁵⁾ これら出来事は異郷にあっての同国人同志の心状吐露がうかがわれ面白い。

4

暑中休業を利用して彼は各地に避暑を兼ね採集旅行を試みている。^(1.5)（周知のように当時外国人の旅行は治安上許可制がとられ旅行免状を要したので、幸い記録が残っている。）明治六年八月ホフマンとともに相州小田原、箱根七湯、富士山裾野へ、同

七年には「宇都宮県下日光山並是寄十里以内」へ「動物骨格ヲ製造シテ比較解剖ヲ講説スル」ため、同八年には「甲州街道ヨリ黒駒ニ至リ同處ヨリ吉田越エ富士山ニ登昇シ夫ヨリ砂走箱根ヲ越エ小田原ニ至リ夫ヨリ小舟ニテ熱海及江ノ島」へ「比較解剖学ノ教授ニ関スル要用ノ博物ヲ聚採」のため、同九年（上野『日本博物学史』一九七三）には奥日光湯元および房総半島鹿野山に植物採集を試みている。

5

明治七年、警視庁は江戸時代より続いた『無冤録述』依存の検屍法を改め「司法官或ハ警官ガ自ラ検屍ソノ他醫事ニ関スルコトヲ判断スルハ不可ナリ」とする川路利良大警視の意見に基き（高田『法医学』一九二二）、裁判医学の素養ある医師を養成するためデーニッツを同八年九月一七日より六カ月間兼備し、浅草猿屋町の警視第五病院に裁判医学学校（校長前田元温）を併設し警視局の關係者を集め、彼に医学学校余暇に毎日二時間「裁判上ノ診断並保證ノ爲裁判所立會ヲ任」せた。月給一七〇円であった。これがわが国近代法医学教育の嚆矢である。（しかしこの学校は明治一一年四月に早くも廃校となつた。）

この頃の仕事に、明治八年一二月府下荒井宿村で巡査が米国人のために受けた霰弾丸射傷を鑑定している。幸い軽症であつたが、証人としてわざわざ横浜の米国領事館へ呼出されている。⁽⁵⁾

明治九年一月には同僚の内科教授ウエルニヒが馬車で通行中、越後屋弥兵衛雇人高木忠次郎に衝突し負傷させたため、被害者は医員の診断書を楯に全治五日間の賠償を請求してきた。そこでデーニッツが鑑定し「ソノ体傷ハ、各箇ノ傷度並ニ全度共ニ軽易ナリ」と診断している。⁽⁵⁾

当時は日本人と外国人間に流血事件が相つぎ、成行きでは外交問題にまで波及したりまた逆に下田条約を楯に治外法権を主張されたりするので、鑑定に権威あらしめるべくデーニッツの責任は重大であつた。とくに外国人の猟銃事故取締は

やっかいな問題だった。

6

デーニッツは明治九年七月八日満期を以て解約された。彼ほどの学力と勤勉の士をけっきょく更新しなかったのは待遇上折合わなかったためらしいが、⁽¹⁾前述の如く同僚教師との確執(?)やら警視庁兼備に際してのトラブルなどもあったようである。しかし当局は彼の功績をたたえ新古貨幣六六種、烏銅花瓶一對、器代金五円、計金三七五円一七錢一厘を贈りねぎらっている。⁽⁵⁾

このような経緯から彼は明治九年七月警視庁雇となった。すなわち「裁判醫學教師トシテ明治九年七月十日ヨリ向三十六ヶ月ノ間、其時間ハ一日七時間ト定メ裁判醫學教授並裁判上ノ診断及ヒ保証ノ爲メ裁判所立會ヲ任」せられ、月給は五百円となった。⁽¹⁾

それ以後デーニッツは警視病院においてさかんに法医診断、臨床講義を行っている。記録に残っているものだけでも八編にのぼっている。⁽⁶⁾一例をあげれば、嚥下困難を主訴とする患者の診断に際し考えうる原因を四つ挙げ、それらを順次説明して最後に診断名を下している。剖検例においても、例えば墮胎児の事案ではその記述骨子において今日なお通用する論述鑑定を下している。⁽⁶⁾これはわが国初の記念すべき近代法医学論文である。その他現今でも判定の難しい他殺溺死例について明確な断を下している。

また、明治一一年には彼がかつて裁判医学校で講義した講本『断訟醫學』^(7,8)が出版された。これは E. Buchner: Lehrbuch der Gerichtlichen Medicin für Aerzte und Juristen, München, 1867 をもとにしたものであり、その時の生徒の湯村卓爾、三浦常德、斉藤准が翻訳蔵版した。(因みにブフネルはミュンヘンの高名な法医学者かつ臨床家、医政家である。一九〇七年無細胞発酵の発見でノーベル化学賞を受けた Edward および細菌学者 Hans Buchner は共に彼の息子である。)この本は本邦初の近



図1 デーニッツの居留先(矢印; 18は健康社), 文献(12)より, 一部改変。

唆があったのではないかとの推測すらされている⁽¹¹⁾。明治九年デーニッツは居留地二八番(今の明石町五、児童遊園地の辺り)に引越したから、フォールズ(同一八番)との行交いが容易であったとおもわれる⁽¹²⁾。(図1)(彼は警視庁との結約通りであれば勤務は一日七時間であり、勤勉な彼のことであるから時間外に健康社でも診療に加わったのであろうか)明治一〇年にはコレラの大流行があり、警視病院も健康社も多忙を極めたという。デーニッツはコレラ治療に忙殺されたが、またこの病気に興味をもち彼の終生のテーマとなった。

コレラ流行に先立ち明治一〇年一月西南の役がおきた。警視庁派遣の警察官の負傷者はすべて東京に送られたため彼は

代法医学書として、当時『無冤録述』の焼直しに纏っていた実務家に受入れられ、法医学普及に大いに貢献した。しかし本書はデーニッツ著述というよりフネル原著の訳纂といったほうが当たっている。しかしこのことは勿論デーニッツの功績を損うことではなからう。

7

明治一〇年頃の彼の消息の記録があまりない。宣教医フォールズが明治八年築地居留地に健康社(Tsukiji Mission Hospital)という病院を開いたが、デーニッツも一時手伝ったようである⁽⁹⁾。事実彼による nephrotic cyst の治験例が記してある⁽¹⁰⁾。つまり彼とフォールズは交際があり、有名な指紋法の発見(一八八〇)にデーニッツの示

この治療に当り、かつ最後の重傷者の護送のため長崎に出張している。

これらの貢献により彼は内務省の上申で警視局法律顧問グロースとともに明治一一年六月謁見を許されている。その上
申書には「裁判醫學之義ハ醫學中高度ノ一科ニシテ殺傷等ノ疑讞ニ涉リテハ獨醫者ノ診斷ニ據リ罪ノ有無ヲ判決スルモノ
ナレハ治罪上必要ノ具ニ候」と裁判醫學の重要性を挙げかつわが国裁判醫學の創始者とたえ、とくに「外國人關係ノ事
故ニ依テ外國裁判官ヘ求刑等ノ場合ニ於テハ伸フベキノ權利モ枉屈ノ害ヲ受ケ」⁽¹⁾ていたがその際は悉く彼の診断により甚
だ便宜を得たことを謝し、また衛生警察上においても前記のように警視病院における患者治療、明治一〇年伝染病（コレ
ラ）流行時の予防方法施行、西南の役における戦地傷痍者の治療などを挙げてゐる。

8

来日外国人にとりアイヌは極めて興味ある対象だったらしく多くの御雇教師によって研究調査された。デーニッツも来
日早々アイヌひいては日本人の起源について論じている。⁽¹³⁾彼は頭骨および身体計測からいち早くアイヌをモンゴロイドに
属するとし、ヨーロッパ人には似ていないとしている。これは今日では通説となっており、卓見といえる。（ただし彼自
身北海道へは渡っていないようである。）

またヒルゲンドルフにより *Os Japonicum* と命名された顴骨縫際（二分頬骨）についてもすぐ追加報告しその頻度三二
%としてゐる。⁽¹⁴⁾この縫際はのちウイルヒョウにより注目され有名となった。

博物学者としての功績をあげれば、一つはいまでは絶滅してしまったニホンオオカミの頭骨を伯林大学（現フンボルト
大学）動物博物館に一八七七年寄贈したが、日本でも数少ない標準的な完全標本として貴重である。これは昭和一一年こ
ろ斎藤弘吉氏ら⁽¹⁵⁾の尽力により石膏複製を取寄せたのであるが残念ながら今次大戦終戦直前の空襲により焼失したという。

（幸運にも該標本は同博物館に現存している。）

もう一つ、豪洲原産のユーカリ樹は明治一〇年ころ輸入されたといわれるが、明治八、九年頃すでにデーニッツは芝にあった開拓物品陳列所より購入し、警視医学校の周囲に栽培したらしい。この樹は生長が早く低湿地を干地に改良するためマリアア防疫等に効果ありといわれ、彼自ら生徒の健康改善を企てたといふ。⁽¹⁶⁾（開拓使へは前記アイヌ研究で通つたのであろうか。）

9

デーニッツは明治一二年契約切れで警視局（この当時警視局と警視庁との管轄系統関係は変転としていた）を辞した。その辺の真相は不明であるが、すでに前年警視医学校は廃止され警視病院も時勢におされて整理の方向にあったこと（明治一二年廃止）、経費節約等が考えられる。⁽¹⁷⁾しかし当然彼が教えた人材が育ってきたことも確かであろう。辞職に際し「事務勉勵ニ付御手當」五百円を与えられた。⁽¹⁾

彼が佐賀に赴く経緯もはっきりしない。明治一二年八月七日佐賀郡立病院および同付属の医学校に医師兼教師として六カ月契約で雇われた。⁽¹⁾この頃くしくも佐賀地方はコレラ流行の最中であった。満期後八カ月間歐洲へ賜暇帰国したが、再び明治一三年一〇月に「醫道教師」として三年契約、月五百円で雇われた。同一六年一〇月、佐賀医学校は甲種医学校に昇格すべく、⁽¹⁸⁾その条件として教授資格者三名以上が必要であったが、彼はその一人に目されさらに二年間雇われている。

彼の働きぶりは「患者ノ治療及ヒ醫學生徒ノ教育ニ従事セシメタルニ數年一日ノ如ク非常ノ勉勵ニシテ同院開設以來屢々聘用シタル洋醫ノ比ニアラス患者ノ治療ハ勿論生徒ノ教育懇切周到夜以テ日ニ繼キ猶及ハサルヲ恐ル之カ爲メ同院ヲシテ九州中巨擘ノ名アルニ至ラシメ四方來テ治療ヲ請フ者其數枚擧ニ違アラズ或ハ多年廢疾ニ委シタル沈痾痼疾ノ患者モ全治ヲ得タル者亦少シトセス或ハ又生徒駸々歩ヲ進メ爲ニ一般醫風激勵セラレ頗ル改良ノ功ヲ奏シタリ」と大いに感謝されている。⁽¹⁾

また彼は明治一七年四月発足した佐賀私立衛生会（会長、鎌田景弼県令）に「客員トナリ毎會必ス臨席シテ諄々衛生上ノ必要ヲ懇論」した。⁽¹⁾そこで彼はコレラ、麻疹、天然痘等の伝染病治療とくに予防法を演説した。またデーニッツは「飲酒の利害」を説き彼の診療患者の二〇人に一人は何らかの飲酒による疾患を有するとし、アルコール分の高い日本酒の深酒をいましめビールならよいと⁽¹⁹⁾している。

10

デーニッツは余暇を利用して採集をおこたらなかった。佐賀ではとくにクモ類の採集に熱中した。⁽²⁰⁾その範囲は佐賀付近はもとより唐津、長崎、雲仙、福岡県姪島にも及んでいる。ただしこれらすべて彼自身赴いたのか否かは不明であるが、例えば明治一七年八月、一カ月間の休暇を利用して古湯、唐津、二里（虹）の松原方面に出掛けている（佐賀自由、明一七・八・二）。外国人の外出は明治三年の「外國公使旅行ノ節取扱例規」をもとに監視が嚴重で、明治初年佐賀の例をとれば散歩は護衛付で許可区域は神埼、早津江、長瀬、川上の範囲内であった⁽²¹⁾という。しかしデーニッツ居留の頃はだいたい規制がうすれたのであろう、彼の足跡は北西九州一円に及んでいる。⁽²⁰⁾

クモの採集標本は後年 Bosenberg, W. & Strand, E.: Japanische Spinnen, Frankfurt a.M., 1906 に多数記載されている。彼自身の命名種も多い。彼を記念して献呈された種小名 *doernizi* が多数あり、和名にもそれに因みデーニッツヒザグモ、デーニッツハエトリなど名を留めている。その他昆虫とくに甲虫、鱗翅類、広範な草本類を採集し各専門家に委ねている。

11

明治一七年一二月、永年の功績により勲四等旭日小綬章に叙せられた。契約更新をことわり帰国を決心した彼に報いる

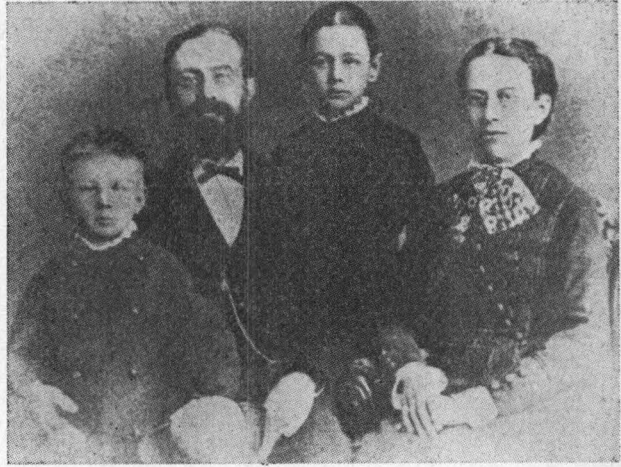


図 2 佐賀時代のデーニッツとその家族

ためである。

彼は明治一八年一月一日佐賀を去り長崎より乗船帰国した。佐賀を離れるに際し市民百数十人が見送り別れを惜んだという。(彼の離日年を明治一九年と多くの著作は書いているがこれは誤りである。) 帰国途路にも彼は港々でコレラを観察し、滞日中の経験も含め帰国直後コレラ伝播に関する論文を著し病原菌説に与し、いわゆる瘴気説に傾くベツテンコーヘル派に反論を試みて⁽²⁾いる。篤学デーニッツの面目躍如たるものがある。

一八八六年帰国し、以降コッホを助け伝染病学者熱帯病学者として大成評価され、一九一二年三月一二日ベルリンで術後併発の化膿性腹膜炎により死亡した(享年七三歳)。彼の死はわが国では殆ど報道されず、また人名辞典等でも省かれている。

図2は佐賀時代のデーニッツ一家の写真である(好生館蔵)。彼は新妻マルタ Martha を伴って来日した。長女ゲルトルト Gertrude と長男アルフレッド Alfred を得た。マルタは賢夫人のほまれ高く、佐賀の医学校では語学を教えていたという。なお、長男アルフレッドを第二次大戦中のドイツ海軍の Karl Dönitz と混同している論文があるがこれは誤りである。デーニッツ提督は一八九一年ベルリン生れである。アルフレッドはすでに佐賀(?)で生れておったわけであり、彼はそもそも外科医であって後に教授となった。⁽²³⁾

稿を終るに臨み、教示並びに便宜をいただいた酒井豊氏、後藤晃氏、市場利哉氏、本間恂一氏、高宮治生氏（在フライブルグ）それに多くの図書館関係各位に深謝する。

内容の一部は第四五回日本法医学会関東地方会例会（新潟、一九七六）で発表した。
なお、デーニッツの学問上の業績、資料等は後日発表する。

文献および註

- (1) 大政官「公文録」明治六一七年
- (2) Gaffky, G.: Wilhelm Dönitz f. Dtsch. med. Wschr., 38: 718-719, 1912
- (3) 小金井良精、東京帝国大学医科大学解剖学教室略誌附一図、東京医学会創立廿五年祝賀論文、第一輯、七一二七頁、一九二二
- (4) 小川鼎三編『東京大学医学部百年史』一九六七
- (5) 東京医学校「教師一切事件」明治六一〇年(1)、(5)以外に『資料御雇外国人』一九七五も参照した)
- (6) 東京医事新誌、第一二二二号、一八七八(うち、墮胎児診察、第二号七一―二頁)
- (7) 小関恒雄、明治以降本邦出版法医学教科書目録、犯罪学雑誌、四〇巻、八五―八八頁、一九七四
- (8) 小関恒雄、わが国初の近代法医学書、医海時報、六四二号、三頁、一九七五
- (9) 古畑種基編『東京帝国大学法医学教室五十三年史』一九四三
- (10) Faulds, H. (ed.): Second Annual Report of Tsukiji Mission Hospital, Tokio, 1877
- (11) 八十島信之助、指紋法の創始者 居留地の医師ヘンリー・フォールズ、日本医事新報、一八〇九号、六〇―六一頁、一九五八
- (12) 東京都編『築地居留地』一九五七
- (13) Dönitz, W.: Bemerkungen ueber Aino's, Mitt. dtsch. Ges. Nat.-Völk. Ost., 1(6): 61-67, 1874
- (14) Dönitz, W.: Ueber die Abstammung der Japaner, ibid., 1(8): 39-41, 1875
- (15) 斎藤弘、東京科学博物館倉庫内に発見せられたるヤマイヌの全身骨骼並に其他の同資料に就いて、博物館研究、一一巻、四号、二七―三二頁、一九三八

- (16) 中外医事新報、四六号、一三二四頁、一八八二
- (17) 『警視庁史』明治編、一九五九(ただし本書にはデーニッツに関する記載はない。)
- (18) 佐賀県教育会編『佐賀県教育五十年史』上篇、一九二七
- (19) 中外医事新報、一〇六、一〇八、一〇九号、一八八四
- (20) 市場利談、佐賀県でタモを採集したW・デーニッツ、採集と飼育、三七巻、一四頁、一九七五
- (21) 『佐賀県警察史』上巻、一九七五
- (22) Dönitz, W.: Bemerkungen zur Cholerafrage, Z. Hyg., 1: 405-420, 1886
- (23) Olpp, G.: Hervorragende Tropenärzte in Wort und Bild, München, 1932

(新潟大学医学部)

Wilhelm Dönitz; One of the Pioneers of Anatomy, Forensic Medicine and Hygiene in Japan

Tsuneo KOSEKI

Wilhelm Dönitz was born in Berlin in 1838. He studied medicine at the University of Berlin and obtained the title of Professor in 1872. The next year he was invited, as the first teacher in anatomy, to the newly-organized medical academy, the predecessor of the present University of Tokyo, Japan.

He gave lectures on anatomy, histology, embryology, physiology, etc., also directing the students at anatomical and pathological dissections, from 1873 to 1876.

In 1875, he also taught forensic medicine at the medicolegal training school attached to the Metropolitan Police Office, Tokyo. Belonging exclusively to the hospitals attached to this office, he saw the patients and held pathological and medicolegal autopsies from 1876 to 1879. In those days, Dönitz became acquainted with Henry Faulds, founder of the fingerprinting

method and worked with him in his hospital.

He moved out to Saga, the south-western district of Japan, in 1879, and taught medical jurisprudence and other subjects at the medical school belonging to the Saga Prefectural Hospital. At the hospital, he examined numerous patients, especially sufferers from prevailing cholera, thus making epidemiological studies.

In 1885 Dönitz resigned from the hospital, and returned to Berlin.

To conclude, he introduced modern European anatomy, forensic medicine, hygiene, etc., to this country. He also published many papers on the above-mentioned fields.

From various parts of Japan, Dönitz collected many harbaria, insects, spiders and so on, which he donated to German museum. Among these collections many new species were found, especially those of spiders. He also presented a skull specimen of a Japanese wolf to the Zoological Museum of Humboldt University in 1877.

After returning to Germany, he made researches in and practised bacteriology, epidemiology, tropical medicine, etc., at Koch's Laboratory and others.

In 1912 he passed away in Berlin.

(Fig. The Tsukiji Settlement for Foreign Residents. 18: H. Faulds' Tsukiji Mission Hospital. 28: The place Dönitz dwelled from 1876 to 1879. Fig. 2. W. Dönitz and his family in Saga.)

薬王寺考

久米幸夫

一

施薬院および悲田院は、伝説的な聖徳太子創建説を除けば、奈良時代に光明皇后によって興福寺内に初めて設けられたものとなっており、都が京都に遷った後はその方に移り、ひきつづき長く慈恵厚生機関として存続して来たことは周知の通りである。これらは仏教の福田思想に基づいて創設され、初めの頃は藤原氏の封戸によってその経費がまかなわれた私的なものであったが、後には公的な機関となり、施薬院の長官（施薬院別当）には藤原氏の者が任ぜられた。天長二年（八二五）それまでの別当の名が施薬院使と改められたが、いずれも令外官である。また、悲田院は施薬院の被管となり、後者の「やくいん」に対して前者は「べついん」と呼ばれた。施薬院使はその後代々名譽の医師が補せられることとなったが、これは典薬頭と並んで医道の重職である。両院の職務は病人や孤児の収容、治療、養育であり、従って何れも貧困者が対象であるが、その実際は「類聚三代格」「延喜式」などに規定されている。例えば、延喜左右京式には

凡京中路辺病者。孤子。仰_三九箇條令其所_レ見所_レ過從_レ便。必令_レ取_三送施薬院及東西悲田院_一。

とある。両院のほか、平安時代には地方にも続命院、救命院等が設立されたことが記録されている。以上は史上に現われ

るところであるが、これらの外に私的な慈善厚生機関はなかったであろうか。

平安京は、前期はともかく、中期以後は決して平でも安でもなく、民衆は常に疫病や洪水になやまされ、更に多数の盜賊が横行する都であった。十世紀の末頃には疫病は毎年のように都を襲っているから、両院の仕事も忙しかったことと想像される。正暦四年（九九三）から五年にかけての疱瘡の流行はとりわけ激しく、多少過大な表現であろうが、「自去四月¹至七月¹。京師死者過半。五位以上六十七人。」という。人々は疫神のみならず病人をもおそれ、また死の穢れを忌むという当時一般的な風習も手伝ってか、重病人を路頭に捨てるが多かった。殊に召使などは、政府の禁令にもかかわらず、簡単に捨てられて死んでいった。「餓飢草紙」に描かれているのは決して単なる絵空事ではない。正暦五年政府はこういう惨状に対して、

左右看督長等被²宣旨。京中路頭構²借屋。覆²葎薦²出²置病人。或乘²空車。或令²人運²送藥王寺云々³。という処置をとっているが、ここに初めて藥王寺の名が出て来る。

この藥王寺に就ては管見の限りでは他の史籍にその名が見当らない。以上の簡単な記事からは勿論詳しいことは判らないが、この寺には患者を收容する施設があり、その收容能力はあまり小さなものではなく、後に記す紀州の藥王寺から類推して平常の場合も慈善医療機関として活動していたものであろう。両院の名が挙げられないで、わざわざこの寺の名が出されている理由は不明であり、或は臨時の措置であるかも知れないが、一応両院とは別のもので民間のまたは私的の医療施設と考えられる。けれどもこの事はなお検討を要する。

二

鴨長明の著と云われる「発心集」（十三世紀初頭成立）の第二「禪林寺永観律師の事」の中にこの藥王寺に触れた説話のあることをたまたま発見した。禪林寺に梅の木があり、毎年この梅の実がなると永観は残らず「藥王寺と云ふ処に多かる

病人に、日々と云ふばかりに施したので、近くの人々がこれを「悲田梅」と名付けたという。三木紀人氏は、薬王寺については不詳であるが、この物語から悲田院の異称かとも思われると注していられる。⁽⁴⁾

悲田院と薬王寺の異同にはわかには断じ難い。しかるに、「発心集」成立当時は悲田院は存在しなかった確率が非常に大きい。「法曹至要抄」の著者は坂上明兼でなくその子明基であり、またその成立は建久四年(一一九三)以後であることが和田英松博士によって立証されているが、その中巻の「出⁽⁵⁾薬路頭病人及小児事」において彈正式、左京式の条文をかかげた後に、

案^レ之出^ニ薬路頭^ニ之病人孤子。雖須^レ拾^ニ送^ニ施^ニ薬院悲田院^一。件院顛倒之間。無^レ処^ニ干^ニ拾送^一敷。

と説明している。病人や孤児は両院に送るべきであるが、両院が顛倒しているから何とも仕様がなないと云うのである。薬王寺が悲田院ならば、勿論これも顛倒している筈であるが、「発心集」の文からはそのような気配は汲みとれない。

「薬王寺と云ふ処」という言葉のニュアンスは薬王寺があまり知名度の高くないことを思わせる。他方、悲田院は施薬院の「べついん」として京都の民衆なじみのものであることを考えると、どうも薬王寺とは別物のように感じられる。(悲田院という名称は後世には穢多村の名として幕末まで残っていた。)

また、悲田梅という名は必ずしも悲田院の梅あるいは悲田院用の梅ということを意味しない。悲田とは福田思想の一つであるから、悲田事業のための梅とも解釈できる。更に、「発心集」の神田本では「悲田の梅」となっているといふことはこの解釈を正当化するのに多少は役立つ。

以上の理由からわたくしは薬王寺は悲田院とは別であつてむしろ民間の慈恵医療機関と推定する。が、両者の異同はともかくとして、以後の論旨のためには薬王寺と呼ばれる慈恵医療機関があつたという事実で充分である。

薬王とは何か。その名称から法華經の薬王菩薩本地品に記されている薬王菩薩と誤解されやすいが、そうではなくて薬師仏のことである。同じく法華經にある觀世音菩薩がひろく世間一般の信仰を集めたのに反して、薬王菩薩の人氣はあがらなかった。これとは違って、薬師仏はその十二誓願の第七に「衆病悉徐身心安樂」とあり、衆生の病苦を救う医薬の仏として古くから広くそして特に医人によって尊崇された。薬師仏は薬師瑠璃光如來、大医王仏なども呼ばれ、東方淨瑠璃世界の教主である。これらのことは仏教信仰の衰えた今日とは異なつて當時にあつては全く当り前の知識に過ぎず、「梁塵秘抄」の第二にも、

薬師医王の淨土をば瑠璃の淨土と名づけたり、十二の船を重ね得て、我等衆生を渡いたまへとある通りである。

従つて、淨瑠璃、瑠璃光、医王、薬王などという名称はいずれも薬師如来に因んだものであるが、これらの名を帯びた寺院は古来非常に多い。試みに「江戸名所図繪」を繙くならば、その実例の多いのに一驚するであろう。そして現在の東京都の寺院にも多数に見られる。新宿区市ヶ谷には薬王寺町の地名と共に稲荷山薬王寺が存在し、行楽地でもある高尾山が高尾山薬王院であるという二例を挙げれば充分であろう。(わたくしの現住する福島県にも薬王寺あるいは医王寺と呼ばれる寺院の数が実に多い。これらの寺院は殆ど全部が薬師仏を本尊としており、そうでなくとも境内に薬師堂を設けている。またその宗旨を検べると真言宗に属するものが際立って多いことに気がつく。すなわち、鎌倉仏教ではなくて、平安仏教に属するものが大部分である。このことは薬王寺、医王寺、淨瑠璃寺などの名称を持った寺院が平安時代にも数多く存在したであろうことを思わせる。

四

薬王寺という名は実のところ奈良時代に溯って既に知られている。平安初期に成立した「日本靈異記」中卷三十二に聖武天皇のみ世に紀伊の国名草の郡三上村の人、薬王寺の為に知識を率引して、普く薬分を息し（以下略）

とあり、出挙して得た利息で薬を購ひ、それを施薬したのである。（この仏教説話は十二世紀初期の「今昔物語」にも採り入れられている。）「平安遺文」には「薬王寺文書」四通⁶が収録され、その最も後代のもは永保二年（一〇八三）であり、何れもその領田に関する文書であるが、その中には荘園整理令に対応すると思われるものがある。このことはこの寺が相当の荘園を所有する大寺であったことを証明する。そしてこの寺も亦慈恵医療機関であった。

平安時代に薬王寺の名の見られるその他の史料としては、三河国薬王寺に関するものがある。十一世紀成立の「本朝文粹」の中に慶滋保胤（？—一〇〇二）の「晩秋過參州薬王寺有感」という文章が収載されている。これによると十世紀の末にはかなりの大寺であった。この薬王寺の名は後世永く碧海郡に薬王寺村として残り、寺の跡には蓮花寺という寺院があったが、明治三十九年にこの村は当時の矢作町に合併され、その矢作町は現在は岡崎市の一部となっている。

この地には古来薬王寺派と呼ばれる刀工の一団が居住していた。寺院と刀匠の間にはかなり深い関係があり、大和物にその著しい例を見る。古刀大和物の千手院、当麻、手搔等の諸派は夫々その名に縁りのある寺院に隸属して、その僧兵の需要に応じて鍛刀したと言われる。（僧兵は戦国時代末に消滅した。）これとの類推が許されるならば、刀工の薬王寺派も薬王寺の需要に応じたものではあるまいか。とすれば、かなり多数の僧兵を擁していたこととなり、そのことはその武力によって護らねばならぬ程の領田や荘園を有している大寺であったということになる。但し、薬王寺派の刀剣で現在知られているのは室町時代のものであり、その頃には肝心の薬王寺は衰退して地名のみが残っていたかも知れない。従って、以上は全くの想像にとどまるが、その可能性は考えられよう。

十二世紀末のことであるが、この地に関して浄瑠璃姫の伝説がある。これは三河国矢矧の長者の娘であつて、牛若丸が奥州に下る途次に長者の館に泊つた折これと契りを結んだと伝えられている。この浄瑠璃姫の伝説が室町時代に「十二段草紙」として脚色されて流行し、遂に浄瑠璃という語り物のジャンルにまで発展したことはその道の人の知るところである。この長者の娘はその名の示すように薬師如来に願をかけて儲けた子であるが、その薬師如来はすぐその近くには薬王の古刹である薬王寺の本尊であつたと想定するのは極めて自然なことではなからうか。この伝説はすくなくとも鎌倉初期には薬王寺が名刹としてなお存在していたことを示す。

三河の薬王寺が施薬をしたという記録は勿論存在しない。が、前記した慶茂保胤の文章には寺の結構を描いて「有茅草堂。有茅屋。有経蔵。有鐘楼。有茶園。有薬園。」と記されている。寺院が薬草を植えることは珍らしいことではないが、わざわざ薬園を挙げていることは、それが余り小さな規模でないからであらう。して見れば、そこから採取される薬草は一山の人々の需要をはるかに上回り、福田思想からしてもあまねく庶民にも施されたものと考えられる。すなわち、三河の薬王寺も慈悲医療機関の役目を荷つたものではなからうか。

五

わたくしは薬王寺という名称にこだわる気持はない。古代律令制の枠に組込まれた医官は貴族や官人のための医療担当者であつて、庶民の疾病には殆ど役に立たなかつたものと信ずるが、その頃の庶民にとって寺院による施薬や患者の収容がかなり大きな役目を果たしたであろうことを言いたいのである。そして、薬師仏が医薬の仏として尊信され、また少数ながら薬王寺の実例も証明されるので、庶民の医療を担つた寺院のいくつかが薬王寺あるいはこれと類縁の名称（医王寺、浄瑠璃寺など）を名乗っていた可能性は非常に大きいと思う。

しからはそれらの寺院において実際に医療を担当したのは誰であらうか。恐らく、奈良時代の僧医の伝統をひいた医師

に心得ある僧侶であつたらう。平安時代にはいると僧医の名は歴史から姿を消し、漸くその末期に及んで大善坊などの僧の名が現われるが、その間とても医学、医術を心得てこれを実施した僧侶が多数いたのではなかつたか。ただ、彼らは官医でないために、その名は歴史から煙滅してしまったのではなからうか。この時代には仁明天皇⁸をはじめとして紀夏井など医学の知識に詳しい貴族が数多く存在したことが記録されているが、僧侶にもそういう人物のあつた事実が知られている。後朱雀天皇崩御の折に僧重源が並々なぬ医学の知識と恐らくは臨床上の手腕をも有していたことを示す逸話が伝えられている。⁹

施薬院や悲田院は別として、医官であるところの典薬寮の医師や国衙の国医師は一般庶民個々の疾病には役に立たなかつたものとわたくしは考える。官医と比べて知識水準がはるかに低かつたのは当然としても、寺院を主とする慈恵医療機関や民間医の果した役割の方がむしろ大きかつたのではあるまいか。

文献

- (1) 「日本紀略」正暦五年七月条。
- (2) 「類聚三代格」卷十九 禁制事 弘仁四年八月十三日官符「応レ禁」断京畿百姓出「棄病人」事」。
- (3) 「本朝世紀」正暦五年四月二十四日条。
同様の記事は「日本紀略」にもあるが、収容先の名は記されておらず、従つて薬王寺の名は見られない。
- (4) 新潮日本古典集成「方丈記・発心集」九二頁。
- (5) 和田英松「本朝書籍目録考証」三〇七頁以下。
- (6) 「平安遺文」二卷四九三条、三卷一〇一六条、四卷一〇五八条及び一一九三条。
- (7) 太田為三郎「帝国地名辞典」一四二七頁。
- (8) 「続日本後紀」卷第廿。
- (9) 「続古事談」第五 諸道。

On the Yakuwo-ji

Sachiwo KUME

It is well known that in the capital of ancient Japan there were two public charity hospitals (“the Seyaku-in” and “the Hiden-in”). But in addition to them there were several non-charitable private medical facilities in the capital and in the provinces. Some of them were called “the Yakuwo-ji”. For the disease of the people, I suppose, the treatment by the government officials named “Ishi” (doctor) and “Koku-ishi” (province doctor). were not of much use, and the private medical facilities played the more important role in treatment.

「気違いの湯」

——定義温泉の歴史聞書

昼田源四郎

I 序章

宮城県宮城町大倉定義——平家の落人伝説の伝わる山深い里であり、定義如来の信仰篤い土地である。西沢勇はその著書¹⁾の中で次のように記している。

定義谷は二つの面を持っている。一つはきびしい自然であり、他の一つは慈愛のあふれる温かき自然である。溪谷は河床が深く、両岸は断崖絶壁で如何に秘境たるかを示している。大倉の地名の発生もここに由来している。倉とは岩のことであり、侵蝕によって凝灰岩が削り取られて、がらがらくずれ落ちる姿、即ち、岩くらに起源があると言えらる。つまり定義峽や大倉峽等々に連続した溪谷が多くあって、両岸が絶壁となり一大奇観をなしているのである。大倉川流域の地形は陸の孤島であり、隔絶した世界をなして人を寄せ付けないきびしさをもち、一大秘境を形成しているのである。これが過去のたどって来た文化やその個性に多くの影響を及ぼした基盤であると言いたい。

この山里から徒歩で小一時間、山道を更に奥へと登りつめた所に木造二階建の清楚な建物が唯一軒、山懐の日溜りに佇

ずんでいる。これが定義温泉である。以下、明治・大正を経て今日に至るまでの、この鄙びた出湯での、精神病者とその家族の闘病の歴史を辿ってみたい。それは定義の里人達と狂者達とのふれあいの歴史であり、温泉そのものの栄枯盛衰の歴史でもある。(書かれたものは何も残っていない。従って、ここでは定義温泉の当主・石垣幸一氏と、宮城長老連副会長・早坂寛藏氏からの聞書を根幹として、そのありし日を再構成したいと思う。)

Ⅱ 若干の資料からみた定義温泉

『宮城町誌』⁽²⁾を紐解くと、定義温泉に触れた、次のような記事がみられる。

当温泉の開場は伝える所によれば、慶長年間以前のことであると言われているが、未だ記録に徴すべきものが見当たらない。その後、寛政年間に黒川郡今村(今の大和町吉岡)の早坂新四郎が、この開発に従事したが半途で中止した。羽州東根村の農夫某なるものが眼疾に苦しみ、八方医療に努めたがその手段も尽きたので、同国の八聖山に祈願をこめた処、ある夜不思議にも神託があり「汝の病ただ宜しく奥州白髭山の御沢の定義温泉に沐浴すべし」とあったので、奇異な夢想を拘いてこの温泉を訪ねてここに入浴すること三週間にして眼疾は頓に平癒したという。「如来夢想の温泉」という称号はこの時に始まったものと伝えてある。その後、本地方の結城勝藏が目の当りあらたな効験のあったことを目撃したので、更に開発を進めようとしたが果さなかった。また関新右衛門や庄子平吉も相續いて起工しようとしたが、これもまた成功しなかった。嘉永二年に至り、大倉村の肝入結城平治衛門や組頭石垣伊勢之助等が協同し、且つ多くの人の協力を得て、岩石を掘鑿して通路を開き、浴槽や客室等を設けて浴客を招き漸次開発の歩を進めて今日に至っている。

温泉の環境は幽邃で、丘の上には奇岩怪石を仰ぎ、眼下には谷川の急湍を望むことの出来る仙境である。古来精神

病に特效があるといわれ、精神病患者で、ここに療養を求めて入湯する者が少くない。近年は定義如來を信仰する参詣者や、地方民で日常の心労を忘れ農事の労苦を休養しようとする人々にも広く利用されている。

町誌は更に、客室は階上二十室、階下十一室、計三十一室（和室）、性分は「クロールナトリウム少量、硫酸亜酸化鉄が中量、硫酸曹達が少量、湧出温泉は三十九度Cである」と記している。

また金園社編集部編『効能別温泉案内』⁽³⁾は、

……昔から「脳病の湯」とよばれて、浴槽も岩をくつてできている天然風呂で、いかにも脳病の療養にふさわしいムード……。

と紹介し、大島・山本の『温泉療法案内』⁽⁴⁾は「神経症に効く温泉ガイド」の項で、

宮城県の定義温泉（弱食温泉）は仙山線の白沢からバスで四〇分、さらに徒歩一時間の秘湯で、昔から定義如來の信仰と湯治をかねた老人たちに人気がある。標高は約五〇〇メートル、大倉川の支流の湯川にのぞみ、宿は石垣旅館というのが一軒しかない。浴室は一段低いところにあつて上から湯が落下しており、この湯滝に頭を打たせるのだが、おとなしく打たれている患者ばかりとはかぎらず、そんなときは十字架の木にしばりつける。さらに奥には天然の岩を仕切った岩風呂があつて、「神の湯定義」と書いた白い大きな幕が垂れ下っている。泉湯三九度という低温でこれに長時間入ると効き目があるのだが、健康人にはちょっとうす気味のわるい湯だ。土地の人々は定義を「気ちがいの湯」とよんでいる。

と書いている。

Ⅲ 発足、栄華、衰退

東北地方、特に宮城、福島、山形県等で、少なくとも明治の頃にはすでに「気がい湯」として広く知られていたようである。早坂氏も「頭の病気に良いというのは、すでに明治の頃には言われてたんじゃないのでしょうか。」と言う。明治生れの婦人から聞いた次の話は、早坂氏の推定を支持するものである。

「私の母から聞いた話だから明治の頃の話だと思う。近所にとつても頭の良い綺麗な娘さんが居ただけど、若い頃東京に行ったんだっていうんだけど。それがある時友達の家遊びに行ったんだって。そした所が、それが大層立派な家で、まあ生活も派手なのにビックリしてしまったんだけど。まあ、こっちは普通の商店の娘だからね。まあ、勝気で虚栄心も強かったから、付合で生活も派手になり、とうとう人様の金に手を出し、みつかつて警察沙汰になつたっていうんだけど。そうした所が、何だかポーツとして頭がおかしくなっちゃまって、脳病院にも行っただけど治んないっていったっけ、定義に行った所が、ケロツと良くなって帰って来たそうさ。」(福島 郡山市 三島さん)

石垣氏の話を要約すると、次のようになる。

明治の末頃から定義温泉は「頭に効く」といわれて患者が集まり始めた。それまでは、ほとんど知る人もない湯だった。それが口伝えに伝わったものだろう。大東亜戦争前までは年間五、六千人もの人々で活況を呈した。戦後、精神病院等の出現で三、四千人に激減。また以前は一人の患者に二、三十人の付添(家族、近所の人々等)がついて来たものだが、近頃ではそういうことはなくなった。人情が薄れて来たのだと思う。家族も病院に入れてしまえば、あとは知らんぷりをしている。福島、山形からの客が多い。それに宮城、岩手、東京からも来る。福島、山形は土地が暑くなる所だから患者も多いのだろう。入湯者には大きく分けて自覚のない人と、ある人、付添と三つある。自覚のな

い人が百人位。十年選手も多い。昔は荒い人も多く、家族の許可をとって縛ったりしたようだが、今はとても面倒をみきれないので断っている。

定義は、かつて「陸の孤島」であり、人々は「マタギ」として狩猟を行い、あるいは樵生活、炭焼き、薪造りをしながら山腹の猫の額程の段々畑や棚田を耕しつつ、ひっそりと暮らして来た……

昭和三十四年、大倉川にダブルアーチ式のダムが建設された。徒歩か馬の背がたよりであった谷間の路が広げられ、やがて車が入り込むようになった。

「昔は細い道だったんです。レジャーブームになってからです。人が来るようになったのは……それまでは人里離れた場所だったんです。ええ、狐も居ましたし、熊なんかもしょっちゅう出て……」（早坂氏）

その道を、患者は家族や周囲の人々に付添われながら、あるいは徒歩で、あるいは荷車や馬の背に乗せられ温泉へとやって来た。興奮し暴れまわるので、縄で縛られている者も多かった。

「昔は良く頭の悪い人達が来たもんです。縛られて歩かされたり、荷車に乗せられてね。暴れる人が多かったけど、眠れない人とか……」（定義 早坂旅館の女主人）

「上愛子に佐藤次郎さんという人が居て、その人が白沢野川から定義まで馬で荷とか人とか運んだんです。戦前の話。頭のおかしい人達も、その人の馬で運んだもんです。」（定義 みどり茶屋のバッチャン）

かくして「気ちがいの湯」は大正から大平洋戦争までの最盛期をむかえる。当時の定義温泉は栗の木片を瓦のように葺いた木片（コップ）屋根で出来ており、ランプ生活をしていた。六畳間三十一室はいつも満員で相部屋にしても入りきれ

ない有様だったという。

入浴法といって、特に決ったものはないと言うが、一種の「持続浴」といえる。八時間から九時間位ブツ通して入浴させ、それを一週間から、長くて二、三ヶ月続ける。興奮の激しい場合には縛りつけて、糞尿たれ流しのまま一週間程入れおくこともあった。この場合は「扱い人」と呼ばれる看護人がつき、食事も与えた。

「一週間位で悪い所が現われる。それでいわば病気が発散する訳だ。しかし、同じ悩みをもつ者が裸で話し合ったりするのがやっぱりいいんでしょうな。だから私は何でもない人は、入れない。観光客は相手にしません。金になるのは分ってますよ。だけどそういうもんじゃありません。やっぱり病氣をもった人は、健康な人に対してどうしても引け目を感じてしまわうんです……」(石垣氏)

「扱い人が戦争中もまだ居た。大正の初めはいなオジ、その後は大東亜戦争中も高橋ゆう蔵。患者を縛って看病した。湯船は岩で出来ているんだけど、そこに紐を通す穴がついていて、そこに縛った」(定義、石垣氏の分家の出 小林さん)

「荒い患者には二人付添がついたんだね。まあ、病院といった方がいい温泉です。若い人が多かったね、二十歳から、まあ三十歳前までの人だね。五十恰好の人も居ることはいましたがね。面白いもんで、付添とか家族には当るけど他の人には当らないんだね。性格に合わないことさせられたり、無理に勉強させられたり、恋人とうまくいかないとか、そんなことで頭が変になっちゃって来るんだね。世の中に疲れたとか、沈み込んだ人も居たね。てんか心とか馬鹿とかは来なかったね。発作的に発病した人が多かったですよ。若い女が多かった。恋に破れたとか、結婚許されなかったとか、悩みなやんで脳がおかされたんだね。終戦前までは相宿にしても入りきれず、断る状態だったね。派手に暴れる患者さんは結えて動けなくして入れる。湯壺におにぎりもって行って、食べさせながら入れたんだね。その位するとガオって「疲れて」来て、やがて落着くんんだね。三十七度だから入りきれないとか、あきが来る

とかはないんだね。冬には肌着をつけて入るんです。十二畳二つ位の男女入れたんです。ズラッと並べて入れたんですね。家族も一緒に入ってね。荒い人には付添がついてね。二人ばかりの男の付添が居たんです。え、宿にね……家族だと、どうしても手心を加えるって訳でもないんだけど、患者が言うことをきかないもんだからね……荒い患者は小さい風呂、そうさね、三尺四方位の風呂なんだけどね、そこに入れて手拭を頭にかぶせて、ここに〔後頭部〕水をかけたんだね……」〔早坂氏〕

石垣氏は、「患者の秘密だから」とそれぞれの事例についての詳しい話は避けたが、患者としては、若い人が主で、状態像から察すると心因反応、精神分裂病の患者が主流をしめていたようだ。それに躁病と更年期鬱病と思われる患者が混る。精神薄弱、てんかん、老年精神病等はほとんど来ていない。幻覚、妄想の激しい例もあった様子である。

「何も聞こえないのに『聞こえる』って言うし、見えないのに『ほらそこに見える』ってなことを言うんだね……」〔石垣氏〕

「てんかんだって言われた人があったんだ。どうしても治んないからって来たんだけど、一週間位したらやっぱり症状が出てね……意識がもうろうとして、その時のことは覚えてないんだね。何するって訳でもないけど、ボーッとしているんだ。又来年の夏来ますって言って帰ってね、冬になっても来ないんだ。やっと春になって来たんだけど、ズーッと発作がなかったって言うんだな。それで一週間位入っても、今度はもう症状が出ない訳だ。だから私は、あれはてんかんじゃないと思ってるんだ……まあ、私の経験ですとね、てんかんは治んない。あれは遺伝の病気だからね。治ったという事は、あれはてんかんじゃなくて他の病気だな。」〔石垣氏〕

幸いに平癒して山を下る人達も多かつたが反面、家族や付添が看護の疲れに眠りこけている間に、宿から逃げ出し、山に迷い、谷に転落する者が後をたたなかつた。勿論、自殺も多かつた。そのつど、消防団を始め、村総出で探索に繰り出した。「田舎人の純朴さで、別に報酬がなくとも皆一生懸命探したんですね。」早坂氏は懐しそうに回顧する。概して、村人達はまるで隣人のように病者達を扱った。

「暴れて逃げまわったり、二日も三日も騒いだりってことがよくありました。死んだり迷ったりって人もたくさん居ましたね。」(小林さん)

「逃げ出して川に入って死んだとか、山に入ったとか……。皆で探したんです。山形県の〇町の酒造りの妾の息子だったんだけど、山に逃げ込んで、消防団とかも出て、たいして探したんです。県境まで行って探したんだけど見つからず……。金に糸目はつけないからって探したんだけど……。葬式も済ませただけど母親がどうしても諦めきれないって言って、また来て……。まあ当時は車もないから歩くしかなかつたんです。この二キロ位先を母親が歩いていて、何となく息子の口笛を聞いたような気がしたんだけど、幻惑かと思つてそのまま来たんだそうだ……。三年ばかりして蔵採りの人が山に入って、檜の木に人が下つているのを見つけたんだね。ミイラのようになつてね、風でカラシ、カラシで鳴っていたんだそう。下に紺の着物と草履があつた。それで連絡し、母親が来てみた所、まさしく息子の着物だったんだね。それが、丁度口笛を聞いたつていう場所の上の方なんだね。終戦のあとさきの話だね。」

(早坂氏)

「別の話でね……。この上の方に大滝という滝があるんだけど、二十四、五の女の人が夜、逃げ出してね、滝で死んだんだね。神経患者は自分は夜眠れないもんだから、皆が寝静つた所で逃げ出すんだね。皆で探したけど分らずに……。その親が、何となくその沢に行つてみたくて探したら、いたんだね、まあ、霊が呼ぶつて言うかね、あるんでしょね……」

また、若い女だったけど、橋〔湯川橋〕の上に下駄をキチンとそろえて、手首を切つて川の中で死んでいた。恋のことで死んだんだと思うね……」〔早坂氏〕

IV 終章

すでに何代目かの温泉の当主 石垣氏は、「精神の病氣は医学ではどうにもならんでしよう」と言いきる。「頭のことに関しては、どこの精神病院にも負けない」という強い自負がある。

「精神治療法でもんで勝手に患者を縛つて、麻薬みたいな薬飲ませる訳でしょ……現代医学でも眠れないのを眠らせたりは出来るでしょう。だけど、ここでは自然に眠れるようにするんです。人工的に眠らせるのと、自然に眠れるようにするのは、どっちがいいかっていえば、決つてるでしょ……」

「十年も病院に居るとね、もうズタズタになつて来るんですワ。それが、二、三週間でピタッと良くなるんです……」

ここ十年間程で、定義の町は大きな変貌をとげた。定義如来への参詣客が、バスや乗用車を連ねて押し寄せるようになったからである。土産物屋やホテルが俄に建ち並び、週末ともなると狭い定義の町は、警察官が交通整理にくり出す程の混雑となる。しかし、更に山深い定義温泉は、そんなあわただしい世の動きも知らぬげである。

(注) 定義如来——本尊は定義町、極楽山西方寺に安置された中国渡来と伝えられる阿弥陀如来の画像である。この地に落ちのびた平貞能が、重盛公の遺命を奉じて、持ちきたったものと伝えられている。「一生に一度の大願は必ず叶えてくれる」と信じられ、特に、古くから縁結び、安産の守護仏として崇敬を集めている。

(付記) この野外調査は、昭和五十一年十月、十一月の両月に行った。落葉をふみながら山に入ると、黄、紅に色づき枯れかけた木々の葉が心もとなげに舞っていた、そんな頃である。話者は皆、明治、大正生れの人達であり、早坂氏が七十七歳で最長老である。玄関先で、あるいは炬燵に入りながらこの聞書は序々に出来上っていった。いづれ消えゆく運命にあると思われるこれら民間療法を、今記録にとどめておく必要があると考えたので、ここに報告した。この種の調査は、日本常民の狂気観——人々は狂気をどうとらえ狂者をどのように扱って来たか——を知る上で貴重な資料となるものであるが、残念ながら、わが国では従来顧みられることのほとんどなかった分野でもある。

稿を終るにあたり、本調査に御協力いただいた方々、および、御校閲いただきました東京医科歯科大学精神科島蘭安雄教授に深く感謝の意を表します。

文 献

- (1) 西沢 勇『秘境“定義谷—平家落人伝説と定義如来—』極楽山西方寺刊(昭和四十九年)
- (2) 『宮城町誌(本編)』宮城郡宮城町役場発行(昭和四十四年)
- (3) 金園社編集部編『効能別温泉案内』金園社(昭和五十年)
- (4) 大島良雄・山本鈺太郎『温泉療法案内』実業之日本社(昭和四十九年)

Folk Curing of Mental Illness at Johge-Spa ;

Historical Review

by

Genshiro HIRUTA

380

Japan, a volcanic country, is abundant in hot springs. From ancient times, many of those spas have been used for treatment.

In this report, the history of Johge-Spa, which is well-known as the "Hot Spring for Madness" in the Tohoku area of Japan, is briefly mentioned.

It is said that the Johge-Spa was discovered in the Edo period and used for curing eye disease in the beginning, but from the Meiji period, (1868-1912), this spa became famous as the "Hot Spring for Madness". From the Taisho period (1912-1926) to World War II, it was at the zenith of its prosperity. The method of curing was similar to that of continuous bath. After the war, in response to an increase of mental hospitals, there was a decrease in patients' visits to Johge-Spa.

(60)

昭和五十一年五月四日受付

広瀬元恭の兄和達への書簡

前川久太郎

古守豊甫

古守泰典

幕末の甲州が生んだ偉材、広瀬元恭。その蘭学者また医家としての経歴・業績については喋々の必要はあるまい。ここに紹介するものはこの元恭四十六歳、郷里甲斐藤田村の長兄広瀬和達（平五郎）に宛てた手簡である。長文で仔細にわたり、かつ肉親へのものだけに忌憚のない卒直な意見が縷縷述べられており、ためにこの人の思想、経綸をもうかがい得ると共に、改めて活眼、具眼の士であったことを知るものである。

内容から見て、文末の六月十九日は慶応三年のその日であることは疑いのないところである。とするとこの四ヶ月後には討幕詔書（十月十三日）が出され大政奉還の上表（十月十四日）となり、続いて翌年一月三日には鳥羽・伏見でいわゆる戊辰戦争の開幕となる。元恭自身についていうならば、このまま騒乱の京都に留まり、本書簡の翌年三月には京都市立売の官軍「御親兵病院（後の軍務官病院、兵部省診療所）」に勤務、明治三年十月十七日に病没した。

藤田広瀬家にはなお多量の未発表の元恭資料が保存されている由、渦中の京都に在りかつ広い範囲に交友を持った人だけに、その書簡の発表が進むにつれ、幕末維新の政治史資料としても注目すべきものが現われることが期待される。

なお本書簡の貸与、発表の許可、および文中の広瀬家縁者について御教示を賜った広瀬友太郎氏は現在東京都江東区在住の医師であり、広瀬和達氏直系の曾孫に当られる。御厚情に対し紹介者一同心より御礼申上げる次第である。またこれの読下しに関し御助力をいただいた日本大学進士慶幹教授に対し、ここに併せて厚く御礼申上げる。

拙子此節之了簡ハ、醫業も十分骨折候處、醫術も盧扁の醫術如きは逆も出来がたく、假令醫術ハ宜敷とも、其人徳□□候と萬世之後迄姓名ハ遺り不申候間、已ニ五十歳之身故、醫業ハ是迄と想定メ申候、自然徳あれハ止メ候とも自ら沿ひ來候故、元周（註一）ニ譲り候積ニ致シ、公辺へも此頃國債（註二）之仕法立を認メ差上、又紙幣（註三）之仕法立を認差上、牧牛（註四）之仕法立を申上候處、漸ク牧牛之説少々御用ひも被下候やとも存候得共、未タ表向きニハ御沙汰無之候、自然牧牛之世話致シ候御役御免ニ相成ハ、直ニ其日より牛仙（註五）と改名致シ諸國遊歴仕候、尤公辺之御用故、御代官所ニ罷出、御代官ト皆相談仕、牛を養育仕候様致シ、先ッ今年之内ニ牧牛御免ニ相成候ハ、直ニ但馬丹波丹後之國を最初ニ致シ、播州ニ行き是より兵庫之開港場（註六）ニ行き、牛小屋を造り、牛を外國人ニ鬻ぎ數萬之黄金を得る積リニ御坐候、此旁ニ

兵庫ニ新島原と唱へ、京都之嶋原より之出店と致シ郭を造り候積ニ御坐候、是ハ京遊女場之者より出金致候積ニ而此頃より已ニ相談ニ及罷在候、又伊賀も牛国故、伊賀・伊勢も牧牛を十分造り、逐々関東ニ及ヒ出羽奥州迄迄も牧牛を開可申積ニ御坐候。又国債御免ニ相成、国債頭取被仰付候ハ、京都ニ而金貸、利息を取り、五六年之内ニ大金を得可申候、此兩様之内ニ一生を送り可申候、此義如何や御高案被成下、後便全々御高説御示教被下度奉
□申上候、豕も此節養育致シ、九疋と相成候、來年一ヶ年相過候ハ、百疋ニハ相成可申候、一疋金拾兩と致シ百疋ニ而千兩、二百疋ニ而二千兩と相成り、是も十分養育致候積リニテ此節も彼是飼もの吟味仕候處、麥ノ糠を食ひ候間、大ニ易ク養育出来申候、麥糠ハ一斗ニ而百文之價ニ御座候、易き時ハ百文ニ付二三斗も賣り候様子ニ御座候、御国元などにては麥糠ニ而養育致候ハ、何程沢山ニ而も養育出来可申候、御かひ御試ハ如何、是ハ恭平(註7)之如き愚鈍之所作ニハ宜敷業ニ御座候間、本人ニ進メ候得共、又愚者ハ愚者なり豕など養育する事好ミ不申候、自分豕の積り毎日ぶら／＼致、飲食さへ在之候得は是をよろしき事と致、此節も拙子より養育致候も同様、即豕と同じ暮シニ御座候、拙子が豕の餌を求メ候ニ骨折、彼是と探索仕候なれども更にとんじやく仕不申候、自分之食料ニ困り候程之人物故、迎も豕などハ養育出来様無之候、御家も早ク公事(註8)出入など長く不被遊と火事ニ而焼失仕候を幸ニ、早ク御止メ可被遊候、牛之百疋も飼、豕之千疋を養育仕候は其世話ニ而世上之うるさき悪事も耳に入不申候 牛一疋百兩ニハ相成、豕一疋拾兩ニハ相成可申と確然たる事ニ御座候得

は、毎年二万兩ツ、の黄金ハ入り申候、如此事を家之徳分と致候は後日子孫之繁栄幾許ぞや、又保村之黄金を掘り候事、御勘定奉行小栗上野介様(註9)へ嘶、試に慶固より御承知ニ而種々御嘶も有之候得共、唯々一度申上候のみ故、篤と致シ不申中ニ江戸ニ御歸りと有成候、此事十分御骨折り試候思召なら肝付七之丞(註10)此節江戸ニ罷在候間江戸ニ御越、肝付を頼ミ小栗公ニ取り入り金掘役御受持ニ被成候ハ、必定出来可申候、小栗様長ク京都ニ滞留なら拙子十分掛合、其上御越被遊受持ニ相成候様相働き可申候得共、已ニ江戸ニ御歸りと相成、残念之至リニ御座候、然シ是ハ先頃も申上候通、金を掘り候事ハ餘程目さききよくき、候者ならでハ出来ぬ所作ニ御座候、何となれハ、金掘り仕候者ハ皆盜賊ども同様盜む事を専務と致シ、盜む事上手ニ不致と金を得られぬもの故、金掘金座之役人等ハ金食ひ虫ニ而是を我食業と仕候、銀主ニ金をださせ候事を專一にす、め、金さへ得れハ逃げ走る事を工夫仕候ものニ御座候、此人情を能く解シ居り不申と一生を誤り申のミならず、大損出出来シ孫迄も貧乏神之連中と相成候事眼前ニ御座候故、前書ニ申上候通金掘りハ早く御止メ被遊と申上候も此事ニ御座候、牛を飼ひ候て損失仕候事ハ更ニ無之候、何程愚鈍之者ニ而も出来る所業ニ御座候、然シ恭平ニハ出来不申候得は、恭平ハ愚鈍中之下愚と相見ヘ申候、拙子ハ他人之子を貰ひ他「破」レ」養育致、是ニ養子ヲ求メ皆不殘譲リ已ニ子四人を貰ひ孫も出来、是も女子故、最早是ニ養子を貰ひ度存念に而、已ニ元周とも只今より相談ニ致シ罷在候、恭平迄加ヘ候と、本家を加ヘ五軒新ニ家を建て候積リニ御座候、又此頃娘米枝ハ孕ミ居り、此十月

ニハ出産仕可申候、是も女子なれハ早く養子之積ニ御座候、男子より却而早く相統出來申候、一人なりと多ク此世界ニ滞留之間養育致遣し候ハ、自然と徳分ニ身ニ附可申と了簡相定メ、金もつけ出來次第、家族を拙け可申積ニ御座候、先年ハ著述者を沢山致シ、紙孫之説にて彼是と上不振候處、終□國と相成、天誅連大流行ニ而大ニ恐れ、築城書(註11)も途中ニ相止メ申候程之□ニ御座候、實ニ天誅ハ恐れへき事ニ御座候、築城も此頃之天下之景勢ニ而ハ迎も出來不申候、城を築き、軍をする様なる事ハ已□不申事と相成り、城もなく軍ハ出來候、却而城ありて邪魔と相成候事も可有之候故、籠城など之軍ハ最早仕不申候、然るをしりながら一生築城も論せられず候、方今萬國之景勢、富國強兵を専務と仕候、日本之景勢ハ勿論萬國之景勢御承知も被為成度思召なれハ、郁造(註12)ニ御頼ミ、横浜之新聞紙(註13)御求御覽可被成候、新聞帑ハ實ニ才力ヲ發シ、智恵を増シ候新書ニ御座候、擬牛豕之嘶のミ申上候とて、好まぬものなり、其住所の土地ニ相應せされハ、是亦國益ニハ相成不申のミならず、却而後世之者より□ひを成候大誤り仕候、御地邊之土地ハ許行が農圃より□無之と奉存候、何分公事出入ハ早く御止メ可被遊候、公事出入ハ多ク婦女女子之了簡より生シ申候、大謀有之候ものニハ決而無之事ニ御座候、能々御勘考あり度ものニ御座候、婦女子之談ハ御取り用ひ無之事肝要ニ御座候、右申上候も、今日雨天ニ而終日久々ニ而他行不仕候故、午睡後筆をとり、彼是へ返書仕候餘りニ而、不斗長だんぎ申上候、平生之談話と思召可被下候。

六月十九日雨中

廣瀬元恭

以上

藤田兄上様

尚々時下折角御自愛專一ニ奉存候、扱申上候迄も無之候得共、筆之餘りニ申上候、手塚道白(註14)事此頃承り及候ニ、折角養子ト相成、何事出來候や何れとなく出奔仕、行き方相分り不申元周迄申來候と申事ニ御座候、拙子兼而申上候通、拙子之力をかり、彼の屋敷へも出入も出來、終ニ養子ニも致候と申様ニ相成候ニ、然るを拙子を是迄たおし候のミニ而、拙子之為メニ相成候事ハ毫髪も無之候程之薄情もの、迎も拙宅を離れ長持ハ無之と、拙子毎々家族共ニも申傳へ居候事ニ御座候、定而国元へも帰り申間布事と奉存候、然シ内密ニ御序之節御尋御試可被下、假令帰國仕候とて以後ハ更ニかまひ申間敷と最早相定メ候間、決而御かまひ無之様被成下度、只今より申上置候、國下宜敷人物無之と申ハ此事ニ御座候、朝廷ニ人なきハ勿論之事と被存候、上下總而賢者ハ稀なるものと相見へ然シ新將軍様(註15)ハ才名高く相成、異人等ハ大ニ感服仕候由ニ而、何ニ付ても賞美致參り候、佛良斯ニ御頼ミ之軍船五十六兩万(ママ)と申事に御座候、英國へハ二艘ニ而五十万兩之船御頼ミニ相成、來三月迄ニ出來仕候と申事ニ御座候、兵庫も此十二月七日より御開ニ相定り申候、西國諸大名より上書致シ、長州を元の如ク致度と皆申出、將軍家一家え惡き様御添へ申上候由ニ御座候、然る事申上候とて、何も新將軍様ニハ更ニ貪着仕不申候、中々大量ニ而少量之諸大名何そ其志をしらんや、軍器調候迄ハ此儘なれども、軍船軍用相調候上ハ、鬼ニ金棒、誰一人も天下ニ及ぶものハ無之候、此節アラビヤ國之馬二十疋餘り到來

仕候處、唯老人のり候者有之のミニ而、外老人のれ申さず候、横浜ニ而修行致候公辺之ものは兩三人のりきり申候、十里之路を走り候とも肝(汗カ?)出來ずと申事ニ御座候、誠ニおだやかなる馬にて、小兒と遊び居る程之馬之由ニ御座候、身體之短かき人ハ騎兵隊之中ニ入る事難叶候、アラビヤ馬ニのり候者ハ、身の丈ケ高きものならでハのれ申さざる由に御座候、西國諸大名中上京罷在ものハ、細川侯、薩州侯、伊豫宇和嶋侯等ニ御座候、土佐侯ハ先達上京被致候得共、直ニ引き歸り申候、藝州侯も此節上京致候、越前春嶽侯も上り居り、其外御老中板倉侯等ニ御座候、下ハ先ツ穩之体ニ御座候、米も逐々下直ニ相成候と申のみ下り不申候、百文ニ付忝合二勺位之處ニ而ハ、忝合五勺ハ逆も賣不申候、新麥ハ忝合五勺漸賣出シ候由ニ御座候、尤も麥も宜敷品、百文ニ忝合三勺などと申居候、其外先ツ同様之事ニ而更ニ引下げ不申候、唯料理屋、遊女場等ハ盛なる事に御座候、毎夜一二人之首ハ天ニ飛ひ川ニ流れ申候、諸士之多き事江戸にも劣らざる様ニ相成候、盜賊ハ白昼ニ大金を奪ひ逃けて分り不申候、夜分ハ容易ニ他行ハ出來不申候、盜賊ハ勿論火つけ多く流行仕候、右等之事何程申上候とも何之用にも立不申のミならず、却而愚癡をまねく様なる事申上恐入候、実ハ人之評判もきくニ及ハず、天下の景勢を論するも其人之役ニもより候事なり、唯々下々之者ハ、我より高名をなして人より我評判いたしもらい度ものなり、天下よりも其所作をきいて感心いたさせ度ものニ御座候、尚胸懷多事難盡筆端候、此次ハ先是にて閣筆、書後音可申上候、時下折角御自重所祈御座候、

頓首

右ニ而最早申上候義無之と存、御書面引出拜読仕候處、仁藏殿(註16)之事未タ不申上候、本人事ハ最初拙宅へ相見へ、土産ニ木綿ニ反惠ミくれ、拙子病用ニ出かけ候処故、元周に申付、酒看ニ而取持、終日談話も仕候、其後拙宅ニ逗留被致、旅中為見舞菓子尅箱差進得は、御用向ニ不都合故、矢張旅館ニ滞留致、四五日を經過すると大坂へ役人仲間ニ而交代致、又上京致候と申、暇乞ニ相見へ、尔後何之沙汰も無之候、拙子ニ供應致度心組も有之候得共、拙子と話し致す事ハ格別好まぬ風ニ相見へ候間、本人之存意ニまかせ置候、田安役人大坂にも面会不仕候、○花輪藤兵衛殿(註17)胃弱ニ而大煩罷在候由先年より大屋姉様(註18)ニ差上候和約丸と申丸薬御座候ハ、御進、御試可被遊候、又橙皮油冷水ニ五六滴ツ、落シ、毎日兩三度ニ御用、御試可被成候ハ如何や、庸醫之煎薬ハ胃弱之者之為メニハ、却而害を招き候もの多く御座候、此人も娘之事より病氣を出し候由、元來少量なる小人故ニ御座候、家事之事、其外諸事婦女子と相談致シ、又ハ娘などの事心配致、我身を損し候程激なる事ハ無之候、能々御出會之節御教諭被下、血で血をあらひ候も同様と思召されへ候、○石川奥医(註19)之事、今帝へ種痘たと申嘶ハ全ク虚説、石川坪井信良(註20)などハ実ニ少量なる小人、別而信良などハあきればてたる人物、奥医ニ而永持いたせハよいがと存候、決而此兩人などのよせ事ハなき事と思召さるへく候、皆出精致候も御老中之眼くらより出精も仕候、新將軍様なら活眼故、人物も撰ひそこない申間敷と存候、先將軍様ハ御老中まかせ故、誠ニ御氣之毒之事のミ多く有之候、新將軍之代と相成、逐々人物も撰ひ直し専ら御改革急務ニ被

致候、貴兄も今十年之間、御債發致し試度思召、全ク火事より生シ候大業故、少々金も亦積り候へハ直ニ穩居之志さしも生シ可申やと只今よりも案じ申上候、此世界ニ逗留中御働き御試など御出かけも宜敷御座候、以上

書簡内容は以上の如くである。全長一八三センチに及び、元恭自筆の竹と蘭の画、その画賛、「医者為民之父母 慶応二年丙寅新寿 天目山人」の書などをつなぎ合わせ、その裏面に認められたものである。以下、文中の事項に対し若干の註解を試みたい。

註1 元周 三枝元周のこと。甲州峽北三枝雲岱の子、元恭の門人となり次いで養嗣子ともなつて広瀬元周を名乗つた。明治二年の「民間救急療法」同七年の「婦嬰新説和解」などの著訳がある。ちなみに元恭は門人田中久重（東芝創立者）の妹いねを娶つたが、実子には恵まれなかつた。

註2 国債 幕府は対外対内の軍費の調達に苦慮し、この慶応三年だけを見ても、兵庫開港の要用資金として八月十九日に大阪に設立の商社より近国対象に金札発行の達しを出し、同十月二十日には関東諸国の御用金献納者に金札を交付して二年後に正貨と換えることを約している。国債に類するものではあるが、いずれも特定地域の特定者に限られている。これを元恭の進言が容れられたものとは考え難い。国債という言葉を用いている以上、元恭の意図はより広範なものであつたと思われる。先覚の人というべきであらう。

註3 紙幣 各藩や一部の旗本の知行地では紙幣とも言うべき藩札私札のたぐいが発行されていたにもかかわらず、不思議と全国通用のものが幕府の名で出されたことはない。元恭はこれを勧めたものであらう。折しも鑄砲の必要から銅が払底し、安政六年九月には佛具への銅の使用を禁止、翌万延元年閏三月には銅器の輸出を禁止し、かつ同年十二月には鉄製四文錢が発行されたにもかゝらず、眞鍮製一文、四文、百文錢の不足は解消しなかつた。

慶応二年一月にはこれへの対策として長年の金銀貨一分と錢貨千文との交換比率を自由相場とし、銅錢の歩増し通用を公認したほどである。結局、紙幣の発行は維新政府によつて始めて行われ、慶応四年一月、京坂の豪商に會計御用を命ずると共に紙幣準備金三百万兩を課し、同年閏四月所謂太政官札の発行を決定、同年中に二千万兩の紙幣が出された。いずれも元恭のこの書簡の数ヶ月後のことになる。

註4 牧牛 横浜開港に伴う欧米人の居留で牛肉・牛乳の需要がおこり、また本邦人間にも佛教伝来以来千年を経て肉食の習が復活した。文久二年閏八月、横浜住吉で伊せ熊なるものが牛肉の煮売りを始め、後年のいわゆる「牛鍋」のはしりとなる。干牛丸や井伊家の味噌漬牛肉のごとき薬食としての牛肉利用はあつたが、一般への普及では横浜開港が直接の契機となつたことは否めない。役牛の繁殖および利用は当時既に京都近辺の諸国に殊に盛んであつたので、京都在住の元恭がこれに注目したのであらう。たゞし彼のいう牧牛が役牛の肥育を意味するのか、また肉用種そのものを導入して繁殖、飼育することなのかは判じかねる。ちなみに

にこの前年の慶応二年、神戸で買入れた牛を横浜に回送して利を得たものがあつた。

註5 牛仙 元恭の死はこの三年後であるが、この間にこの牛仙を号としたことはない。名は翼、他に礼卿、藤圃、天目山人などと称した。翌年の政変で、牧畜を晩年の業とする志は遂に得られなかつたと思われる。

註6 兵庫開港場 紆余曲折の終過を辿つた兵庫開港ではあつたが、この年十二月七日遂に開港に決した。この問題では幕府、朝廷の態度は転々し、文久二年五月のいわゆるロンドン覚書によつて辛うじて開港の五年延期に成功したものの、慶応元年九月には英米佛蘭の四国艦隊が兵庫に示威来航して再び開港繰上げを迫つた。これに対して朝議はむしろ硬化し、兵庫開港を約した罪により幕府に老中阿部正外、松前崇広の罷免を要求、その後家茂は辞表を呈して兵庫開港の勅許を奏請したが早期開港不許可の勅書が出された。しかも慶応三年、延期五年の開港約日を迎えるに当り、新将軍慶喜が二度にわたつて開港勅許を願つたがその都度不許可の朝命が出され、五月二十三日三度参内して翌二十四日に勅許を得た。こゝに初めて十二月七日の開港が布告されたのである。元恭の本書簡はこの六月六日の布告直後に当る。

註7 恭平 和達元恭兄弟の末弟。当時京都の元恭方に寄食しつゝ、あつたもの、ようである。京都の神原家へ養子に迎えられる。ちなみに元恭の父も恭平と称した。和達の孫として現在も宏大な藤田広瀬家を守つておられる和子氏（前記友太郎氏の母堂）の談によれば、元恭は兄和達を敬し、この弟恭平をも深く愛していたと

のことである。

註8 兄和達の火災に關連した公事であるが、その内容および瀬家の立場に關しては不明。

註9 小栗上野介 旗本小栗忠順。武鑑ではこの慶応三年に勘定奉行兼外国奉行の要職にあつた。この翌年、御用金埋蔵の噂を残しつゝ、その采邑地上州権田村で官軍の東山道鎮撫總督岩倉具定に斬られた。かつて尊攘家の森田節斎、頼三樹三郎、吉田松陰らとも親交のあつた元恭であるが、一方では斯様な幕府要人にも信任のあつたことは注目に値する。文面では終始佐幕的であり、開國に向おうとする幕府の姿勢に共感している。

註10 肝付七之丞 小栗上野介に近い人物と見られるが、武鑑にはその名を見ない。

註11 築城書 元恭はかつて安政五年に「築城新法」なる一本を上梓しており、また勝海舟に協力して京都八幡山に砲台を築いたりもしたが、これらとは別に上梓を見合わせつゝ、あつた築城書の稿本があつたと見られる。

註12 郁造 和達および元恭の弟。東京牛込の坂倉家の養子となつた。

註13 新聞 横浜での欧米人間の外字紙は開港直後に始まつた。邦字紙として最も早いものは文久二年一月に幕府の蕃所調所による「官板バタバヤ新聞（江戸本所万屋兵四郎発行、同年八月以降官板海外新聞と改称）」であるが、元恭の和達に勧めているものは、「横浜の新聞紙……」とあるところより、最初の民間邦字新聞としてこの前年十一月に横浜で米人ベイリーによつて創刊され

た「万国新聞紙」を指すものと考えられる。

註14 手塚道白 身内か同郷の医師と思われるが不詳。

註15 新將軍 慶喜のこと。前年の慶応二年七月、第二次征長の指揮のため大坂城に在った家茂が死去、よって文久二年來將軍後見職にあつた慶喜が宗家を継いだ。

註16 仁藏 元恭と和達の相方に関係する人物らしいが不明。

註17 花輪藤兵衛 近親者と考えられるが関係は不明。

註18 太屋姉様 元恭の姉。藤田村深沢家に嫁す。

註19 石川奥医 この年の武鑑では奥医師十八名中に石川香雲院法印とあり、いわゆる石川櫻所、良信のこと。奥州登米郡櫻楊村

に生まれ、伊藤玄朴、黒川良安らに学び、安政四年ハリスの熱病を療して名を挙げる。仙台藩医を経て幕医、殊に慶喜の寵をうけた。陸舟庵、香雲閣、玄貞、玄水と称す、維新後は新政府軍医寮

に出仕、軍医監となる。明治九年、林洞海・石黒忠憲らと「内科簡明」を著す。

註20 坪井信良 慶応三年の武鑑では坪井信良法眼。越中高田利屋に生まれ、幼名末三郎、後、良益、椋里、初白とも称した。小

石元瑞を経て坪井信道に学び、その女婿となる。福井藩侍医より

元治元年來幕府に仕え奥医師となり慶応元年法眼に進んだ、明治

には静岡病院に勤務した。著訳書に「医則」、「亜的兒吸入法試

験説」、「侃斯達篤内科書」、「新薬百品考」、「羅篤氏医語韻府

がある。ちなみに、元恭をはじめこの信良の義父坪井信道（誠軒）の門にあり、その塾頭をも勤め、後に京都に上つて学塾日習堂を開いた。したがって信良とは同門ということになる。

終りに、和達直系の令孫広瀬和子刀自、曾孫友太郎氏の御教示

や、藤田広瀬家について調査された田中金重氏（日本医事新報二

一〇五号、昭和三十九年）、佐藤八郎氏（読書山梨・山梨県立図

書館報十六号・昭和四十年）の論報に依り、甲州きつての名家藤

田広瀬家ならびに広瀬和達に関し若干附記したい。

藤田村は現在の山梨県中巨摩郡若草町藤田であり、こゝに業を

創めた初代広瀬中庵（周平・一七三二—一八〇九年）は、甲州市

川大門の医広瀬保益の四男に当る。天明二年の「痘科鍵技粹」の

著者として知られ、また甲州の尊皇家山縣大貳と親交があつたと

される。二代恭平（後に父の周平を襲名）も医を継ぎ、和達、元

恭らはこの二代恭平の子、すなわち長子和達は藤田広瀬家の三代

を継承した。和達もはじめ医業に従つたが後年は専ら資産を管理

する立場にあつた。長寿を全うし、明治四十一年十一月十二日に

九十一歳を以て没するが、医家としては甲州において最初に種痘

を試みた人として著名である。すなわち、在京の元恭より杉村元

成に託して痘苗が齎らされ、これを子篤太郎（後の貴族院議員広

瀬和育—藤田広瀬家第四代）に施したのを甲州種痘の嚆矢とする。

ときに嘉永三年の冬であつた。ついでこれを受けるもの甲州

一円より他国にまで及んだという。

日本医史学会例会記事

三月例会 三月二十六日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

- (一) 「軍医緒方惟準」 中宮安夫
- (二) 「ゲッチンゲン文庫」について 高木和男

四月例会 四月二十三日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

- (一) 瘍科秘録にみられる痔瘻手術の復元 衣笠昭
- (二) 内視鏡の歴史 多賀須幸男

六月例会 六月二十五日(土)

慶応義塾大学医学部北里記念図書館第一会議室

- (一) 医療保障史における済生会の役割 酒井シヅ
- (二) 中国古代医学と医療過誤 家本誠一

七月例会 七月二十三日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

- (一) 「瘍医新書刺絡編」について 大鳥蘭三郎
- (二) 「子女子産論」について 小川鼎三

映画 医療器械のあゆみ

関西支部春季大会

とき 昭和五十二年六月十九日(日)午前十時より
ところ 大阪市南区末吉橋通三 牟田病院講堂

研究発表

- 一、同志社外人宣教医 長門谷洋治(日生病院)
- 二、緒方洪庵の除痘館の位置 古西義麿(大阪市立図書館)
- 三、小森桃鳩著『病因精義』について 阿知波五郎(京都)
- 四、和中散に関する二、三の疑問 宗田一(大阪大)
- 五、最近収蔵の度量衡器類について 青木允夫(資料館)
- 六、江戸時代・京都における解剖の事蹟 杉立義一(京都)
- 七、江馬元恭訳『弗吉作無・熱病全書』について 安井広(愛知県)
- 八、大垣藩医北尾春圃について 青木一郎(岐阜県)
- 九、高野長英訳・西川貫蔵改訳・ミュルケン『三兵用訣』について 岩治勇一(大野市)
- 十、石井信義の生母中山むろとその子孫 中山沃(岡山大)
- 十一、本間玄調先生の人間性と自準亭の雰囲気 山中太木(大阪医大)
- 十二、第五回内国勸業博出品目録に見られる歯科の位置と針子 杉本茂春(大阪)
- 十三、不通朝鮮医学、不可以説日本及中国医学 三木榮(堺)

江馬蘭学塾資料展 出品目録

昭和五十二年五月二十一、二日、第七十八回日本医史学会総会が岐阜県羽島郡川島町の内藤記念くすり博物館で開かれた。それを記念して、江馬文書研究会（代表齋藤信）の人々により江馬蘭学塾資料が展示された。その出品目録を紹介する。

① 江馬蘭齋顕彰碑 拓本

江馬蘭齋の功績を末永くたたえるために、昨年九月二十六日、顕彰碑の除幕式が行なわれた。碑は大垣市医師会館前庭に建てられた。ここにかかげたその石ずりは、碑の表面と裏面であり、表面には蘭齋の新元会図賛詩が、裏面にはその略歴がぎざぎざでいる。賛詩の筆者は小川鼎三東大名誉教授である。（青木一郎）

② 蘭齋の処生訓「言志篇」 江馬細香筆

末尾に「文政己丑年（十二年）冬十二月 八十三翁江馬元恭識 女細香書」とある。

③ 杉田玄白書翰 江馬蘭齋宛

当年は珍しくオランダ人が江戸に来たこと、そのオランダ人がフランス婦人の細工になるろう製のホーフトを持参した、とあるのは、大槻玄沢が「西賓対晤」の寛政六年（一七九四）の条に記したオランダ商館長ゲースベルト・ヘンシー Geijsbert Hemmij 持参東上のフランス製ろう細工の頭部解剖模型の記事に相当す

る。長崎屋における対談記事は同年五月四日のこと。玄白はこの四日の当日には支障があつて欠席したから、後日、この模型をもらうけた桂川甫周から見せてもらい、その精巧さに驚嘆し、江馬春齡（蘭齋）に報じたものである。この原品は失われたが明治初年に桂川家から東京大学に寄贈された寄木造彩色の模型が医学部資料室に伝存している。なお、文中の春泰はこの前年の寛政五年十月六日、四十八才で死亡した嶺春泰のこと。ホーフトは *loofdr* 頭、スビールは *scher* 筋、キリールは *Klier* 唾液腺、アールドゲウスはアブラハム・ムンチンクのアールドゲワツセン（植物とその薬効）で、はやくから蘭学者の間で知られていた和蘭本草書である。江馬春齡所蔵本を嶺春泰と大槻玄沢が期限付で借覧し、それを玄白がわきから見せてもらい、その薬物の効能を安岡玄真に翻訳せしめている事実が判明し、注目に値する。（片桐一男）

④ 前野良沢書翰 1 江馬蘭齋宛 正月廿日

年頭のあいさつ状兼礼状。良沢晩年の家計は豊かではなく、と角、淋しい日を送った、と伝えられている。門人江馬春齡は師の前野良沢に、年頭の祝儀として白銀貳両を贈り、それに対して良沢は丁寧な名を記したあと、花押のかわりにオランダ語風にサインを加えていて印象的である。なお、追伸にみえる京都御用が、寛政十年二月春齡が五十二才で西本願寺法主文如上人の診察に上ったことを指すならば、良沢七十六才の筆ということになるが、断定はされない。（片桐一男）

⑤ 前野良沢書翰 2 江馬蘭齋宛 三月十五日

本状にみえる Jones なるサインは諱の薫を良沢自らヨミスと訓じたことの明証となる。

江馬細香の「蘭化先生伝」によれば、良沢は致仕後、茅屋を根岸貝塚に築き、終老の地としていたという。本状によれば、同じ根岸であるが転宅した事実のあったことが証せられ、そのいづれもが借家住いであつたことが判明する。また、転宅直後なるためか、旧宅よりまだ蔵書も取寄せ終つていず、蘭斎の質問に対する回答にも支障を来しているようで、その蔵書中には当時蘭学者間で有名なドドニエース Rembertus Dodonaeus のヨーロッパで有名な「Cruddt Boeck (和蘭本草書)」が含まれていたことが判明する。(片桐一男)

⑥ 宇田川玄随書翰 江馬蘭齋宛

宅田川玄随が自らの訳書「西説内科撰要」を贈呈した時の漢文の書状である。日付は寛政九年七月である。

⑦ 江馬蘭齋肖像 江馬春齋模写

文化十三年(一八一六)七十才のとき、蘭齋は肖像画に自賛したが、のち焼失した。幸い蘭齋から五代の子孫春齋が明治辛丑すなわち三十四年(一九〇一)の夏に模写したものが遺っており、本展示品がそれである。上部には蘭齋が文化二年(一八〇五)五十九才のときに草した「家訓十二ヶ条」が同じく春齋の筆で讀として加えられている。(片桐一男)

⑧ 家訓十二ヶ条 江馬蘭齋筆

蘭齋が文化二年(一八〇五)十一月、五十九才のとき養父元澄の教訓をもとにして草したもので、終わりに第二主江馬春齡元恭

とある。(青木一郎)

⑨ 富士の図 蘭医フェイルケ筆

蘭医フェイルケが描いた富士の図に、商館長ドーフがオランダ語の賛を加えた珍らしい掛軸である。文化七年(一八一〇)の作で、四代春齡活堂が彦根の道具屋作右衛門より入手したものである。(片桐一男)

⑩ 原病学図 一枚 桑原高美著

明治八年、桑原高美が大垣の岡安慶介書店より刊行し、診断の一助のため当時の蘭方医達が診察室にかかげたものである。序文の作者、江馬元齡は金粟と号し、四代春齡活堂の弟である。著者の高美は養老郡上石津町一之瀬の人、林庵と号し、天保十二年(一八四一)小森玄良塾へ入門、また緒方洪庵門人。格物堂(四代春齡活堂の堂号)の社中で、男森庵は江馬門人。(青木一郎)

⑪ 坪井信道顕彰碑 写真

坪井信道顕彰碑は、その生地揖斐川町によって明治百年記念事業として建てられ、昭和四十二年五月十日、その除幕式が行なわれた。大垣市の北方十五キロ、近鉄揖斐線の終点より南へ百メートル、脛永(ひらふね)街道入口にある。碑文字筆者は曾孫坪井誠太郎東大名与教授である。信道の出生地脛永は、この碑の東方三百メートルの所で、坪井信道生誕地なる標柱が立っている。(青木一郎)

⑫ 杉田玄白、伯元書翰 江馬蘭齋宛

十月十五日、杉田玄白と養子伯元との連名になっているが、筆跡を検すると、明らかに玄白の手になるものである。「勸(花押)」の箇所だけが別筆であるから、このみが伯元の筆になる

ものと見受けられる。追申の中で「私も老境」といつているが、玄白のこととして矛盾しない。

玄白は老境に入つてなお蘭学研習を望んでいる若者を養子に迎えたく物色中で、伯元とともにその周旋方を江馬春齡に懇請していたことが判明する。文中にみえる「宗元老御兄弟」とは大垣藩医吉川宗元とその弟広簡を指す。宗元は前野良沢の高弟であつた。(片桐一男)

⑬ 五液診法 江馬蘭齋訳書

わが国で最も古い洋方診断学書で、原書はホイセンの内科書「人体の排せつ物についての論」である。この原書を蘭齋は前野良沢についているとき借りて写した。良沢のすすめで嶺春泰、吉川宗元、蘭齋の三人のリレーでできあがつたといわれる。五液とは尿、便、汗、唾液、嘔吐物であり、「素問」「古今注」に「五臟化液云々」とあり、尿は五臟より出る液の一つで書名はこれによつた。

江馬塾でのテキストとなつたものであろう。開板願いは文化元年(一八〇四)で、刊行は文化十三年である。ここに展示したのは、和文と漢文の草稿、開板願ひ書、版木と刊本(漢文二冊)である。(青木一郎)

⑭ 医治答話 江馬蘭齋先生著述

表題「医治答話 全」の文字は楽翁公自書。表紙は花かつ美形御好、楽翁老公御手沢品、楽享文庫印あり。内容は「或問」「答話」の問答式であるが、文化十一年(一八一四)の刊本のときは「江波医事問答」となり、蘭齋が門人沼波周達の問いに答えたも

のである。序文によるとこの問答が文化三年より始められたことがわかる。(青木一郎)

⑮ 好蘭齋漫筆 江馬蘭齋筆 三冊

故事、故実、字義、訓誡また病家の出来事などを、何くれと筆にまかせて記したものである。

⑯ 西本願寺御門跡御病氣ニ付、京都へ罷越候一件覚書 江馬蘭齋筆

寛政十年(一七九八)二月、蘭齋が京都西本願寺文如上人の治療に立つた理由から書きおこし、上人の病状、治療、軽快の様子、京都での動静、ついで大垣へ帰るまでの出来事を精細に記したものである。(青木一郎)

⑰ 西客対話 江馬蘭齋筆

寛政六年(一七九四)四月、商館長ヘムミイ、蘭医ケルレルなどを伴つて参府した。大槻玄沢らは五月四、五日の両日、その蘭人客館に出むいて彼等と対話した。その様子を玄沢が自記したものが「西賓対話」である。この書を蘭齋が写したものである。

⑱ 管蠡秘言 江馬蘭齋筆

自然哲学とでもいふべき前野良沢の訳著書である。「管蠡秘言」は安永六年(一七七七)正月にでき上つた。この書を蘭齋が写したものである。

⑲ 和蘭医方纂要 草稿 江馬元弘

三代春齡元弘のこの訳書四巻は、文化十四年(一八一七)刊行された。ホイセンの目録によつて病門をたて衆書から類を得て摘録し、これに加えたものである。この書の凡例によりホイセン・

ブカン・アアルドゲワスなど二十種類の蘭書が江馬塾に所蔵されていたことがわかる。(青木一郎)

⑳ 蘭化先生伝 江馬細香撰

江馬細香の撰文にかかる「蘭化先生伝」は、すでに刊本として「医史料」第七号(明治二十九年)等に収録されていて周知のことである。しかし、展示本は、細香が師の頼山陽に添削を受けた無題の稿本に含まれておるものである。本典の細香の筆は文政八年から九年にかかるものである。山陽の添削の跡ならびに評語がみえて、撰文完成への過程を知ることができて、その史料価値はすこぶる高い。(片桐一男)

㉑ 蘭齋先生墓表 江馬細香撰

蘭齋病没の翌年天保十年(一八三九)三月、大垣市藤江町二の禅桂寺内に蘭齋の墓碑が建てられた。碑面の「好蘭齋先生江馬氏之墓」の十文字は、大垣藩儒官河合東阜の筆、碑文は細香が撰したものである。展示書は細香の筆になるものに後藤松陰が朱筆添削を加えたものである。松陰は大垣の東郊安八町名森の医後藤玄仲の次男で、山陽門下として名を成した。(青木一郎)

㉒ 門人姓名録 一冊

蘭齋開塾の寛政七年(一七九五)より明治十八年までの三三二名の門人姓名録である。すべてが自署とはいえない。吉川宗元、同広簡、小森玄良、藤林泰助、江馬榴園などの名が見られる。

㉓ 格物堂社中門人姓名録

格物堂は四代春齡活堂の堂号である。門人の野川杏平によって文久二年(一八六二)に刊行された。八十七名の姓名住所が列記

されているが、そのうち六十五名は前の門人姓名録にみられる。八十七名の中には江馬榴園、同天江、同元齡(活堂弟)、熊谷謙齋(熊谷岱藏、青山徹藏の祖父)などの名が見られる。

㉔ 前野蘭化先生画譜 全五冊

竹譜一冊、山水譜四冊、前野良沢(蘭化)の自署はないが、江馬活堂(四代春齡)による箱書きと説明がつけられている。前野蘭化と江馬蘭齋とはもとより師弟の間柄であるが、殊の外、心の通い合ったところがあつたようである。活堂は蘭齋六十才のときの孫であり、三十年間教導を得て人となった。したがって蘭化の自署なく、蘭化の作画例世にまれなりといえ、活堂の言には信頼がおける。各冊表紙の表題に「古人の写意」と特に添え書きされている通り、蘭化が先人の作を縮模したもので、余白に加えられる賛文には李白などの詩が認められる。(片桐一男)

㉕ シーボルト訳草木目録 江馬活堂著

四代春齡活堂は水谷豊文、山本亡羊に学び、伊藤圭介を友として本草を研究し、精しかった。本書の裏表紙には「此書ハ先年シイボルト来レルトキニ著セル書ヲ原本トシ、余チユンベルグノ書等ヲ以テ増補セルモノナリ。此本複本ナシ、貸シ失フベカラズ」と書き入れている。宇田川榕庵に同名の著書があり、冒頭に「江馬氏曰ク、此書中ノ名、和蘭名ニアラズ、皆羅甸名ナリ云々」の注があり、活堂のこの書を参考にしたことがわかる。(青木一郎)

㉖ 格物堂常用方彙

格物堂は四代春齡活堂の堂号である。天保六年(一八三五)、「藤渠江馬先生常用方彙」は門人山川昌隆の著作である。藤渠は

活堂の別号である。これを増校補したものが本書で、門人の野川杏平と安江敬内の兩名によって、文久三年（一八六三）に著わされた。江馬塾における蘭齋以来の治療処方集大成である。（青木一郎）

⑳ 中野柳圃の「四法諸時対訳」

蘭齋筆写によるこの写本の表紙には表題のほか「本文は sewel の spraakkonst に取ル」と書してある。Wim. Sewel には「Nederduytsche Spraakkonst」（オランダ語文法）という著書があり、一七〇八年に刊行、その後も版を重ねた。長崎の中野柳圃は門人の西吉右衛門からこの原書を借り受け、オランダ語文法を習得し、数編の文法書を著わした。

Sewel の一七〇八版では「動詞」の章は五十ページに及ぶが、柳圃はそのうちから *leeren*（学ぶ）を中心とした十ページをもととし、この書物を著わした。文化二年（一八〇五）で、彼の晩年の著作である。なお「四法」とは四つの話法のこと、彼はこれを直説法、使令法、死語法および無限法と訳した。「諸時」とは時称のこと、未完了および完了の現在、過去法および未来のことであり、本書はこれらについて述べたものである。この江馬本の他にはもう一本の所在が知られているに過ぎない。

㉑ 齋藤信

㉒ 中野柳圃の「三種諸格編」

本書は、馬場貞由の「訂正蘭語九品集」の中に「三種諸格トイヘルハ先生著述中ノ一書名ナリ」という一節があつて、これまで書名だけが知られていた。三代目江馬春齡元弘の筆写したものと

思われる。

内容は十三章から成っているが、十章までが主要な部分でそれ以下は、本書の題名からすれば附録と考えてもよいものである。

「三種」とはもちろん名詞などの三つの性のことで、柳圃はこれを「陰、陽、中」としている。「諸格」とは六つの格のことで、彼は主格を「正」、所有格を「主」、与格を「与」、対格を「所」、呼格を「呼」そして奪格を「取」と訳している。著作の年代は明らかでないが、比較的初期のものと考えてよい。江馬本を含めて現存するものはわずかに二部である。（齋藤信）

㉓ 単語帳 江馬蘭齋筆

蘭齋は蘭書翻訳の目的のために幾種類もの単語帳を作製している。医学用語を主としたものや、一般的な単語のもの、あるいは ABC 順のものや、はたまた小型の折本仕立にして携帯に便ならしめたものなど、さまざまである。そのうちでも、本書はハルマの蘭仏辞典、ハンノットの蘭羅辞典、マアリンの蘭仏辞典から言葉を選択して作製したもので、△印はハルマ、□印はハンノット、○印はマアリンからと、凡例をつけて出典を明記して貴重である。全百十三丁。（片桐一男）

㉔ 手紙巻物 三巻

司馬江漢、小森玄良、坪井信道、伊東玄朴、戸塚静海、緒方洪庵、齋藤方策、宇田川榕庵などからの手紙をはり合せたもので、何れも興味深いものである。

㉕ 題比剌加拉的私像 江馬金粟作

金粟は四代春齡活堂の弟元齡の号である。これは彼の遺稿集

「黄雨楼詩文集」の中にあるもので、黄雨楼は彼の別号である。

註に「桑原慎造之囑」とある。慎造は養老郡上石津町一之瀬の人で小森玄良の門人である。江馬門下の人は友人などが開業すると、きこれを書いて贈ったものである。

その他金粟にはオランダ語のヒボクラテス像賛や漢詩の「神農氏像讚」などがある。(青木一郎)

⑤ 蘭齋先生御著述草稿本入り本箱

展示品はこの本箱の蓋である。この本箱に入っていた草稿本の書名が蓋の裏に列記されている。筆者は門人飯尾静安のちの江馬榴園である。ハルマ辞書二、マアリン辞書二、ブカン内科書二、スウイテン内科書一その他七種類の書である。これらの書は七代春齡益也が京都大学へ寄贈した。(青木一郎)

「なお、江馬蘭齋に宛てた前野良沢と杉田玄白の書翰については古文書研究第六号(片桐一男)を参照して下さい」

以上資料展開催については江馬庄次郎氏、内藤記念くすり博物館の諸氏に大変お世話になったことを深謝します。

青木一郎記

新刊の地方出版医史紹介

○ 大西泰久・猪股誠也

『北海道の医療史』A5変形判 一〇六頁 非売品

札幌市中央区北一西十北海道医療新聞社刊(昭51・9)

(医史学会員には送料共一、二〇〇円切手にて頒布、同社猪股誠也宛申込み)

○ 米田 正治

『島根県医学史覚書』B6判 二二五頁 一、三〇〇円

松江市外中原町一九二 報光社刊(昭51・10)

○ 鍵山 栄

『佐賀の蘭学者たち』B6判 一五三頁 九〇〇円

佐賀市松原一丁目 佐賀新聞社刊(昭51・10)

○ 森 重孝

『薩摩医人群像』B6判 二五三頁 一、三〇〇円

鹿児島市東千石町十一 春苑堂書店刊(昭51・12)

矢数道明著『ブーゲンビル島兵站病院の記録』

本学会理事で東洋医学の権威として令名の高い矢数道明氏が去る第二次大戦中に軍医として南方各地、とりわけブーゲンビル島の第一線に従軍された折の貴重な体験記がこのたび表題の単行本にまとめられて出版された。

文字通り身を死生の間におく歲月の末、昭和二十二年三月復員されたのだが、本土と連絡の途絶えた原地で悪疫と戦い、食用となる天然資源を求めて山野を歩き、原住民と接触し、よく飢餓に悩む兵士を救うに至った努力の過程がつつましい筆で淡々と画かれていて読む者の感動をさそふ。

良質の澱粉を豊かに含む西穀椰子の話、また腐敗したさごやしに湧く虫に塩をつけて焼くと海老よりも美味であったという話、同じ腐木に群生する茸をこわごわと、しかしまず自ら試食される話など、神農さながらの活躍ぶり、外柔内剛の氏の面目が躍如としている。ほかに、じんましんに卓効を示したオルグという毒芋の莖、頑癬に効くカンシアアラタの葉、熱帯潰瘍に効く南方ムラサキの根、栄養失調の浮腫に効く檳榔樹の実の外果皮、トウモロコシの毛、アメリバ赤痢によいパイヤの葉、マラリヤにアテブリンと兼用してよかつた縞素馨の樹皮など、貴重な体験の数々が語られている。

原住民の一般衛生調査の記録も医学人類学的に貴重な報告である。推定年令、身長、体重、胸囲、肝肥大、脾腫、マラリヤ原虫、眼疾、齒疾、皮膚病、血液型、腸内寄生虫、嗜好にわたる広般な研究で、更に原住民の行なっている医療の実態についても詳しい記録がなされている。

これらの学問的労作にもまして感銘深いのは、第一線での戦争を体験しなかつた世代の吾々に過ぐる悲惨な大戦のいままであまり語られなかつた一面を教えてくれたことであろう。それは西歐的ヒューマニズムとは異質な日本の人道主義とでもよんだらよいのかもしれない日本人の琴線に触れるものである。

医道の日本社刊 一五〇〇円（大塚恭男）

矢数道明著『臨床四十五年 漢方治療百話』

第四集』

著者は昭和三五年に『漢方治療百話』第一集を刊行されて以来、五年毎にその間の業績を取捨し、粹をすくって、第二、第三集と刊行され、昭和五〇年末に表題の第四集を上梓された。

全巻は第一編、治療篇、第二編、論説篇、第三編、隨筆篇、第四編、叢談篇の四部から成り、ほかに附録として対象期間の著作総目録がある。

治療篇は著者の専門とする漢方治療の治験例からなり、論説篇は漢方治療に関する綜説や啓蒙的論文のほか、医史学にかかわり

をもつ「明治以降漢洋両医学の対立と交流の変遷について」とか「後世派医学（金元李朱医学）の特質について」などの好著がみられる。

医学関係の論文は随筆篇、叢談篇に数多く見受けられる。著者の最大の研究テーマである田代三喜、曲直瀬道三、同玄朔らに關する論者が最も多くあわせて八篇を数える。この中には例えは「曲直瀬玄朔が後陽成天皇に灸治をした始末記」のような注目すべき論文がある。これによると従来、慶長三年に玄朔が後陽成天皇に灸治を行なつたとされているのは誤りで、この際は玄朔が灸治を進言したが一條家、鷹司家の先例がないとの反対で実施には至らなかつたとのことである。そして実際に天皇に灸治を行なつたのは、慶長九年五月二七日で、後陽成天皇が癰腫を患わられた時に玄朔がこれを行なつたという。この折は中ノ院入道也足軒が先例をみつめてやつと実施に至つたとのこと、この先例がいつのことかは記録が煙滅した現在知るよしもないが、それが事実とすれば玄朔の場合には天皇に施灸した二例目といえるわけで、灸治の歴史上きわめて重要な発見といえよう。

著者の倦むことなき探求心に深い敬意を払い、本書が旧三書とともに同学諸兄姉に広くむかえられることを期待する。

(大塚恭男)

二つのハーヴィ伝

阿知波五郎著『血液は循環する——ハーベイ伝』

中村槇里著『血液循環の発見——ウィリアム・ハーヴィの生涯』

ウィリアム・ハーヴィの著『心臓と血液の運動』は岩波文庫で読めるが、日本語による伝記は今迄なかつた。しかし、昨年（一九七六）、阿知波氏、本年（一九七七）中村氏によるハーヴィ伝が出た事は喜ばしい限りである。

阿知波本の目次はハーベイの生涯・『心臓の運動について』（血液循環説のまえ）・ハーベイの『心臓の運動について』（血液循環について）・『血液循環』説の受けとりかた・『血液循環』のあと・弟子と友達・ハーベイの死・『血液循環』発見の影響となり、中村本は出自と修学・ハーヴィ以前・青年から壮年へ・心臓と血液の運動・循環論の着想・ハーヴィの生命観・動乱のさなかに・動物の発生・血液循環論の行方・晩年と死である。

阿知波本は国土社の青少年向けの「世界を動かした人びと」シリーズの第二巻であり、青少年向けの啓蒙書という制限がある。

ハーヴィの生涯と著『心臓と血液の運動』を中心に書かれ、ハーヴィ以前以後の解剖学と生理学史が記され、ハーヴィの信奉したアリストテレスの遺跡探訪から始まる。この本の第一の特徴は前著『ヘルマン・ブルハーヴェ』でもとられた実地探訪調査の手法である。それが読者をとらえ、豊富な写真・さし絵と共に、

臨在感を与えている。

中村本も岩波新書という制限があるが、一般向けであるため、質量共に阿知波本を上回る。中村氏は生物学通史書『生物学の歴史』河出書房新社、『生物学を創った人びと』日本放送出版協会を手がけており、彼の今までの主研究の一つはハーヴィイ研究であった。その点で本書は日本での最適任者が書いたものと言うことが出来る。

ハーヴィイはその生涯に於て、血液循環論の内容も変化して行く。阿知波本ではハーヴィイの主著をもととしてハーヴィイの血液循環が解説されている。中村本はハーヴィイの生理学思想とからめながら、その後の著書『血液の循環』や『動物の発生』をも追ひ、ハーヴィイの主張の変化を明らかにする。そしてハーヴィイの生物学史上の最大の功績が血液循環論に限定してはならなく、実験生理学とその方法の発展継承に意味を見出している。またハーヴィイが決して機械論者でなく、さらにガリレオ流の力学的手法（例えば血流量の測定）がハーヴィイの第一の手法や根拠でなかったことを明確にしている。

両書ともハーヴィイ以前の解剖学・生理学を示し、ハーヴィイの立場を浮彫りし、さらにハーヴィイ以後を追う。しかし、中村本は王立協会あたりで筆を止める。阿知波本は一九四〇年頃までに至るが、必ずしも心臓と血液循環の知識の深化と発展をち密に適切に追っているとは言えない点がある。勝手な事を言えば、両書が、現在の中学理科あたりの知識が確立した過程を適確に追って呉れたら、読者達の現在の知識とつながり、さらに、ハーヴィイのため

にも読者のためにもなったと思われる。

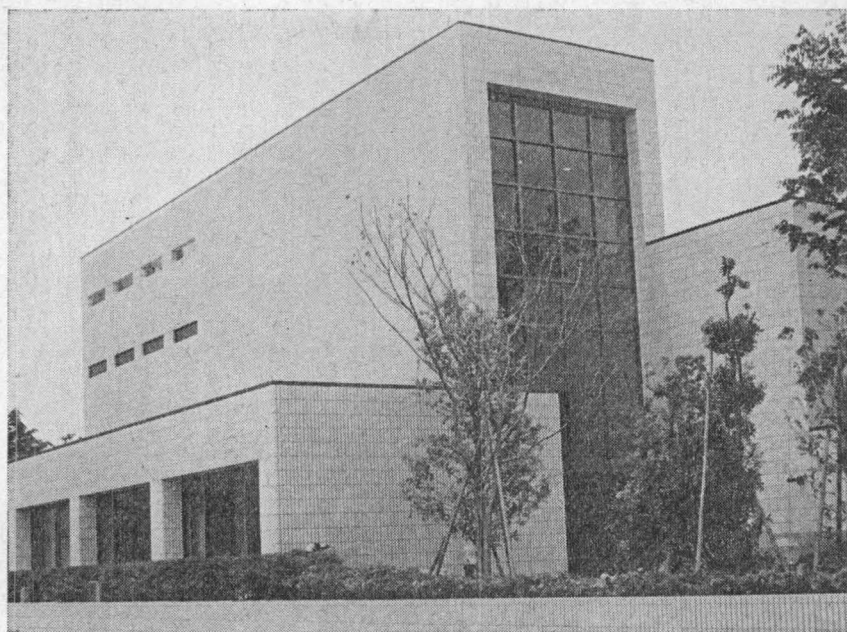
ハーヴィイの研究は心臓の運動と血液循環にとどまるものではなかった。しかし、彼の他の研究は日本人に殆んど知られていない。中村本は、*Ⅹ*動物の発生において、ハーヴィイの発生学を『動物の発生』の検討により紹介している。

両書はこれまでのハーヴィイ研究の検討調査の上で書かれているが、ハーヴィイの伝記的資料が少ないことが、両書の構成の上で、生命科学史上のハーヴィイという形をとらせ、その事が、読者に生命科学史を学ばせる好結果となったことは有意義である。

両氏の育ち、立場、関心の方向が両書の通説からうかがわれ、中村本出版を機会に、評者は阿知波本の再読により、両書の併読をした結果、両書のちがいが、お互いに相補的な役割をなして、一層の理解を促した。そこで両書の併読をおすすめる。どちらも「である」調でなく、「です」調であることが、内容を読みとりやすくさせている。敬愛する大先輩と畏友の著書を一諸に読み、書評を書かせていただいで感謝している。

（阿知波本、本文二一八頁、年表七頁、国土社、九八〇円。中村本、本文二一六頁、岩波書店、岩波新書九九二、二八〇円）

矢部 一郎



医学文化館の落成式を挙げる

去る六月二六日、東京の郊外の閑静な地、青梅市黒沢に「医学文化館」の落成式が挙行された。これは昭和四七年金原出版(株)の創業百年を記念して誕生した財団法人日本医学文化保存会が後世に日本医学の発展の過程を正しく伝えるべく、その遺産の保存、展示の場所として建設をすすめていたものである。

このたび完成した一号館は耐震、耐火、防湿の鉄筋コンクリート二階建て五八〇平方メートルで、展示室、保存庫、閲覧室、書庫、作業室、事務室からなるが、さらに二期工事が進められ、最終的には一、〇〇〇平方メートル余になる予定である。

落成式の披露式には武見日医会長、宮坂国立国会図書館長、安達東京国立近代美術館長、山崎青梅市長ら関係者一五〇名が出席。本学会からは小川理事長はじめ緒方、大鳥、大矢、大塚敬節、中野氏等が出席した。

なお、医学文化館が本格的な活動を開始するのは、建物の完全な乾燥を待つために来年四月になる予定であるが、それまでの事務的連絡は金原出版(株)内医学文化保存事業部および日本医学文化保存会事務局で行なっている。

正誤表

本誌第二十二巻第四号（昭和五十一年十月発行）

阿知波五郎「蘭学期の「自然」とを「医へ自然、臣僕ナリ」との出典について」の正誤訂正表

ページ	行	事項	訂正事項
三三三	五	(一七一七)	(一七四二一—一七二六)
〃	四	Commentaria in Hermanni Boerhaave aphorismos	Commentaria in Hermanni Boerhaave aplisrismos,
〃	一〇	φύσις	φύσις (以下該当部々訂正)
〃	一八	ズン、スクアイーテン	ズン、スクアイーテン (以下該当部々訂正)
三三三三	一一	Νουσαν φύσις ιητροί	νυσαν φύσις ιητροί
三三四	一四	de natuur van…znde,	de Natuur van…zynde,
三三六	一二	Verkaaring	Verklaaring
三三七	一八	ノ Dicu はキリスト	ノ節は抹消
三三九	六	「神 <small>キツク</small> のしゆぐ」	「神のしゆぐ」
〃	一三	Levens kracht	Levenskracht
〃	二 最後より 行目より	CLADII GALENI	CLACII GALENI
三四一	一三	Oendervinding	Ondervinding

日本医史学会会則抄

第一条 この会は、日本医史学会 (Japan Society of Medical History) としう。

第二条 この会は、事務所を下113東京都文京区本郷二―一―順天堂大学医学部医史学研究室内におく。

第三条 この会は、医史を研究しその普及をはかるを目的とする。

第四条 前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 学術集会、その他講演会学術展観の開催等
 - (2) 機関紙「日本医史学雑誌」「日本医史学会々報」および関係図書等の刊行。
 - (3) 日本の医史学界を代表して内外成の関連学術団体等に機関との連携
 - (4) その他前条の目的を達するために必要な事業
- 第五条 この会の会員は次のとおりとする。
- (1) 正会員

この会の目的に賛同し会費年額四、〇〇〇円を納める者
ただし、外国居住者は年額20ドルとする。

(2) 名誉会員

この会に対し功績顕著であった者で評議員会の議決ならびに
総会の承認を得た者。

(3) 賛助会員

この会の目的事業に賛助し会費年額一〇、〇〇〇円以上を納

める者、または団体。

第六条 正会員にならうとするものは評議員の紹介により、理事長の承認を得て入会金一、〇〇〇円およびその年度の会費を添えて所定の入会申込書を提出しなければならぬ。

第七条 名誉会員は次の各号の何れかに該当し理事会、評議員会が功績顕著と認めた者であることを要する。

- (1) 三十年以上の在籍正会員であつて七十歳に達した者。
- (2) 前理事長。
- (3) 正会員または外国人で功績顕著な者。

名誉会員は終身として会費を免除することができる。

第八条 賛助会員にならうとする者も第六条に準ずる。

第九条 会員には次の権利がある。

- (1) この会の発行する機関誌の無償配布をうけること。
 - (2) 機関誌に投稿すること。
 - (3) 総会、学術大会、学術集会その他の事業に参加すること。
- 第十条 会員は、会費を前納し総会の議決を尊重しなければならぬ。

第十一条 会員は次の事由によってその資格を失う。

- (1) 退会
- (2) 会費の滞納が一年以上を経過したとき。
- (3) 禁治産、準禁治産または破産の宣告。
- (4) 死亡、失踪宣告または会員である団体の解散。
- (5) 第十四条による除名処分。

この会は学術大会を毎年一回開催し、学術集会は随時開催す

る。

第十二条 この会には、年一回学術大会を主宰するために会長を一名おく。

2 会長は、理事会の推薦により、通常総会毎に理事長が委嘱する。

3 会長の主宰する学術大会は、この会の通常総会と同時点で開催することを原則とするがやむを得ない事情のある場合は評議員会または総会の承認を得て変更することができる。

4 会長の任期は、学術大会を議決した通常総会の翌日から次の学術大会を終了するときまでとする。

5 会長は必要に応じ理事会に出席しこれと密接な連絡のもとに計上予算を勘案して企画運営する。

6 会長に事故あるとき、または欠けたときは新に会長を委嘱するまで理事長がその職務を代行する。

7 会長は、学術大会関係事務を委嘱するために、会員のうちから学会委員若干名を選任することができる。

8 学術集会は、随時理事長主宰のもとに開くことができる。

『日本医学雑誌』投稿規定

発行期日 年四回（一月、四月、七月、十月）末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

著者負担 表題、著者名、本文（表、図版等を除く）で五印刷ページ（四百字原稿用紙で大体十二枚）までは無料とし、それを超えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校 正 原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別 刷 別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先 東京都文京区本都二丁目一の一、順天堂大学医学部

医史学研究室内 日本医史学会

編集委員 大島蘭三郎、大塚恭男、蔵方宏昌、酒井シヅ、樋口誠

太郎、室賀昭三、矢部一郎、矢数圭堂 事務担当 鈴木滋子

編集顧問 小川鼎三、A・W・ピーターソン

日本医史学会役員氏名(五十音順)

理事 長	小川 鼎三	常任理事	大島蘭三郎	大塚 恭男	宗田 一	大滝 紀雄	古川 明	會計監事	石原 明	今田 見信	大塚 恭男	大島蘭三郎	大矢 全節	緒方 富雄	小川 鼎三	蒲原 宏	佐藤 美実	酒井 恒	鈴木 勝	宗田 一	中野 操	長門谷洋治	三木 栄	矢数 道明	谷津 三雄	山形 敏一	幹事	酒井 シツ	杉田 暉道	谷津 三雄	矢部 一郎	安芸 基雄	阿知波五郎	青木 一郎	石原 明	石原 力	今市 正義	今田 見信	岩治 勇一	内田 醇	大島蘭三郎	大塚 恭男	大矢 全節	緒方 富雄	小川 鼎三	大滝 紀雄	岡田 博	片桐 一男	川島 恂二	蒲原 宏	久志本常孝	榊原悠紀田郎	酒井 シツ	酒井 恒	佐藤 美実	杉田 暉道	鈴木 勝	宗田 一	高木圭二郎	高瀬 武平
------	-------	------	-------	-------	------	-------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	------	------	------	------	-------	------	-------	-------	-------	----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------	--------	-------	------	-------	-------	------	------	-------	-------

日本医史学会評議員氏名(五十音順)

編集後記

第七八回日本医史学会総会が岐阜県下で開催され、会員の皆様の御協力のもとに盛会裡に終了いたしました。

夏の猛暑の下に、本号の校正をすすめましたが、会員の皆様为本号を手にされるのは、残暑の頃のことかと思ひます。

よく、「文は人なり」といわれますが、本誌の如き学会誌にも同じようなことがいわれるのではないのでしょうか。ただ「人」が「学会」にかわるだけであると思ひ、編集者の一員として心がけております。

そのような意味からも本号の編集より私たちが編集担当のメンバーとして三輪卓爾氏

高山 坦三	竹内 真一	田中 助一	津田 進三	筒井 正弘	土屋 重朗	中泉 行正	中山 米造	中沢 修	中西 啓	中川 沃	長門谷洋治	中野 操	服部 敏良	巴陵 宣祐	樋口誠太郎	福島 義一	藤野恒三郎	本間 邦則	富士川英郎	古川 明	丸山 博	松木 明知	三浦 豊彦	三木 栄	谷津 三雄	山形 敏一	矢数 道明	山下 喜明	山田 光胤	安井 広	矢部 一郎	以上
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	----

に加わっていただきました。これで前述のような本誌編集の意途がより一層たかめられ、会員の皆様にさらに御満足いただけるものがつくりあげられるであろうと確信いたしております。

なおこれは、会員の皆様へのお願いですが、本誌に御寄稿下さるときは、ぜひ一度投稿規程を御確認いただきたいという事があることを、ついでながら付言して編集のしめくりと致します。

昭和五十二年七月二十五日 印刷
昭和五十二年七月三十日 発行

日本医史学雑誌

第二十三巻 三号

編集者代表 大島 蘭 三 郎

発行者 日本医史学会 代表 小川 鼎三

〒一三三 東京都文京区本郷二一

順天堂大学医学部 医学研究室内

振替 東京 六一五二五〇番

製作協力者 金原出版株式会社

〒二三 日本医学文化保存会

〒二三 東京都文京区 湯島三三二四

印刷所 三報社印刷株式会社

〒二六 東京都江東区亀戸

新刊

賀川玄悦先生没後二百年顕彰記念出版

産論・産論翼・読産論

序 顕彰会会長 山田一夫

解題 賀川玄悦と賀川流産科の発展

顕彰会実行委員長 杉立義一

産論・賀川玄悦著

明和2年刊全4巻乾坤67丁

産論翼・賀川玄迪著

安永4年刊乾坤70丁

読産論・橘南谿著

天明4年写本15丁

口絵(玄悦・玄迪・南谿)

序・解題 活版・史料写真80余入

B5 布貼表紙 箱入極上豪華造本

頒価15,000円

研究者用普及版 原寸復刻

解体新書

解題 幡井勉

太田典礼文庫

(安永三年甲午仲秋刊本)

B5函入270P 定価3,900円

—日本古来の薬草療法—

和法

著者 伊沢凡人

薬草として知られている23種について、日本における歴史的な展開をまとめたもの。

B6判 P 320

定価 1,500円

[古典養生書名著選]

延寿撮要

曲直瀬玄朔・慶長4年刊

88丁読下し活字文20頁付

日用食性

曲直瀬玄朔

85丁読下し活字文57頁付

関甫食物本草

名古屋玄医・寛文11年刊

上下巻計125丁

簡易養生記

沼義信・天保14年刊84丁

日養食鑑

石川元混・天保3年刊83丁

並製・洋綴・定価各2,400円

全冊函入価格12,000円

[医心方・現代訳付安政版原文]

医心方・養生篇

現代訳・望月学・安間多加子

B5・洋綴箱入・定価 6,500円

医心方・食養篇

現代訳・望月学

B5・洋綴箱入・定価 4,800円

医心方・鍼灸篇

現代訳・吉田寅

B5・洋綴箱入・定価 6,500円

東京都千代田区神田小川町2-3-2

みどりやビル TEL (03) 293-7681

振替 東京 0-31953

株式会社 出版科学総合研究所

- 7) Cowdry, F.V., 'A Comparison of Ancient Chinese Anatomical Charts with the 'Funfbilderserie' of Sudhoff', *Anat. Rec.* 22(1921) 1-26.
- 8) Bodleian 399.
- 9) Berengario da Carpi, *Commentaria super anatomia Mundini*, Bologna, 1521, pp. xciv, livr.
- 10) See, for Chinese medicine in general, Porkert, M. *The Theoretical Foundations of Chinese Medicine*, Massachusetts Institute of Technology, 1974.
- 11) See Breasted, J.H., *The Edwin Smith Surgical Papyrus*, Chicago, 1931.
- 12) Particularly Anaxagoras and Alcmaeon. See Kirk, G.S. and Raven, J.E., *The Presocratic Philosophers*, Cambridge, 1971.
- 13) Ebbell, B., *The Papyrus Ebers*, Copenhagen and London, 1937.
- 14) Seal, B., *The positive sciences of the ancient Hindus*, London, 1915. Care should be exercised in accepting Seal's identification of the anciently described vessels. Zimmer, H., *Hindu Medicine*, Baltimore, 1948. Kutumbiah, P., *Ancient Indian Medicine*, Bombay, 1962. Hammett, F.S., 'The anatomical knowledge of the ancient Hindus', *Ann. Med. Hist.* 1(1929) 235-333.
- 15) The accounts of Syennesis, Polybus and Diogenes are given by Aristotle, *Historia Animalium* 511 b.
- 16) *Timaeus*.
- 17) Galen's physiological ideas are best seen in *De Usu Partium*. See the translation by E.T. May, *On the Usefulness of the Parts of the Body*, Cornell University Press, 1968.

blood, and not the substance of *pneuma* or air. Galen indeed demonstrated this experimentally, and concluded that the blood contained in the arteries differed from venous blood principally in its admixture with the quality of *pneuma*. But in accepting that the liver was the sole source of blood and that the arterial system was quite distinct from the venous, he was unable to find an obvious passage for blood from the veins to the arteries. Unlike Aristotle, Galen was constrained in his theorizing about the direction of blood flow by the comparatively recent discovery of the cardiac valves. In this difficulty Galen assumed that the septum between the two ventricles of the heart was porous. The pores were of course invisibly small, like the arterial terminations on the skin or the passageways of Plato's fish trap. Galen used a deductive argument from the rationality of nature to prove the existence of these pores: it is observable that the right side of the septum has pits, which do not to the eye penetrate to the left ventricle: but Nature does nothing in vain, therefore these pits must have a use; no other use of them is known, therefore they must penetrate invisibly into the left ventricle. This is an extreme case of structure inferred from function, which in its turn is inferred from a macro-microcosmic rationality of nature, the inference being constrained by the historical momentum of inherited ideas: Galen's thought here involves at least four of the categories of indirect means of generating anatomical ideas as described above¹⁷⁾.

- 1) Ghalioungui, P. *Magic and Medical Science in Ancient Egypt*, London, 1963, pp. 67, 158; but see also Wilson, J.A. 'Medicine in ancient Egypt', *Bulletin of the History of Medicine*, 36(1962) 114-123.
- 2) Hoernle, A.F.R. *Studies in the Medicine of Ancient India, Part 1: Osteology, or the Bones of the Human Body*, Oxford, 1907.
- 3) See Misra, S.S. and Pandeya, S.N., 'History of Hindu medicine', *Bull. Nat. Inst. Sci. India*, 21(1963) 197-205; also Bishnagrathna, K.L., *An English Translation of the Sushruta Samita*, Calcutta, 1907, 3 vols.: vol. 1 p.ix. On Indian Medicine in general, see Filiozat, J. *La Doctrine Classique de la Medecine Indienne*, Paris, 1949.
- 4) Aristotle, *Historia Animalium* 494b; Galen, *Anatomical Procedures*, book 1, chapters 1 and 2.
- 5) *Anatomical Procedures*, book 4, chapter 3.
- 6) *Historia Animalium* 491 a.

Aristotle, argued that all vessels originated in the heart and that therefore that the fundamental pair of vessels was simply a system of upper and lower branches.

Many of these extremely old ideas are found in the Galenic system of physiology, which determined medical thinking up at least to the time of Harvey. Galen contrived to have an anatomical connection between the nose and brain, as did the cerebral pneumatists, for the entry of pneuma to the ventricle for the elaboration of psychic spirit. He also described how the quality of pneuma, but not its substance, moved from the lungs to the heart, a physiological necessity derived from the cardiopneumatist tradition. By his time anatomy was an independent discipline, and comparatively competent at the animal level. Galen therefore knew the pulmonary artery and vein, but he called the artery the arterial vein, because although it looked like an artery, Galen considered that it carried venous blood, and he called the vein the venous artery because despite its venous appearance, its function for Galen was to serve the purposes of respiration: that is, to carry the quality of the inspired pneuma from the lungs to the heart, from where it was carried to all parts of the body for the provision of heat, life and sensation. So Galen also adopted part of the inspired pneuma tradition, unlike Aristotle, for whom pneuma was innate. Galen also adopted part of the innate pneuma tradition by having innate faculties. The purposes of respiration were furthered in Galenic physiology by the extreme terminations of the arteries which opened out on to the skin, drawing in pneuma as required just as the heart was said to draw it in from the lungs. These pores at the skin were invisibly small, and they may in Galen's account reflect Empedocles' description of pores. In their invisibility they were as hypothetical as the respiratory pathways in Plato's fish trap, of which Galen must have been familiar, or as the fine vessels of the Indians, or the pathways for forces on which the Chinese acupuncture points rested.

This complete separation of the arterial, or respiratory system based on the heart and lungs from the venous, springing from the liver, being culled from a number of already old traditions, not only put Galen into a difficult position but left physiology in error up until Harvey. Galen's difficult position was that he insisted against Erasistratus that the arteries contained

vessels, then, all agree that the centre of the system is a fundamental pair of vessels running the length of the body. The variation in the accounts seems to indicate different theoretical backgrounds in physiology. Those who believed that the pneuma entered the brain as the seat of the soul describe the vessels as originating in the brain and passing down the body. This origin is said to involve the coming together of many fine branches to form the fundamental pair. Other accounts that do not involve a pneumatic cerebral centricity argue that the vessels arise in the body and extend to the head, ramifying before reaching it. The two accounts are essentially similar in morphological terms but differ in the sense of functional direction implicit in them. The cerebral pneumatists of course believed in an inspired rather than innate soul and part of the function of the vessels was to convey the inspired pneuma to all parts of the body for the purposes of vivification and sensation. The windpipe, from mouth to lungs was called *arteria*, just as the main air-carrying vessel from heart to body. Physical connections of the vessels to the heart are not prominent in these accounts, as we would expect. There were also cardiac pneumatists, and their anatomical schemes had to include connections between the lungs and the heart, rather than between the nose, mouth and brain, as in the cerebral pneumatists' view.

A second problem here confuses the picture. It was of course recognised that the blood vessels contain blood, which caused difficulties in explaining how they also carried pneuma. At the earliest stage of Greek medicine, arteries were not distinguished from veins, but it was soon recognised that in the dead animal some vessels were full of blood and others empty. Following the structural distinction between the veins and arteries, it was argued by some that the arteries were essentially pneuma-carriers and that the veins were the only true blood vessels. In the gutted abdomen the two fundamental vessels were characterised by proximity or connection to the 'pair' of vessels that by their asymmetry served to identify right and left sides of the body, the liver and spleen. The liver had had an association with blood since the Mesopotamians, and some writers who were not strongly cardiocentrist argued that the vena cava originated in the liver, carrying blood derived from the food all over the body. Cardiocentrists, such as

can be seen as the background to some of the earliest accounts from Greece of anatomy. The surgical accounts of the bones did not enter into the general medical literature at anything above the practical level. The prime interest of the early writers was the vessels. This seems to be due to the importance accorded to the vessels as a result of their manifest but complex association with the heart and brain, as alternative seats of the soul or as the seats of different souls. This association was derived from primitive anatomical observation, and the importance of the heart and brain from primitive physiological speculation. The nature of the vessels in the absence of observation was open to change in the way described, but appears to have conformed with one constraint derived from analogical inference from animal anatomy: in the animal gutted for cooking, the vena cava and aorta appear as a large pair of vessels one on either side of the spine. Each forks at the level of the lower limbs, sending a branch into each, and each vessel disappears unbranched into the diaphragm. The 'pluck'-the heart and lungs-is removed from the thorax of the animal above the diaphragm in preparation for cooking, and the relationships of the vessels, heart and lungs would not be known observationally in *situ* at the level of primitive anatomy, and if consciously looked for, were nevertheless complex. However, observation of the external appearance of man or animals, another category of indirect method as described above, would reveal the vessels of the throat, apparently proceeding up to the brain unbranched from the fundamental pair of vessels seen in the abdomen of gutted animals. The inference that these vessels were continuous through the unknown region of the thorax was perhaps confirmed by observation that in the young of some animals the vena cava at least appears to be a straight vessel, proceeding directly through the right atrium of the heart and thus apparently merely inosculating with the ventricle, which alone was often thought of as the heart proper.

Five authors before Aristotle give accounts of the vascular system which are similar enough for us to be invited to imagine that there was a commonly agreed schema in early Greek angiology. Syennesis, Polybus¹⁵⁾ and effectively Plato¹⁶⁾ give the fundamental pair of vessels no contact with the heart, while Diogenes and the author of the Hippocratic *Sacred Disease* supply the heart with branches from this pair. Early Greek accounts of the

and by displacing contiguous air in the plenum, set up the 'circular thrust' by which air was again forced into the body. The Sicilian school had developed the idea of breath entering the body through pores in the skin, and in a well known passage reported by Aristotle, Empedocles also describes invisibly small and bloodless channels running through the flesh [to pores in the skin. By means of these channels, air is alternately drawn into and expelled from the body by the motion of blood, as water can be held in or prevented from entering a *clepsydra*. Such channels are no more the result of observation than Plato's fish trap. Even Galen with his superior knowledge of anatomy held that the arteries opened as pores on the skin, performing the same function as the *arteria aspera*, lungs and heart. The hypothetical channels, carrying life-giving fire and air, providing a means of internal communication, active in the normal physiology of the body, had close counterparts in the Eastern civilizations.

In India the flow of cosmic forces through the body was governed by a system of vessels, the *nadi*, and *hira* (or *sira*) as well as the larger vessels mentioned above. The *nadi* in particular corresponded with parts of the cosmos. These vessels all seem to be hypothetical structures, brought into being by the demands of physiology but based on low level anatomical observation. Consequently these anatomical ideas were subjected to the imposition of symmetry, numerically, as in China. Late Vedic commentators said there were 72,000 *hira*. Moreover the hair of the body emerged through 300,000 holes in the skin, and even the ultimate particles of the hair itself were numbered. From the accounts given by Seal, Zimmer, Kutumbiah and Hammett¹⁴⁾ we can reconstruct further details of a physiology, which although not so intimately related to the form and function of the vessels as that mentioned above, is in striking agreement with Greek ideas. The body consisted of macro-microcosmic elements, five in number: earth, air, fire, water and ether. In the body the elements became *dhatu*s, the food substances of the parts. There is a close parallel to the Greek ideas of elements, humours and 'similar' parts: those that are homogeneously composed of elements. As in Greece, health was thought to be a balance, here between the *dhatu*s.

I want to finish this paper by explaining how what has already been said

often connected to the viscera said to have been generated from the traditional five. The vessels were so arranged as to proceed systematically through the three grades of yang and yin and in so doing to pass round the body. Somewhere, at root, or incorporated, are primitive anatomical observations of the major organs and their vascular supply, but these have become almost totally obscured as the descriptions have been assimilated into the natural philosophical picture. The movement of forces and fluids round the body varied with the yang and yin controlling them. The heavens passed through fifty houses in 24 hours, and the circulation was similarly divided into fifty. During the 24 hours there was said to be 60,000 pulses and 135,000 inspirations, and the fluids were thought to travel 810 *chang*. The *chang* comprised ten Chinese cubits, each in turn composed of ten finger lengths, and we can deduce that the total length of vessels through which the blood was said to travel was about sixteen *chang*, perhaps 130 feet. The *Nei Ching* tells us that the blood travelled three finger lengths at inspiration and another three at expiration, and adds that the heart is in control of the blood and vessels. There was a considerable body of Chinese pulse lore, and the pulse was thought to be the movement of the *ch'i*, the life energy, from organ to organ. Some of the number symmetry associated with this movement is obscure, and we do not know its macrocosmic counterpart. It is also interesting that the *Nei Ching* compares the circular motion of the body fluids with the unchanging revolutions of the sun and moon, an idea we meet in a form in Aristotle and Harvey.

The distinction between pathways for immaterial forces and invisibly small vessels for the very subtle substance of a spirit is a fine one, and both kinds of route in the body are safe from sense observation and open to modification under the influence of other ideas. The pathways of Plato's 'fish trap' were not even confined to the physical boundaries of the body. Springing from the fundamental pair of vessels (themselves carriers of sense impressions) it was a system of pathways carrying fire and air, surrounding and penetrating the body. Blood, respired air and sense impressions were carried by the system in the body. Food was digested by the activity of the fire, and propelled into the veins. Air entered the body through the trachea and through the pores of the skin; heated by the central fire, it was expelled

vessels and other fibrous structures and there was no knowledge of the nerves as distinct structures. The Egyptians made a particular study of the pulse, which they knew came from the heart: it was the heart 'speaking' in vessels. The Ebers papyrus is one of the few remaining sources for knowledge of Egyptian medicine. It includes a theoretical account of the heart and vessels, and illustrates some of the general remarks made above. The heart is the seat of the soul, the centre of the body and the source of the intellectual functions. From the heart spreads a ramifying system of vessels, carrying to each part some appropriate substance; urine to the bladder, tears to the eyes and semen to the testes. The vessels, *metu*, not only thus carried substances but they were also responsible for pathological conditions. Humours were carried about the body by the vessels, and when those vessels that reached the liver overfilled with blood, disease resulted. It is interesting to note the early association of the liver and blood, a facet of 'primitive' anatomy that became bound up in later anatomy. Similarly, when the 'anus' (for which we may read rectum) was overfilled, it opened to vessels on either side and gave rise to disease. Similarities have been noted between this and early Greek medical ideas.

Other features of primitive anatomy may be noted in the list of vessels presented in different surviving versions of this work. Firstly, the vessels are numbered, 46 in one version and 22 in another, but we do not know enough about the world-picture of the contemporary culture to understand the significance of these numbers. A gloss to the list¹³) explains that the breath that enters the nose goes to the lungs and heart, which we might expect from what has been said above about the relationships between the breath-soul and heart-soul in primitive physiological observations. Ebbell considers that the air or humour-carrying vessels, concerned in pathology, are the veins, and that others are those referred to in connection with the pulse, and are the arteries. This seems unlikely.

In China too, there is a numerical symmetry in accounts of the vessels. There were said to be twelve bilateral pairs of main vessels, ten of which were associated with the five traditional pairs of viscera, allowing each pair of vessels to be characterised by their component yang and yin. This association between viscera and vessels was not direct, but the vessels were

thus the source of most of the manifestations of life. The importance accorded to the heart in most civilizations is clear. The Egyptians treated it with reverence in embalming, in contrast to the brain. Crude anatomical observation described the heart in gross terms and its vascular connections in even less precise way. Nevertheless, the physical connections of the heart to the rest of the body were very important in communicating the powers of the soul to the body and the sensory impressions of the body to the soul. Even immaterial influences need pathways, and in schemes where the breath-soul was represented physical tubes were of the essence. The actual complexity of the relationships between the heart, lungs and vessels in man and animals, and the impossibility of observing them in man meant that this area was particularly taken up with descriptions derived from rational sources that have been described above. These hypothetical vessels and pathways, far divorced from empirical observation, are characteristically given symmetry within the body and number-symmetry for the reasons suggested.

The descriptions of the grosser vessels in each case may be closer to primitive anatomical observations, but they contain a considerable component of symmetry. Susruta's account of the vessels in the Indian traditional texts illustrates the same point. There are 24 principal *dhamani* distributed symmetrically from the heart, ten upwards, ten down and four across. Their functions are sensory and humour-carrying, as in other cultures: those that ascend serve the functions of the upper part of the body in carrying the sense of hearing, that of perception of shape, touch, taste, smell and hunger, the faculties of laughter, weeping and, significantly, respiration. The descending *dhamani* are principally concerned with lower physiological activities, supplying urine and other excretions to be voided from their proper organs, and supplying secretions to the respective glands, both activities found also among the functions of the Egyptian vessels. Blood is associated with the liver and spleen, as elsewhere, and of course, the vessels are charged with the function altering and transporting food.

In Egypt too, the vessels assumed an importance commensurate with their connection with the heart, the most important bodily organ. As in other early cultures, little distinction was made between the smaller blood

the world soul. Looked at in another way, there seems to have been widespread the distinction between an *innate* immaterial force, an immanent and heritable cause of vital activity, and an *inspired* breath, vapour or spirit, perhaps material in its nature, supplying the cruder manifestations of physical life, and mortal at least in the sense of losing individuality on the death of the body. The *ch'i* of the Chinese is an innate life force akin to the innate *pneuma* of Aristotle. The inspired *pneuma* of the Stoics and Galen represents another tradition, the breath-soul. The *thymos* of Homer falls also into the latter category, and is opposed to the immaterial and immortal *psyche* or *nous* of other writers. The characteristics of the *animus* and *anima* of the Latin tradition that summarised the Greek philosophies are also those of a higher, immaterial, immortal individuality on the one hand, and a lower, more physical life force on the other. The hierarchical soul-systems of Plato, Aristotle and Galen also reflect this distinction in an elaborated way.

It was natural to look for a principal seat in the body for these two principles of life. It is suggested above that two fundamental primitive physiological observations gave rise to two sometimes conflicting traditions about this important part of the body. Attention was given to the heart as the apparent source of motion and heat, the centre of the body, the most manifest site of an innate force. The inspired breath-soul had a connection with the lungs that even the most primitive knowledge of anatomy could recognise. However, the interpretation of this anatomical connection was a matter of some difficulty. There was one tradition that attempted to link up the lungs and heart anatomically to give the inspired soul a connection with the organ most suited for its domicile within the body. There was another tradition that associated the inspired breath with the brain, again by anatomical contrivances, leaving the heart with its innate faculty. Evidence for the importance of the brain and spinal cord may have been derived from experience of wounds, as we see in the case of the surgical papyri from Egypt¹¹), and in that of those presocratic philosophers of Greece whose attention was caught by the relationships between the sense organs and the brain¹²).

The stronger tradition was that the heart was the seat of the soul and

in early Indian anatomy and in the medieval West. In India, Susruta gave both arms and legs 100 muscles. Homology in this sense is quite different from that described by Aristotle, which is discussed above.

(g) Lastly, anatomical ideas have been generated or modified by certain fundamental physiological observations. The living body is warm, it breathes, it moves with an innate motion and in reaction to things about it: four features it does not share with the dead body. It was an almost universal assumption in ancient civilizations that there was a non-corporeal agency responsible for the appearances of life and which survived the death of the body. It was natural to think that the soul warmed the body and gave it movement; perhaps too the soul was the breath itself, maintaining life in the living, but leaving the body at the final expiration. Experience with animals perhaps led to the idea that the heart is the hottest organ of the body; it was also in continual motion, which seemed to be innate, rather than imposed; personal experience would confirm this, and that vigorous motion of the body involved vigorous motion of the heart; the heart also moved vigorously in strong emotion: was it not the source of heat, of motion and of emotion, that is, the seat of the soul? Primitive anatomy at the animal level, as in the first category above, would supply a physical link, albeit not very satisfactory, between the heart and lungs, by way of which the breath soul could enter the heart. Primitive anatomy also supplied another great reason for supposing that the heart was the seat of the soul and that was that it appeared to be at the centre of a ramifying system of vessels, which no doubt carried its vivifying influence to all parts of the body.

The Results of the Indirect Methods

There were certain widespread ideas in the ancient world about the nature of man that seem to have arisen from these rational modes of arriving at 'knowledge'. A general idea of the existence of some immaterial agency that survived bodily death was associated with the idea of a breath-soul, an idea derived from primitive physiological observation. Macro-microcosmic parallels are evident in both cases, the immaterial agency in the body often being thought of as a cosmic force, and the breath-soul was often part of

metaphysical First Cause, and his work becomes more intellectually satisfying, and worthy of a philosopher, than the anatomical fragments of the surgical texts. It is of course probable that his attention was drawn to the heart in the first place because of its assumed central role in physiology, but the new stimulus to his interest led to a complete monograph devoted to anatomical description. It was necessary for the purposes of understanding the skill of nature to observe her handiwork as minutely and objectively as possible, and so the anatomy of *On the Heart* is for the first time of interest in itself, and the work is genuinely scientific if not in an entirely modern sense.

(e) *Structure inferred from function.* Ideas about structure have often been inferred from ideas on function. In most cases function in turn rested on the wider natural philosophy of the time and culture, as described in the preceding section, but in practice details of anatomy have often been inferred from supposed function 'locally' without reference to the basis of physiological ideas. The idea received characteristic elaboration at the hands of Aristotle, for whom the true nature of a part could not be known without knowledge of its function, for only that revealed its purpose, its final cause, its true place in the whole pattern of knowledge.

(f) *The principles of number symmetry and homology.* One means of imposing a pattern of 'knowledge' on the complex phenomenal world is by the use of mathematics. Where parts can be seen to be related to wholes in numerical terms, then some of the force of explaining the unknown in terms of the known carries over into the new mathematical explanation. The apparent arbitrariness of naturally occurring numbers seems to have been objectionable to the primitive mind seeking regularity and pattern to explain the universe and in anatomical accounts emphasis is often laid on the total numbers of bones, vessels or other organs in the body, and the number is very often rounded off to mathematical convenience, often for use in macrocosmic analogies. In many cases we do not know enough about the prevailing world picture to discover whether it was the determining factor.

The principle of homology expresses a parallel where none is justified, for example in equating the numbers of bones in the fingers, thumbs and toes,

ray theory, and the corresponding ideas of Plato.

Out of one aspect of the macro-microcosm relation grew an idea that helped to develop scientific as opposed to primitive anatomy. In many world systems, man and nature in general were produced by a creator god, and man and his environment were made of the same materials in the same way. To be understandable the way was expressed in the form of an analogy with processes known to man. Plato speaks of dousing and baking of the fundamental substances: an alteration in the Qualities of the Elemental substances. Common to such early descriptions of the fashioning of the human body from macrocosmic constituents was the notion that a balance was achieved, as mentioned above, and that continued life depended on continuation of balance. It was the individual's duty to maintain that balance. The human body was then a model of the macrocosm for moral and religious purposes.

At some point the understanding of the *techniques* by which the body was put together embraced the notion of rationality. It has been recognised that nature was seen as a craftsman in Greek thought, and this emphasises the skill with which the body was put together, but this is not quite the same as assuming that creative nature or god has put the body together in a rational way, for some purpose. The purpose was the well-being of the body, and the parts were so contrived as to co-operate best to this end. Man too had reason, and by observing how the body was put together, could share in the rationality of nature, or learn more about the nature of God. Such a fully developed natural theology was the product of later ages, but we can see its origins in the period under discussion. In fact, its appearance in the literature of the West seem quite sudden.

The anatomical fragments found in the earlier Hippocratic works are either purely descriptive and functional, as in the surgical works, or are explanations of an already existing physiology, as in the work of the cardiac and cerebral-pneumatists. The anatomy is ancillary to a larger scheme. In the Hippocratic *On the Heart* a new feeling appears, which the author expresses as an admiration for the skill of nature as a designer and craftsman in contriving the structure and function of the heart. In considering the appearances of the heart, the author is thus considering an aspect of the

themselves the parts in the food that were similar to themselves. Indian notions were in striking agreement with Greek: chyle from the food passed from the heart to the liver and became blood. The final product of the refining of the life-substance, having supplied the proper nutrient to each organ, was the pangenetically produced semen. The end product of the process in women was blood, produced in a monthly cycle except during pregnancy, when the material was said to be diverted to the breasts and to produce the placenta. The foetus was formed of the mixture of semen and maternal substance, the former producing the hair, bones, nails, teeth, vessels, tendons, muscles and semen, while the soft parts of the embryo were derived from the maternal substance: flesh, blood, fat, marrow, liver, heart and spleen. A male child, it was claimed, was produced from the right hand side of the uterus, a female from the left.

An idea common to East and West was that the semen was connected to or derived from the spinal marrow. The idea can be found in Chinese and Indian medicine, and suggests that the marrow of the spine was considered more important than merely analogue of the marrow of the long bones. Plato justified his derivation of semen from the spinal marrow by reference to the fact that the latter served to connect the divine and immortal soul in the brain with the perpetual reproduction of the species. The idea was curiously widespread and persistent: we find traces of it in Alcmaeon, Pythagoras, Hippo of Rhegium, Diogenes of Apollonia, the Hippocratic *On Generation*, a number of Western medieval sources, and in Leonardo da Vinci, who expressed it in pictorial form. The idea is found in the macro-microcosmic analogy of the *Timaeus* of Plato: the core of the body is the marrow, that is, the spinal medulla, which is composed of the geometrical shapes of the four elements; it secures the two lower souls, although they are located elsewhere. The marrow of the head is the location of the intelligent soul, and the head itself is spherical, like the universe that contains extra-corporeal souls. The political analogy on which this myth of bodily structure rests employs the cardio-centric notion that the second of the three human souls resides in the heart. Filliozat is impressed by the 'remarkable' agreement between the mechanism of pathology in the *Timaeus* and in the Ayurveda, and between the tantric ideas of the geometry of the elements and the visual

and during the process the modifying effect of external philosophies of nature are most clearly felt.

(d) *Anatomy as part of natural philosophy.* The aim of natural philosophy is to render the unexplained phenomena of the world into an explained whole: knowledge of all parts of the universe was to be related in a single coherent scheme of knowledge, and explanation was the fitting of unknown fragments of the world into the pattern of the whole, the 'known'. An essential part of these rational procedures was the analogical argument, whereby the few recognised characteristics of an unknown part are seen to correspond with a pattern of characteristics of a known part, the remaining characteristics of which are then assumed to belong to the unknown. We have seen this procedure at work in inferring human anatomy from animal, and it occurred too in natural philosophy as a whole. The natural philosopher treated of all parts of knowledge indifferently. All was knowledge and all related; that concerned with human anatomy was less observationally based than any other, perhaps, and was naturally influenced by other parts of natural knowledge. Knowledge of man and of the world was very widely crystallised into the analogical macro-microcosm relationship.

The heterogeneity of the observed world led to the desire to see its ultimate reality in a small number of basic, or elementary principles. In Greece of the classical period, and earlier in India, these principles took the form of substantial elements, four in number, and together with their associated Qualities, constituting the real world. The Chinese elementary principles were functional rather than substantial, the five 'phases'. The body and the world at large were made up of the same principles, and both shared the wider relationships of these principles to other aspects of reality, such as seasons or the heavenly bodies. The qualitative or functional aspects of these elementary principles meant that they governed physiological processes, both macro and microcosmic. Health was a balance between the elementary forces in China¹⁰, India and Greece, and disease was the predominance of one. Food, the substance of interchange between the two cosmoses, consisted also of the elementary principles, and the physiology of nutrition, and of other faculties that depended on it, was in India and Greece at least a process of *assimilation* whereby the elementary components of the body attracted to

but by that time the confusion was slowly being cleared away. In the earlier period the ignorant copyist, translator or editor preserved the old form along with the new, and had Latin, Arabic and sometimes Greek words, all originally signifying the same organ, but now taking on a life of their own, being given separate organs, 'ghosts' in the anatomical literature, akin to the bibliographical ghosts of scholarship.

One example is the *vena cava*, 'hollow vein'. The original Greek word for hollow was transliterated, not translated, into the Arabic as a technical term, and its Greek origin was lost sight of when the Arabic word was in turn transliterated into Latin as *chili* or *chilis*. The anatomist of the West already knew the structure called the *vena cava* in a long established Latin tradition, but accepted the existence of a separate *vena chilis*. The result was that the *vena cava*, traditionally regarded as a single continuous vessel, as already mentioned, was now divided into an upper and lower part, one bearing the Greek-Arabic name and the other the Latin. (The situation was later rectified). This kind of thing is so common we might call it the Principle of Reduplication. Another example will suffice. The eye has been an object of particular anatomical interest on the part of the Greeks, the Arabs and the medieval West, and at the end of the Hellenistic period Galen gave a reasonably accurate account of its structure, including the rather difficult description of the relationship between the circular periphery of the lens and the spherical tunics of the eye. A complicated story of confusion and Reduplication presented a medieval westerner with a multiplied series of eye tunics with names derived from the Greek, Arabic and Latin. At the same time degeneration of the written account made the arrangement of the parts simpler, the lens being simply the innermost of a series of concentric spheres. This giving way to a demand for symmetry agreed well enough with the notion that the lens was the organ of vision. An associated drawing in the manuscripts shows the concentric circles: Arabic versions are sometimes drawn with compasses. In some of the Eastern civilizations with a long linguistic continuity, old texts, although not suffering through translation have been successively modified, 'brought up to date', for example the texts of the founding fathers in the medical schools. This makes it very difficult to date some of the medical texts of India, for example,

drawings were still being copied in the West at a time when human dissection was being performed.

Cowdry has suggested that some illustrations from seventh to ninth century China are related to the *fünfbilderserie*⁷⁾. There are also Western manuscript traditions of 'single organ sketches', sometimes associated with the five figures of Sudhoff, for example in a well known manuscript in the Bodleian Library in Oxford⁸⁾. The characteristics of these illustrations are first, a secondary simplification whereby the natural outlines of the original drawing are reduced to a line more convenient to the hand. There are strong parallels here between the illustrations mentioned above and the single organ sketches that illustrate the Chinese system of vessels, each named from an organ. Those best known to historians of Western medicine are in Cleyer's 17th century account of Chinese medicine. Second, an element of symmetry is imposed upon the natural shape by an unconscious desire for neatness on the part of the copyist, which is paralleled in the number symmetry in another of our categories. Original drawings from the object degenerate in this way unless frequently repaired by reference to the object. The early and accurate dissections in China were recorded by drawings as well as measurements and the drawings although printed at an early date, degenerated in the re-cutting of the wood blocks and were found to be unsatisfactory when later dissections were made.

Another technical difficulty in transmitting anatomical ideas in a written form is that met in translation from one language to another. The medium of the scientific revolution in the West was Latin. The transmitted information from the ancient world that made that revolution possible was almost entirely originally set down in Greek, and was successively translated into Arabic, often by way of Syriac, and then into the Latin of the middle ages. In each case the recipient language was technically ill equipped to deal with the sophistications of Hellenistic or Greek vocabulary, and it is entirely characteristic of anatomical texts that obscure terms were either transliterated or reproduced phonetically in the recipient language. The result was that in its final Latin form the old (and new) anatomical literature abounded with synonyms. Berengario da Carpi in the 16th century lists large numbers of synonyms and corruptions of a single anatomical term⁹⁾,

were performed in refutation of the opinions of others. Such considerations lent emphasis to the primacy of sense observation in the methodology of Aristotle and Galen, and indeed the joint purpose of Galen's anatomical works is to inform on matters of morphology and function and to teach a method of investigation based on sense experience that would lead to results firm enough to be valid cumulative parts of the descriptive science of anatomy.

So doubt over the provenance of other people's ideas led to hesitation in accepting them. Indeed, they may have been generated in any of the ways that are now being listed in this paper; but once generated, and once transmitted, they were all equally liable to change under the influence of a number of factors that have influenced scientific ideas in general. First, there are technical difficulties in the reproduction of manuscripts. Repeated copying leads to the introduction of errors into the text. These errors remain in the text until a conscious attempt is made to remove them: this was the task of renaissance scholarship in the West, when comparison of texts and the recognition of the categories of mistakes (for instance dittography) led to the purification of the texts. It is interesting that in the case of anatomy, dissections and experiments were carried out with a view to establishing texts before they were used to further the science.

The business of the scribe and the scholar was to handle the written word, but neither was necessarily an artist. Drawings in manuscripts, open to smaller but more numerous errors during copying, have not survived as well as the words of the text. In a descriptive science such as anatomy drawings are a natural way for a teacher to illustrate structure to his pupils, but the repeated copying of such illustrations when the manuscript was published led to such rapid degeneration that the anatomical manuscripts of antiquity were unillustrated. Galen advised against the drawing of plants, and the few drawings used by Aristotle on his work on animals have disappeared. Where illustrations have survived, as in some herbals and the notable but very curious 'five figure series' of anatomical illustrations described by Sudhoff, they have lost all contact with reality, but have established traditions of their own within the families of surviving manuscripts, a sort of historical momentum that lent them authority; the later five figure series

reticular formation of the cerebral arteries found in some of the domestic animals but not in man. Descriptions of horns of the uterus represent an older mistake deriving from animal anatomy. The vestigial vermiform appendix of man does not appear in the ancient anatomical literature, its place being taken by the large caecum of herbivores.

(b) *Conclusions drawn from the external features of man.* Second, there is direct observation of the external features of man. Both the early Greeks and renaissance Europeans observed the external form of man, principally the external musculature and bony prominences, for artistic purposes. This need not concern us, except in as far as the method led to some errors in inferring internal structure from what could be seen externally. Sometimes an unwarranted continuity of structure was assumed, as when the blood vessels of the neck were thought in early Greece to be continuous with the fundamental pair of vessels in the abdomen (see below). On the other hand discontinuity of structure was suggested where none existed, for example in early Indian anatomy, where the externally obvious bony prominences were regarded as separate bones. Thus the styloid processes were 'wrist bones' and the malleoli 'ankle bones'.

Aristotle consciously uses this method as the converse of discovering the *internal* anatomy of man from that of animals. Here he is arguing from the better known, the *external* features of man, to those of animals⁶.

(c) *Exchange of anatomical ideas.* As a descriptive science with a complex subject matter and in the past infrequent opportunities for investigation, anatomy stood in clear need of co-operative effort. Aristotle was aware of the difficulties facing the single investigator into zoological problems, and Galen saw in general all of natural philosophy as a united co-operative venture, and in particular, anatomy as a progressive science depending on the accumulation of knowledge from different workers.

Yet there were no adequate criteria by which the validity of transmitted data could be judged, and no agreed standard of practice in the production of this data, or the generation of ideas, in the terms we are using here, which would justify acceptance of other people's ideas. A great deal of intellectual energy was consequently spent on examining information acquired in this way, and a large proportion of Galen justifiably famous experiments

nutrition, reproduction, and motion were very similar in each case. Galen used similar arguments in a more anthropomorphic way. Nature, he said, constructed the body in a rational way, constrained only by the physical limitations of the material she was working with. At the lowest level these materials in the living body had *actions*, which arose from their qualitative constitution; at the organic level they had *uses*, each of which was to discharge a particular faculty of the animal in concert with others to the all-encompassing purpose of the ultimate good of the animal. The most noble component of the living body was the soul, both for Aristotle and Galen; it was then the needs of the soul that dictated the form of the organic body. Only by means of the operations of the organic body could the soul exist in the physical world, and only by studying the nature of the organs of the body could we learn about the nature of the soul. The soul of the hare is timorous, as we may learn by examining its body and finding it well equipped with organs of locomotion. The soul of the lion is brave and pugnacious, as we see in its robust body and sharp claws. Galen argued from these considerations that the nature of the soul is revealed not only by structure but in behaviour. Should you observe an ape behaving in a human way, running on two feet and picking things up in its hands, then you could be sure that its soul was in these respects like that of man. It followed from this that its bodily organs would be similar. Being aware of the difficulties involved in inferring human structure from animals, Galen drew up six classes of animals that were each in turn more like man than the one preceding⁵⁵. The rational basis of inferring the structure of an organ in man here was that the inference was the last step in a progressive change, the first five steps being known.

In practice Galen dissected the animals that were most readily available rather than those that were most suitable theoretically. Most of his earlier anatomical descriptions come from the domestic animals, and the animal he normally used as closest to man was the barbary ape. Many errors in human anatomy deriving from animal sources are known to historians, and it will suffice here to mention only a few. By no means are they all attributable to Galen, but many were at least repeated by him. The notorious *rete mirabile* which played such a vital role in his physiology is a

The Indirect Methods of Generating Anatomical Ideas

In the absence of any regular opportunity for empirical anatomical observation, there were a number of ways of satisfying curiosity about the internal structure of man.

(a) *Analogy with animals.* We can assume that most societies have had a primitive anatomical knowledge of the domestic animals. The need to prepare animals for cooking and for the table must have led to awareness of the major internal organs and their relative positions. There is a recognisable similarity in the remaining structure of animals that have been paunched and plucked, that is, after removal of the abdominal viscera and the heart and lungs. The unknown internal structure of man was inferred from that known in animals; that is, the whole internal and external structure of the animal was a pattern in the mind, parts of which --the external features-- were recognised also in the case of man, and the assumption was made that the unknown parts also fitted into the same pattern. In this sense the method is here called rational, as a particular case of the general statement made in the Introduction.

This method has often in the past been developed by the systematic, rather than primitive and accidental, dissection of animals to fill the gaps in knowledge of the human condition. Both Aristotle and Galen tell us that they were unable to dissect the human body, yet both claimed to be able to form ideas about its internal structure from their dissections of animals. In both authors the method was highly rational in consciously examining the validity of the procedures involved⁴. Aristotle's knowledge of comparative anatomy led him to recognise homologous organs: those that are the 'same' organs in different animals, even though performing different functions, such as the flipper of a dolphin, the hand of man and the wing of a bird. The parallel is closer where the same function is involved, as in the case of the limbs of all quadrupeds. Aristotle held that knowledge of the true essence of an organ was derived from consideration of its function. That is, it was the final cause of the organ that dictated its shape and substance. Animals and men had many things in common, particularly the vegetative, reproductive and motive powers; so in men and animals the organs concerned with

men, who had not been able to make use of the opportunities of the German war). The decencies of normal civil burial did not necessarily follow from an express notion of physical or spiritual immortality, and during that part of the middle ages in the West when dissection was a part of the university medical curriculum there was no general opposition to it from the church (although sometimes local episcopal permission had to be obtained). Yet up to the 19th century the material for dissection was always provided by executed criminals, that is, those who had forfeited their rights.

There were also other exceptions from the cultural prohibition on dissection. Apart from those who had forfeited some measure of their claim on immortality, there were those who were in no position to make such a claim. Aborted fetuses and stillborn children were physically human, but sometimes were thought to be without an eternal soul, and in most ages they have provided dissection material when other human material was unobtainable. At what stage in the growth of the foetus the soul is implanted was a traditional problem in the West. At times in Greece it was acceptable practice to leave sickly or weak children exposed to die outside the city, which is perhaps evidence of a feeling that the child is not fully human, with a full complement of the human soul, until it has reached a certain age. It is possible that in ancient India dissections were carried out on the bodies of children less than two years of age for the bodies of adults and older children were treated differently. Certainly in the renaissance in the West foetal material could often be obtained without the problems attached to the adult body. These exceptions to the normal rule meant that the literature on anatomy from the ancient world is studded with fragments of anatomical knowledge derived by observation. As the observations were rarely repeated, these fragments of knowledge were treated just like anatomical ideas derived from other sources, undergoing degeneration and elaboration in different ways. The early Chinese anatomical measurements have survived intact but the drawings and nonquantitative descriptions have lost any obvious relation with an observational source. This is discussed below. On the whole, we are faced with a collection of anatomical ideas that were held to be knowledge at the time, but which could not be verified at will by personal observation.

In the West neither Aristotle, Galen, nor the Arabs who preserved their writings could dissect the human body.

There were however occasional exceptions. Most important was the comparatively short period in Alexandria about a generation or so after Aristotle, when his teaching, and that of Plato, on the distinction between soul and body contributed to the atmosphere in which dissection, and some say vivisection, of the human body was possible. Exceptions too occurred in the East. The Indian criminal without ears or nose suffered in eternity as a result of the normal sanctions against mutilation being lifted. Enemies of the state forfeited all rights in eternity, whether they were foreigners or treasonable nationals. Sometimes they were dissected to satisfy curiosity; in the early part of the first century AD in China, we are told by the *Han Annals*, the rebel Wang-Sun Ching was captured and dissected. The physician whom the Emperor consigned to the task had to be helped by a butcher; they measured the organs and inserted bamboo rods into the vessels to measure their length. The weights and dimensions have survived in Chinese medical literature. The Indian surgeon Susruta described a technique of allowing the body to decompose while placed in a basket secured in a river. Successive layers were revealed as the corpse decomposed and were removed with a whisk of grass roots. The purpose of the technique was to reveal structure by direct observation and so was an exception to the anatomical taboo, yet it also avoided the use of the knife in dissection³. The method appears again in that part of the Western middle ages when dissection was allowed, when it was held to be superior to dissection in revealing certain types of structure, the 'similar' parts of Aristotle.

It is clear from a story related by Galen about a century and a half later in the West that the normal prohibition against human dissection was lifted when the subjects were enemies of the state: during the German campaign the Roman army inflicted a crushing defeat on the opposing forces, and the Roman physicians had ample opportunity to perform dissections upon the enemy dead. Unable to dissect in civil life, Galen urged upon the reader the moral of the story that the anatomist should train himself in the techniques of dissection upon the bodies of animals so that when the opportunity arose they could take advantage of it (unlike the army medical

anatomical ideas derived from observation we may in the first instance call empirical, although often the distinction cannot be maintained.

The Possibilities of Dissection

We must first look at the prohibitions laid by society on the dissection of the dead. First, it is probable that there was no great demand for dissection. There was no professional need on the part of the physicians and surgeons to dissect, for surgery was largely concerned, in the absence of anaesthesia and antisepsis, with superficial disorders and attention to bones and joints, and the physician had no need of anatomical knowledge. Knowledge of anatomy has generally been sought by those with a wider, philosophical interest in knowledge for its own sake, not for its practical application. No doubt demand for dissection was not encouraged by the fact that cutting into the body of a person recently dead is unnatural and disgusting to the ordinary man, but the most serious difficulty that lay in the way of anyone who wished to dissect was religious teaching about the afterlife. The very widespread idea of a life after death often included the notion that the physical body in some way shared in the immortality of the soul. The Greek *hades* was peopled with insubstantial shades with nevertheless recognisable bodies. It is a commonplace that ancient burials contain food for the use of the departed.

It followed that the immortal body of the afterlife shared some of the characteristics of the living body, and it was believed that mutilation of the body during life or shortly after death would perpetually disfigure it. The Egyptians thus feared mutilation of the dead body for religious reasons, but for the same reasons they feared the decay of the dead body. In this difficulty they mutilated the body only so far as necessary to preserve it by embalming. In a ritual act, the hereditary caste of *paraschists* took upon themselves the sin of opening the body, allowing the embalmers to proceed untainted¹⁾. In India it was held that access to a higher life was denied to the spirit of a mutilated body; this was the real punishment that lay behind the practice of lopping the noses and ears of criminals. Hoernle²⁾ has suggested that the rise of neobrahmanism and the consequent avoidance of contact with the dead provided no opportunity for anatomical investigation.

RATIONAL AND EMPIRICAL METHODS IN EARLY WESTERN AND EASTERN ANATOMY*

By Roger French**

Introduction

In most early cultures dissection of the human body was impossible. Man nevertheless had a great natural curiosity about his own internal structure, just as he did about the world in which he lived. Without any possibility of satisfying this curiosity about his structure by direct methods he had to resort to indirect methods. Anatomy is a descriptive science (and not for example predictive) and in general the status of descriptions within a descriptive science is very important, as they are not open to confirmation or falsification by other means within the science; human anatomy was then a descriptive science without even direct observational means of producing descriptions, and was an extreme case of a science depending on other means of generating the 'knowledge' of which it consisted.

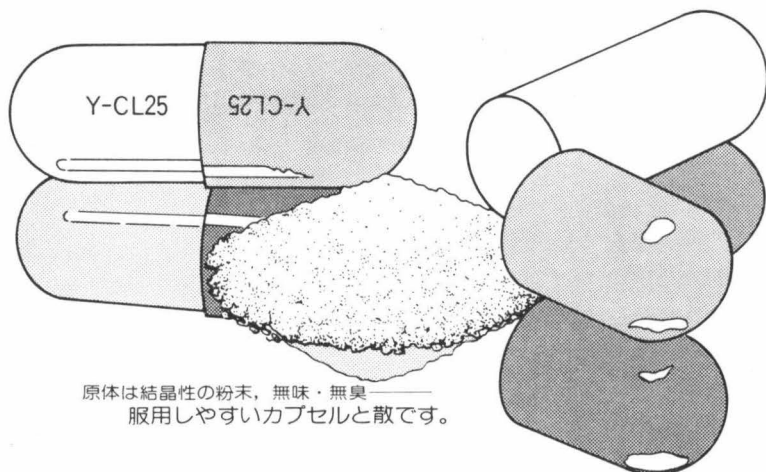
Because these methods were wholly indirect, they were particularly open to the kind of influences that have modified scientific ideas in general. The purpose of this paper is to suggest that these indirect methods and the 'knowledge' so gained have similarities in different cultures and at different times; and that this illustrates some of the factors affecting the generation and transmission of scientific ideas. The anatomical descriptions, the 'knowledge' of these cultures and periods were anatomical *ideas* having a role similar to that of other ideas of the current world picture; they belong to the history of anatomy as much as morphological ideas judged by modern criteria. Most of the indirect methods of generating these ideas were rational in the sense that the intellect rather than the senses was employed; and

* This paper was presented at The First International Symposium (1976),
Division of Medical History of the Taniguchi Foundation

** Wellcome Unit for the History of Medicine, Cambridge

高脂質血症—動脈硬化症

脂質代謝改善剤
コレソルビン[®]
シンフィブラート



原体は結晶性の粉末、無味・無臭
服用しやすいカプセルと散です。

〈特長〉

- 血清コレステロール、中性脂肪、 β -リポ蛋白など、血清脂質像を改善します。
- 組織内のコレステロール、中性脂肪を増加させることなく、血中のそれらを低下させます。
- 耐糖能に好影響を与えます。
- 原体は結晶性の粉末で、製剤は無味・無臭のため服用しやすい。〈ゲップなどの不快な症状がありません〉

〈適応症〉

下記諸症に伴う高脂血症の改善
動脈硬化症、脳動脈硬化症、冠動脈硬化症、高血圧症、糖尿病

〈用法・用量〉

カプセル剤：通常1日3~6カプセル(シンフィブラート0.75~1.5g)を3回に分けて食後投与する。
なお、年齢・症状により適宜増減する。
散 剤：通常1日1.5~3.0g(シンフィブラート0.75~1.5g)を3回に分けて食後投与する。
なお、年齢・症状により適宜増減する。

〈使用上の注意〉

- 1) 本剤は抗凝血薬と併用しないこと。
- 2) 本剤の投与により、GOT、GPTなどの血清トランスアミナーゼ値の上昇があらわれることがあるので慎重に投与すること。
- 3) 本剤の投与により、ときに食欲不振、嘔気、腹部膨満感、下痢等の胃腸症状があらわれることがある。
- 4) 本剤の投与により、ときに皮膚発赤があらわれることがあるので、このような場合には投与を中止すること。

〈注意〉

- 1) 散剤は特殊被膜を施してあるため、調剤時強く混和すると、被膜が破れる恐れがある。従って調剤時強く混和しないこと。
- 2) 湿気をさけ保存すること(散剤のみ)。

〈包装〉

カプセル(250mg)：〔識別コード Y-CL25〕
6×100, 6×250, 1500, 6×1000
散(50%)：100g, 500g

〈健保適用〉



吉富製薬株式会社
大阪市東区平野町3丁目35番地

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 23. No. 3

July 1977

CONTENTS

Articles.

- Psychosomatic Illness in the Heian Era.....
based chiefly on the case of Fujiwara Michinaga
.....Toshiro HATTORI...(321)
- SEMMELWEIS and PLENCK From the History of
Medicine in HungaryJunichi YASUDA...(331)
- Wilhelm Dönitz; One of the Pioneers of Anatomy,
Forensic Medicine and Hygiene in Japan.
.....Tsuneo KOSEKI...(349)
- On the Yakuwo-jiSachiwo KUME...(362)
- Folk Curing of Mental Illness at Johge-Spa;
Historical ReviewGenshiroh HIRUTA...(370)
- Rational and Empirical Methods in Early
Western and Eastern AnatomyRoger FRENCH...(427)
- Materials**(381)
- Miscellaneous**(388)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1, Bunkyo-Ku, Tokyo